

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 サーバー機能 概説およびインストール

バージョン 8.2

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 サーバー機能 概説およびインストール

バージョン 8.2

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典：	GC09-4836-01 IBM® DB2 Universal Database™ Quick Beginnings for DB2 Servers Version 8.2
発行：	日本アイ・ビー・エム株式会社
担当：	ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

第 1 部 DB2 Universal Database について	1
第 1 章 DB2 サーバー	3
DB2 UDB Enterprise Server Edition	3
DB2 Workgroup Server Edition	4
DB2 UDB Express Edition	5
第 2 章 DB2 クライアント	7
DB2 クライアント	7
クライアントのタイプ	8
DB2 Run-Time Client Lite	8
DB2 Run-Time Client	9
DB2 Administration Client	9
DB2 Application Development Client	10
DB2 バージョン 8 クライアントを使用して DB2 UDB バージョン 7 サーバーにアクセスする	10
第 2 部 DB2 サーバーの移行	13
第 3 章 移行での考慮事項	15
DB2 UDB バージョン 8.2 への移行	15
「DB2 Migrate Now!」 Web サイト	15
移行の制約事項	15
逆移行の制約事項	17
移行に関する推奨事項	17
移行スペースに関する推奨事項	19
パーティション・データベース環境での DB2 の移行	21
移行テストの考慮事項	21
Explain 表の移行	22
第 4 章 移行前のタスク	25
DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ	25
DB2 の移行前のシステム構成設定の記録	26
DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更	27
データベースが移行できる状態にあることの確認	28
移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする	29
第 5 章 DB2 サーバーの移行 (Windows)	31
DB2 UDB の移行 (Windows)	31
データベースの移行	32
新規システムへのデータベースの移行	34
DB2 UDB バージョン 8 64 ビットへの移行 (Windows)	36
第 6 章 DB2 サーバーの移行 (UNIX)	37
DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)	37

インスタンスの移行 (UNIX)	38
DB2 Administration Server (DAS) の移行	39
データベースの移行	40
新規システムへのデータベースの移行	42
DB2 バージョン 8 64 ビットへの移行 (UNIX)	44
AIX バージョン 4 上の DB2 バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に移行する	46

第 3 部 DB2 UDB サーバーのインストール

第 7 章 インストールの概要	51
DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)	51
単一パーティションのインストール (Windows)	53
パーティション・インストール (Windows)	54
単一パーティション・インストール (UNIX)	54
パーティション・インストール (UNIX)	55
DB2 ユーザーおよびグループ (UNIX)	56
ユーザー権限の付与 (Windows)	57
DB2 UDB システム管理者グループ (Windows)	58
Kerberos 認証	59

第 8 章 インストール要件

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)	61
NIS インストールの注意点	62
DB2 サーバーのインストール (Windows)	63
DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)	63
DB2 Universal Database インストール時のセキュリティ問題	65
DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)	68
パーティション DB2 サーバーの環境の準備 (Windows)	71
高速コミュニケーション・マネージャー (Windows)	73
仮想インターフェース・アーキテクチャー	73
DB2 サーバーのインストール (UNIX)	74
DB2 サーバーのインストール要件 (AIX)	74
DB2 サーバーのインストール要件 (HP-UX)	77
DB2 サーバーのインストール要件 (Linux)	81
zSeries 上での DB2 UDB for Linux のインストール準備	82
DB2 サーバーのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)	83
高速コミュニケーション・マネージャー (UNIX)	86

第 9 章 インストール前のタスク

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)	87
---------------------------	----

IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)	87
DB2 UDB 用の Java SDK レベル	90
DB2 UDB インストールのためのグループおよびユーザー ID の作成 (UNIX)	91
カーネル・パラメーター (UNIX)	93
カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)	93
推奨されるカーネル構成パラメーター (HP-UX)	94
カーネル・パラメーターの変更 (Linux)	95
カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)	96
パーティション・データベース環境のインストール前の追加タスク (UNIX)	96
パーティション DB2 インストールのための環境設定の更新 (AIX)	96
ESE ワークステーションにコマンドを配布する一括作業のセットアップ (AIX)	99
ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー	100
NFS 稼働の検査 (UNIX)	100
パーティション・データベース環境用のファイル・システムの作成	102
必要なユーザーの作成	112

第 10 章 インストール・タスク 119

単一パーティション・データベース環境 (Windows)	119
単一パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストール (Windows)	119
パーティション・データベース環境 (Windows)	122
パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (Windows)	122
参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (Windows)	127
参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)	128
単一パーティション・データベース環境 (UNIX)	132
単一パーティション環境での DB2 サーバーのインストール (UNIX)	132
パーティション・データベース環境 (UNIX)	135
パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (UNIX)	135
参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (UNIX)	144
応答ファイルを使用した、参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (UNIX)	145

第 4 部 インストール後のタスク 147

第 11 章 DB2 UDB のインストール後 149

通知と連絡先のリストのセットアップ	149
パスワードの規則と保守	149
DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加	150
DB2 ノード構成ファイル - db2nodes.cfg (UNIX)	151
ノード構成ファイルの更新 (UNIX)	157

データベース・パーティション・サーバーの相互通信の使用可能化 (UNIX)	158
リモート・コマンド実行の使用可能化 (UNIX)	160
コントロール・センター管理の使用可能化 (UNIX)	161
最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)	161
インストールの検査 (Windows および UNIX)	162
コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査	162
インスタンス所有コンピューター上のレジストリーへのアクセスの検査 (Windows)	163
パーティション・データベース・サーバーのインストールの検査 (Windows)	164
ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの検査	165

第 5 部 DB2 クライアントのインストール 167

第 12 章 DB2 クライアントのインストール (Windows) 169

クライアント要件	169
DB2 クライアントのインストール要件 (Windows)	169
ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)	170
DB2 クライアントのインストール (Windows)	171

第 13 章 DB2 クライアントのインストール (UNIX) 173

DB2 クライアントの要件	173
DB2 クライアントのインストール要件 (AIX)	173
DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX)	174
DB2 クライアントのインストール要件 (Linux)	175
DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)	176
ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)	177
DB2 クライアントのインストール (UNIX)	178

第 6 部 クライアント/サーバー間接続の構成 181

第 14 章 クライアント/サーバー・サポート 183

サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成	183
DB2 バージョン 8 における SNA サポートの制限	185

第 15 章 構成アシスタント (CA) による接続の構成 187

構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成	187
データベース接続の構成	188

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成	188
プロファイルを使用したデータベース接続の構成	190
ディスクバリーを使用したデータベース接続の構成	191

第 16 章 コマンド行プロセッサ (CLP) の使用による接続の構成 193

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成	193
ノードのカタログ	194
DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ	194
DB2 クライアントからの NETBIOS ノードのカタログ	195
クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ	196
データベースのカタログと接続のテスト	197
CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ	197
CLP を使用したクライアント・サーバー接続のテスト	199
構成アシスタントによるデータベース接続のテスト	200

第 7 部 DB2 のアンインストール 203

第 17 章 DB2 UDB のアンインストール (Windows) 205

DB2 UDB のアンインストール (Windows).	205
--------------------------------------	-----

第 18 章 DB2 UDB のアンインストール (UNIX) 207

DB2 UDB のアンインストール (UNIX).	207
DB2 Administration Server (DAS) の停止	207
DB2 Administration Server (DAS) の削除	208
DB2 インスタンスの停止	208
DB2 インスタンスの削除	209
db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)	210

第 19 章 DB2 フィックスパックの削除 213

第 8 部 付録 215

付録 A. 言語サポート 217

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows).	217
DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX).	218
サポートされる DB2 インターフェース言語	218
別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID	219
db2setup コマンドの各国語表示	220

付録 B. DB2 製品 CD-ROM のマウント (UNIX) 223

CD-ROM のマウント (AIX)	223
CD-ROM のマウント (HP-UX).	224
CD-ROM のマウント (Linux)	225
CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)	225

付録 C. DB2 Universal Database の技術情報の概要 227

DB2 の資料とヘルプ	227
DB2 資料の更新	227
DB2 インフォメーション・センター	228
DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ	230
DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX).	232
DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows).	235
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	238
コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール	239
DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する	240
DB2 PDF 資料および印刷された資料	241
DB2 の基本情報	242
管理情報	242
アプリケーション開発情報	243
ビジネス・インテリジェンス情報	244
DB2 Connect 情報	244
入門情報	244
チュートリアル情報	245
オプション・コンポーネント情報	245
リリース・ノート	246
PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	247
DB2 の印刷資料の注文方法	248
DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	248
コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す	250
コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す	250
コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す	251
DB2 チュートリアル	251
DB2 トラブルシューティング情報	252
アクセス支援	253
キーボードによる入力およびナビゲーション	253
アクセスしやすい表示	254
支援テクノロジーとの互換性	254
アクセスしやすい資料	254
ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	254
DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	257

付録 D. 特記事項 259

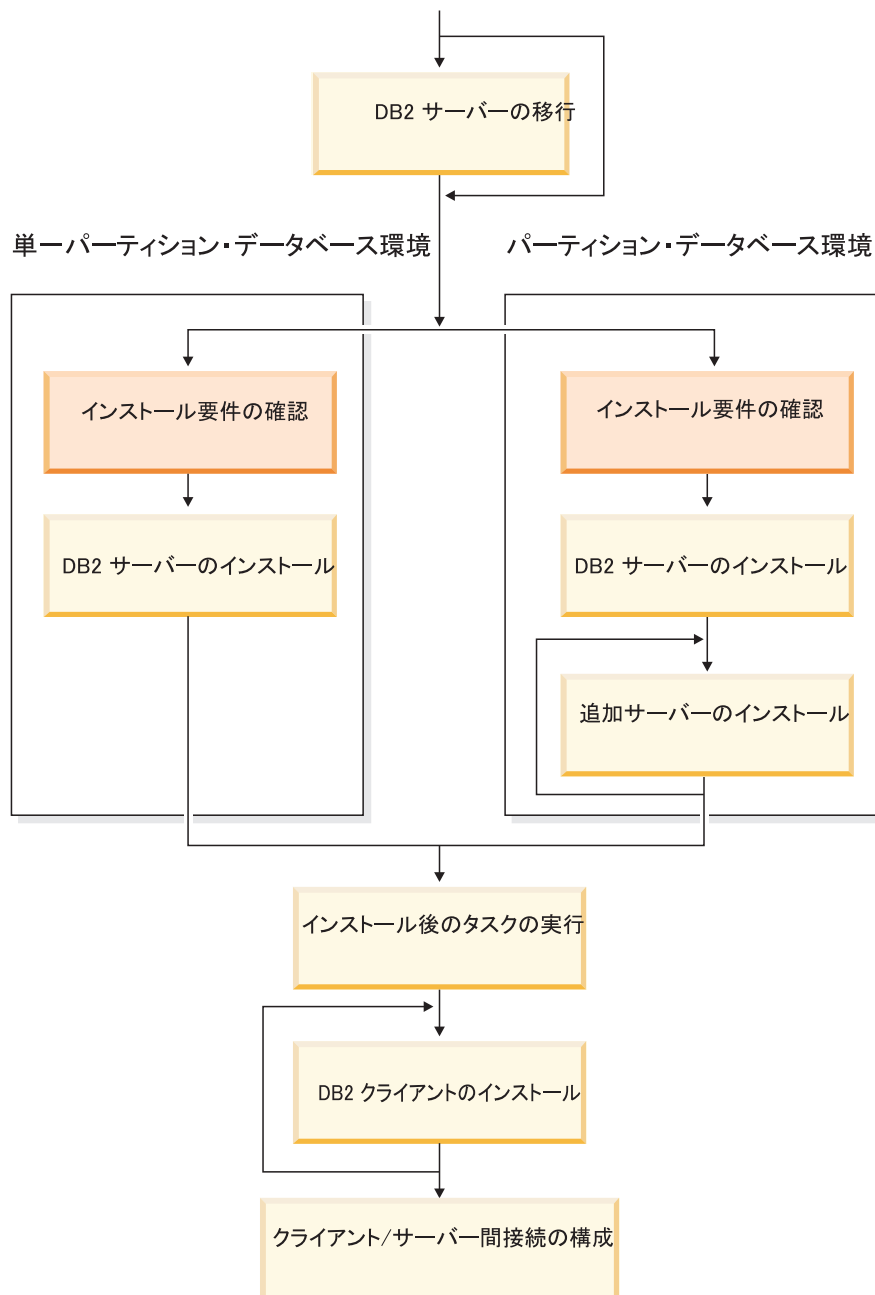
商標	261
--------------	-----

索引 263

IBM と連絡をとる 269

製品情報 269

第 1 部 DB2 Universal Database について



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 1 章 DB2 サーバー

DB2 UDB Enterprise Server Edition

DB2[®] Universal Database (UDB) Enterprise Server Edition (ESE) は、DB2 のマルチユーザー・バージョンであり、これによって、単一パーティションまたはパーティション・データベース環境を作成して管理することができます。パーティション・データベース・システムは、大ボリュームのデータを管理することができ、パフォーマンスの向上や高可用性といった利点があります。その他の DB2 UDB Enterprise Server Edition の機能は、以下のとおりです。

- データウェアハウス・サーバーおよび関連コンポーネント。
- DB2 Connect[™] 機能。これにより、DB2 for iSeries[™] または DB2 UDB for z/OS[™] and OS/390[®] といった、ミッドレンジおよびメインフレーム・データベース・システムに保管されたデータにアクセスすることができます。DB2 UDB Enterprise Server Edition は、ローカルおよびリモート両方の DB2 クライアントのためのサポートを提供します。

DB2 Connect コンポーネントの使用は、サーバーごとに 5 人の登録済みユーザーまでに制限されています。追加ユーザーが必要な場合は、別に DB2 Connect プログラムを入手することが必要です。詳しくは、IBM[®] 営業担当員に連絡してください。

- サテライト管理機能。これにより DB2 UDB ESE は、サテライトとして構成された、DB2 UDB Personal Edition および DB2 UDB Workgroup Server Edition のデータベース・サーバーをリモート側で管理することができます。サテライト機能について詳しくは、サテライト管理に関する資料を参照してください。

DB2 UDB Workgroup エディションには、DB2 UDB ESE に似たマルチユーザー製品が備えられていますが、パーティション・データベース環境を作成する機能や DB2 Connect 機能はありません。

以下の図は、1 つのコンピューターあたり 1 つ、計 4 つのデータベース・パーティション・サーバーを持つ DB2 UDB ESE 構成を示しています。セットアップ手順はこの構成に基づいていますが、パーティション構成のコンピューターおよびデータベース・パーティション・サーバーの数の増減に合わせて、簡単に調整することができます。

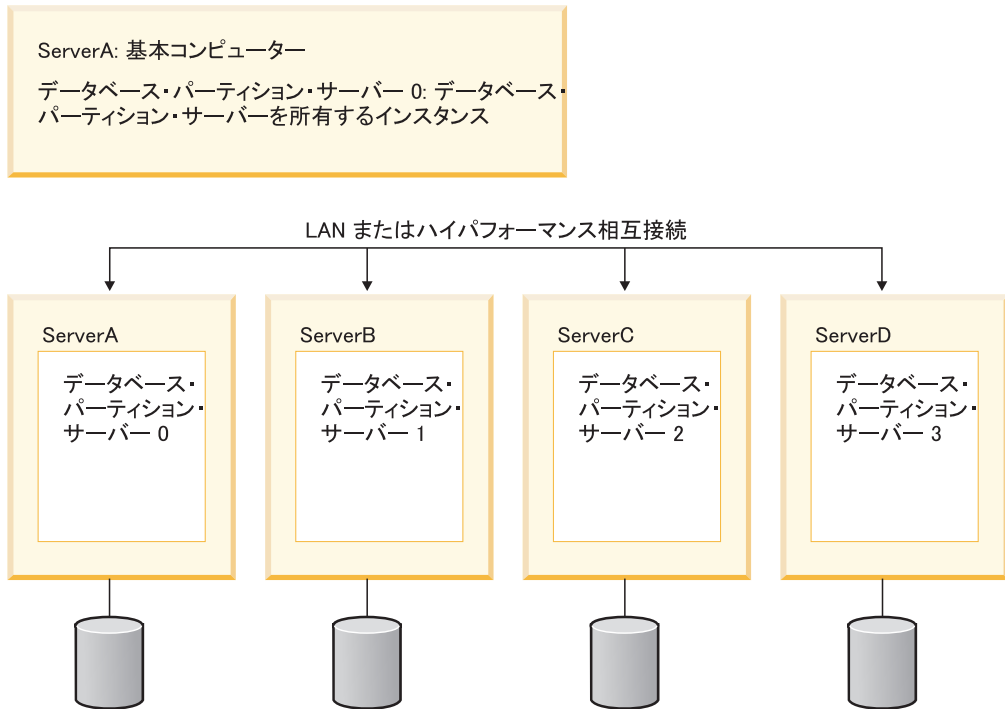


図 1. 代表的なパーティション DB2 サーバー環境。コンピューターを所有する 1 つのインスタンスと、4 つの参加コンピューターがある。

ServerA は、基本コンピューターつまりインスタンスを所有しているコンピューターです。ServerB、ServerC、および ServerD は、追加の参加コンピューターです。

関連タスク:

- 53 ページの『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 54 ページの『パーティション・インストール (Windows)』
- 54 ページの『単一パーティション・インストール (UNIX)』
- 55 ページの『パーティション・インストール (UNIX)』

DB2 Workgroup Server Edition

DB2[®] Workgroup Server Edition は、DB2 のマルチユーザー・バージョンです。これはローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 環境で使用するために設計されており、ローカルおよびリモート両方の DB2 クライアントのサポートを提供します。DB2 Workgroup Server Edition はまた、高可用性のデータウェアハウス機能を備えており、サテライト・コントロール・データベースからリモート側で管理することができます。サテライト機能について詳しくは、サテライト管理に関する資料を参照してください。

関連タスク:

- 53 ページの『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 54 ページの『単一パーティション・インストール (UNIX)』

DB2 UDB Express Edition

IBM® DB2® Universal Database Express (DB2 UDB Express) は、DB2 Universal Database™ バージョン 8 製品ファミリーの最新メンバーです。この製品は、IBM 社の優秀製品である DB2 UDB リレーショナル・データベースの能力、機能、および信頼性と、最小限の投資コストでパッケージ化、インストール、および配備を行える単純な機能とを組み合わせ、中小および中堅規模ビジネスのお客様のデータ管理の必要を満たします。

DB2 UDB Express は、中小および中堅規模ビジネスのお客様 (SMB) 向けに特別に調整されたデータベースです。DB2 UDB Express は、社内のデータベースに関するスキルが最小限しかなく、インストールが簡単なデータベースをご使用のアプリケーション・ソフトウェア・ソリューションに組み込む必要のある顧客向けに設計されています。この製品は、マルチユーザー・バージョンの DB2 で、独立型環境およびローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 環境のローカル・アプリケーションとリモート・アプリケーションをサポートしています。

DB2 UDB Express は、IBM 社のビジネス・パートナーと共同で開発され、以下の主要な機能が備えられています。

配備の単純化

応答ファイルによるインストール機能を使用すると、アプリケーションまたはソリューションの提供者は、ソリューションの自動的な部分として DB2 UDB Express のインストールを組み込むことができます。応答ファイルによるインストールと、スクリプトを使ってデータベースを作成し DB2 UDB Express を構成する機能を組み合わせると、稼働中のアプリケーション・ソリューションを作成する機能をサポートできます。

DB2 UDB Express は、Linux または Windows® オペレーティング・システムに配備できるので、配備するハードウェアとオペレーティング・システムを選択する場合に柔軟性があります。

オートノミック管理機能

DB2 UDB Express には、一式の拡張管理およびオートノミック・コンピューティング機能が組み込まれています。これらの機能により、管理タスクの単純化と自動化がサポートされ、従来リレーショナル・データベースの管理に関連していた多くのコストがなくなりました。

構成アドバイザーには、パフォーマンスを最適化するように DB2 UDB Express 環境を構成する機能が備えられています。ヘルス・センターは、DB2 システムをモニターし、発生する可能性のある操作上の問題に関するアラートを送信し、それらの問題を解決する方法を提案します。

新しいウィザードを使用して、オートノミック保守を独自にセットアップすることもできます。この場合、選択したディスクまたはディレクトリー上に新しいデータベースを作成し、データのディスク・スペースを割り当て、新しいデータベースをパフォーマンス用に構成し、自動保守をオンにして、データベースに注意が必要な場合に電子メールかページャーで通知するよう構成することができます。

24 時間使用可能な設計

DB2 UDB Express は、1 日 24 時間週 7 日稼働をサポートするよう設計さ

れています。保守を実行するためにデータベースをシャットダウンする必要はありません。データベースのバックアップは、オンラインまたはオフラインで実行できます。

アプリケーション開発サポート

DB2 UDB Express は SQL、X/Open、ODBC、.NET、JDBC、Java™、XML、および Web サービスを含むほとんどの業界標準アプリケーション・インターフェースをサポートしています。DB2 UDB Express には、WebSphere® Studio Application Developer、Microsoft® Visual Studio .NET、Microsoft Visual Basic、Microsoft Visual C++、Microsoft Visual InterDev などの一般的な IDE のアドインが備えられています。

アプリケーション開発者は、使い慣れているプログラミング・モデルで DB2 UDB Express の拡張機能を活用することにより、すでに身に着けているスキルを活用して、マーケティングの時間を短縮し、アプリケーション配備全体のコストを削減して、貴重な時間を節約できます。

投資分の保護

DB2 UDB Express には、IBM 社のデータベース・サーバーの系列全体に共通する中核機能があります。データ・ボリューム、データの数、または使用率が増えても、信頼性、セキュリティ、アプリケーション開発インターフェース、および最適化は変わりません。拡張が容易な他のエディションの DB2 UDB にアップグレードして、サポートされるオペレーティング・システムの数を増やすことと、インストールされたハードウェアの数が増えた環境のスループットを上げることをサポートすることにより、DB2 UDB Express に投資した分を回収できます。

詳しくは、「*Quick Beginnings for DB2 Universal Database Express Edition*」を参照してください。

第 2 章 DB2 クライアント

DB2 クライアント

DB2[®] クライアントには以下の 4 つのタイプがあります。

- **Run-Time Client Lite。** DB2 Run-Time Client Lite は、DB2 Run-Time Client のフットプリントの小さいバージョンで、Windows[®] のみで使用できます。Windows Installer Merge Modules もこの製品に使用できます。この機能を使用すると、このクライアントから独自の製品に機能を組み込むことができます。
- **Run-Time Client。** DB2 データベースへの、GUI を使用しない基本アクセスを備えるには、このタイプの DB2 クライアントを使用してください。
- **Administration Client。** DB2 サーバーをリモート側で管理するには、このタイプの DB2 クライアントを使用してください。DB2 Administration Client には、DB2 Run-Time Client で使用できるすべての機能も含まれています。
- **Application Development Client。** ストアード・プロシージャ、ユーザー定義関数、クライアント・アプリケーションを含む DB2 データベース・アプリケーションを開発するには、このタイプの DB2 クライアントを使用してください。DB2 Application Development Client には、DB2 Run-Time Client で使用できるすべての機能も含まれています。

DB2 クライアント上にデータベースを作成することはできません。DB2 サーバーのあるデータベースにアクセスすることのみできます。

クライアント・バックレベル・サポート:

- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーをサポートします。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン 7 サーバーが DRDA[®]-AS を実行している場合にのみ、DB2 UDB バージョン 7 サーバーに接続できます。
- DB2 UDB バージョン 7 およびバージョン 6 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーに接続できますが働きが限定されます。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 Connect[™] バージョン 7 サーバーに接続できません。

関連概念:

- 9 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 9 ページの『DB2 Administration Client』
- 10 ページの『DB2 Application Development Client』
- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 8 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 171 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

- 178 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』
- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『DB2 クライアントのマージ・モジュール』

クライアントのタイプ

DB2 Run-Time Client Lite

DB2[®] Run-Time Client Lite は、アプリケーションが DB2 Universal Database[™] サーバーにアクセスできるようにする基本機能を提供します。また DB2 Run-Time Client Lite には、DB2 Run-Time Client と同様に、JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB および .NET に必要なサポートも含まれます。

これはインストール・イメージ・サイズを削減しているため、DB2 Run-Time Client Lite は大容量配置またはユーザーのアプリケーションとのバンドルに理想的です。

インストール・プログラムは、インストールを実行する際の言語、および英語 (必須) をインストールします。DB2 Run-Time Client Lite は、すべての言語に対するサポートを提供する 1 つの言語と、言語特有のいくつかのイメージから成っています。すべてのイメージには、英語サポートが含まれます。インストールする言語 (複数可) に該当するイメージを使用しなければなりません。

制限:

- DB2 Run-Time Client Lite は、Windows[®] オペレーティング・システム上でのみ使用可能で、TCP/IP および名前付きパイプ通信プロトコルのみをサポートします。
- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client Lite にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- CLI アプリケーション用の DB2 クライアントを使用する前に、有効なバインド・ファイルが置かれているシステムから CLI パッケージをバインドする必要があります。

関連概念:

- 9 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 9 ページの『DB2 Administration Client』
- 10 ページの『DB2 Application Development Client』

関連タスク:

- 171 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『DB2 クライアントのマージ・モジュール』

DB2 Run-Time Client

DB2[®] Run-Time Client は、アプリケーションが DB2 Universal Database[™] サーバーおよび DB2 Connect[™] サーバーにアクセスするのに必要な機能を提供します。機能には通信プロトコルのサポートおよび JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB、および .NET などのアプリケーション・インターフェースのサポートが組み込まれています。

制限:

- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- DB2 Run-Time Client を CLI アプリケーションで利用する場合は、この DB2 クライアントを使用して事前にシステムの CLI パッケージを適切なバインド・ファイルにバインドする必要があります。

サポートされているプラットフォーム:

DB2 Run-Time Client は、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] オペレーティング・システムで使用可能です。

関連概念:

- 7 ページの『DB2 クライアント』
- 9 ページの『DB2 Administration Client』
- 10 ページの『DB2 Application Development Client』
- 8 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 171 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 178 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Administration Client

DB2[®] Administration Client を使用すると、さまざまなプラットフォームのワークステーションから DB2 データベースへのアクセスと管理を行うことができます。DB2 Administration Client には DB2 Run-Time Client のすべての機能があり、さらにすべての DB2 管理ツールおよびシン・クライアントのサポートが組み込まれています。

サポートされているプラットフォーム:

DB2 Administration Client は、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] オペレーティング・システムで使用可能です。

関連概念:

- 7 ページの『DB2 クライアント』
- 9 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 10 ページの『DB2 Application Development Client』
- 8 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 171 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 178 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Application Development Client

DB2[®] Application Development Client は、文字ベース、マルチメディア、およびオブジェクト指向のアプリケーションの開発用のグラフィックおよび非グラフィック・ツールとコンポーネントの集合です。特殊フィーチャーとして、サポートしているすべてのプログラム言語用のデベロップメント・センターとサンプル・アプリケーションを含んでいます。Application Development Client には、DB2 Administration Client 製品の一部として提供されるツールとコンポーネントが組み込まれています。

サポートされているプラットフォーム:

DB2 Application Development Client は、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] オペレーティング・システムで使用可能です。

関連概念:

- 7 ページの『DB2 クライアント』
- 9 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 9 ページの『DB2 Administration Client』
- 8 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 171 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 178 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 バージョン 8 クライアントを使用して DB2 UDB バージョン 7 サーバーにアクセスする

DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントから DB2 Connect バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

DB2 バージョン 8 クライアントから Linux、UNIX、または Windows オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーにアクセスするには、以下の作業を行う必要があります。

- サーバーに DB2 バージョン 7 フィックスパック 8 以降をインストールします。
- **db2updv7** コマンドを実行します。

DB2 バージョン 7 フィックスパックのインストール方法については、DB2 バージョン 7 フィックスパックの **Readme** およびリリース情報を参照してください。

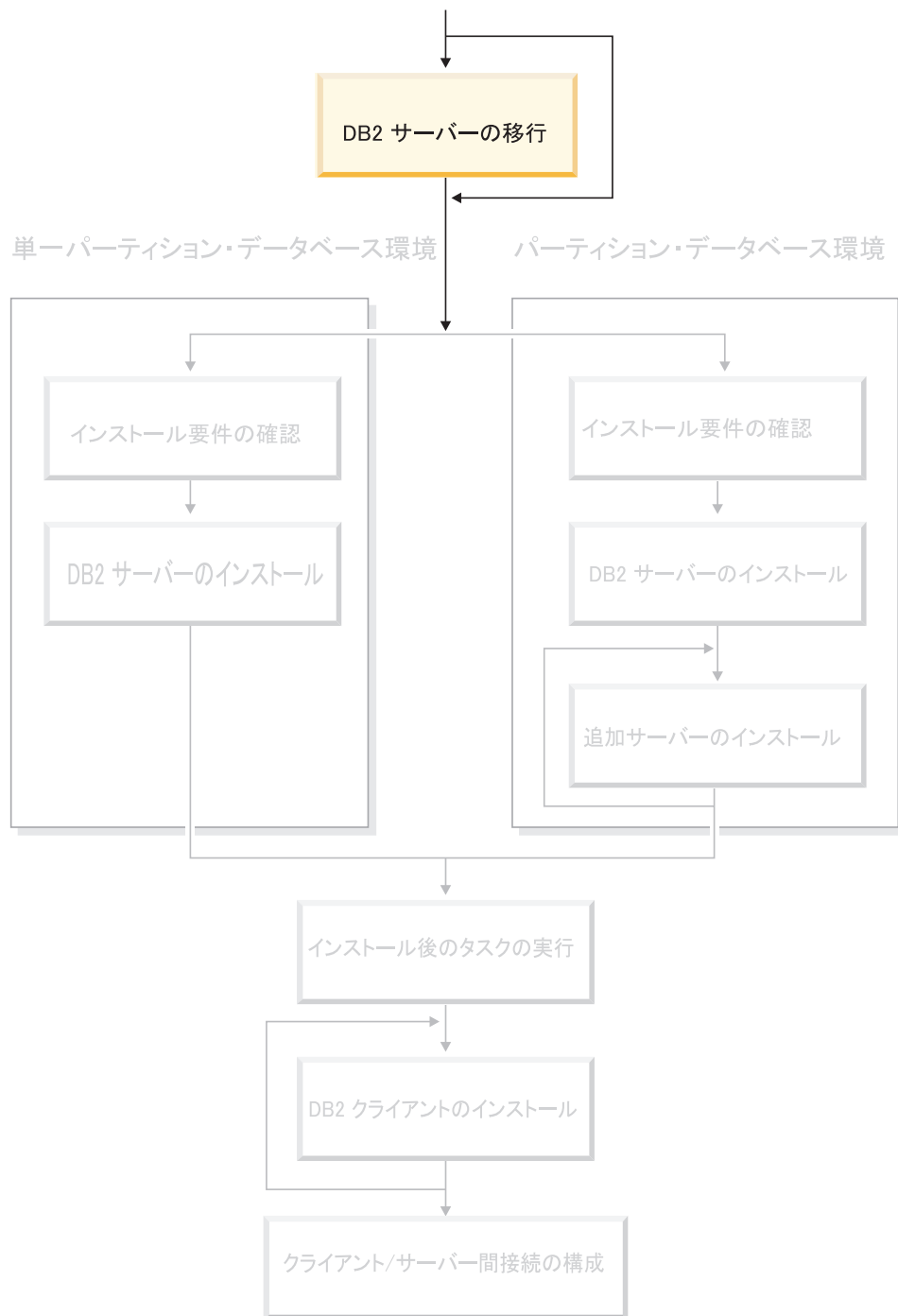
関連概念:

- 7 ページの『DB2 クライアント』

関連資料:

- 183 ページの『サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成』

第 2 部 DB2 サーバーの移行



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 3 章 移行での考慮事項

DB2 UDB バージョン 8.2 への移行

DB2 UDB バージョン 8.2 への移行は、現在インストールしている DB2 UDB のレベルに応じて異なります。

DB2 UDB バージョン 8 (フィックスパックがインストールされている場合とされていない場合)

DB2 UDB バージョン 8 をインストールしてある場合は、単に DB2 バージョン 8.2 フィックスパックを使用して DB2 バージョン 8.2 をインストールするだけでかまいません。Linux および UNIX オペレーティング・システムでは、フィックスパックを適用するのに必要な場合は、その後に **db2iupdt** コマンドを実行する必要もあります。

古い DB2 バージョン 8 フィックスパックから新しいバージョンに移動する場合は、移行後に **db2updv8** コマンドを実行することもお勧めします。このコマンドは、複数の組み込みルーチンを使用可能にすることにより、データベース内のシステム・カタログを更新して現行レベルをサポートするようにします。**db2updv8** コマンドの実行は必須ではありませんが、このコマンドを実行しないと DB2 UDB バージョン 8.2 の一部の機能が作動しなくなります。

DB2 UDB バージョン 6、DB2 UDB バージョン 7、または DataJoiner バージョン 2 DB2 UDB バージョン 6、DB2 UDB バージョン 7、または DataJoiner バージョン 2 をインストールしてある場合は、すべてのプラットフォーム上で直接 DB2 バージョン 8.2 に移行できます。

「DB2 Migrate Now!」 Web サイト

「IBM Migrate Now! to DB2 UDB」Web サイトには、Oracle、Sybase、および Microsoft SQL server からの移行に関する非常に重要なリソースがあります。また、アプリケーション、データベース設計、およびデータを DB2 UDB に移行するのに役立つさまざまなツールや情報もあります。

Web ブラウザーで以下のアドレスを指定してください。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/migration/>

移行の制約事項

DB2 UDB バージョン 8 に移行する前に、以下の制約事項に留意してください。

- 移行は以下のものからのみサポートされます。
 - DB2 UDB バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。Linux はバージョン 6 フィックスパック 2 でなければなりません。)

- DB2 DataJoiner V2.1.1 (32 ビット) (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントから **migrate database** コマンドを発行して、データベースを DB2 バージョン 8 サーバーに移行することができます。ただし、DB2 UDB バージョン 6 またはバージョン 7 クライアントから移行コマンドを発行して、データベースを DB2 UDB バージョン 8 サーバーに移行することはできません。
- DB2 DataJoiner V2.1.1 から移行する場合は、IBM 以外のデータ・ソースをサポートするために DB2 Information Integrator が必要です。
- プラットフォーム間の移行はサポートされていません。例えば、Windows 上の DB2 サーバーから UNIX 上の DB2 サーバーへデータベースを移行することはできません。
- 複数のコンピューターを持つパーティション・データベース・システムを移行する場合、データベースの移行は、すべての参加コンピューター上に DB2 UDB バージョン 8 をインストールした後に実行する必要があります。すべての DB2 移行コマンドを、各参加コンピューターで実行することが必要です。
- Windows では、1 つのコンピューターにインストールできる DB2 UDB のバージョンは 1 つだけです。例えば、すでに DB2 UDB バージョン 7 がインストールされているところに DB2 UDB バージョン 8 をインストールすると、インストール中に DB2 UDB バージョン 7 は除去されます。Windows オペレーティング・システム上での DB2 のインストール中に、すべてのインスタンスが移行されます。
- ご使用のデータベース内のユーザー・オブジェクトは、DB2 UDB バージョン 8 の予約スキーマ名をオブジェクト修飾子として持つことはできません。これらの予約スキーマ名には SYSCAT、SYSSTAT、および SYSFUN があります。
- 名前 BIGINT、REAL、DATALINK、または REFERENCE を使用するユーザー定義特殊タイプは、データベースを移行する前に名前変更する必要があります。
- 以下のいずれかの状態にあるデータベースは、移行することができません。
 - バックアップ・ペンディング中
 - ロールフォワード・ペンディング中
 - 1 つ以上の表スペースが異常状態
 - トランザクション不整合
- バックレベル (DB2 バージョン 6.x または Version 7.x) のデータベース・バックアップのリストアがサポートされていますが、バックレベル・ログのロールフォワードはサポートされていません。
- データベース・バックアップ時刻と DB2 UDB バージョン 8 移行の完了時刻との間に実行されたデータベース・トランザクションは、リカバリー不能です。

関連概念:

- 「IBM DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド」の『DataJoiner の移行の制約事項』
- 「IBM DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド」の『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

関連資料:

- 17 ページの『逆移行の制約事項』

逆移行の制約事項

DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 以降、1 つのデータベースでサポートされる表スペースの最大数が 4096 から 32768 に増えます。

たいていの場合、新規表スペース制限を使用するための変更の通知や何か特別なことをしなくても、データベースを DB2 UDB バージョン 8 から DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 に移動することは可能であるはずですが。

DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 (またはそれ以降の DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック) から DB2 UDB バージョン 8 レベルにデータベースを戻す場合には、それに関連した以下の制約事項に注意してください。

- DB2 バージョン 8.2 から DB2 バージョン 8.1 に移動して戻す場合は、DB2 バージョン 8.1 に戻す前に **db2demigdbd** コマンドを実行する必要があります。**db2demigdbd** は、データベース・ディレクトリー・ファイル逆移行ツールの一種で、データベース・ディレクトリーをバージョン 8.1 の形式にリストアします。
- 4096 より大きい表スペース ID を含むデータベースを、DB2 バージョン 8 フィックスパック 1 以降から DB2 バージョン 8 に移動することは、サポートされていません。これを行おうとすると、動作が変則的になり、操作は不適切になります。
- 4096 より大きい表スペース ID を含むデータベース・イメージを、DB2 バージョン 8 で復元することはサポートされていません。これを行おうとすると、動作が変則的になり、操作は不適切になります。
- DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 (またはそれ以降の DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック) から DB2 UDB バージョン 8 に戻すと、DB2TSCHG.HIS ファイルを除去するまで、ログ・スキップ機能は使用不可になります。

関連概念:

- 17 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 32 ページの『データベースの移行』
- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 15 ページの『移行の制約事項』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2demigdbd - Demigrate Database Directory Files コマンド』

移行に関する推奨事項

データベース移行を計画する際には、以下の推奨事項を考慮してください。

DB2® UDB がレプリケーションを使用する場合は、移行の前にログ・ファイルをバックアップする

DataJoiner® および DB2 UDB データのレプリケーションを使用する場合には、移行の前に、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。

DB2 レプリケーション環境に関する完全な情報は、<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> の、「IBM® DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド」の『Migrating to SQL Replication Version 8』を参照してください。

DataJoiner インスタンスの移行

DB2 レプリケーション用のキャプチャーまたはアプライ・プログラムを実行している DataJoiner または DB2 UDB のインスタンスを移行する場合は、このインスタンスを移行する前に、レプリケーション環境の移行の準備を行う必要があります。

DB2 レプリケーション環境に関する完全な情報は、<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> の、「IBM DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド」の『Migrating to SQL Replication Version 8』を参照してください。

ハードウェアおよびオペレーティング・システムのアップグレードは、DB2 UDB の移行とは別個に行う

ハードウェアおよびオペレーティング・システムのアップグレードを DB2 の移行とは別個に実行することで、移行時に問題が生じた場合の問題判別を単純化できます。DB2 の移行に先立ってソフトウェアまたはハードウェアをアップグレードする場合は、DB2 の移行を試行する前に、ご使用のシステムが正常に作動することを確認してください。

詳細デッドロック・イベント・モニターのドロップ

データベースが作成されると同時に、詳細デッドロック・イベント・モニターも作成されます。他のモニターと同様に、このイベント・モニターにも関連したオーバーヘッドがあります。詳細デッドロック・イベント・モニターを必要としない場合は、以下のコマンドを使用してイベント・モニターをドロップできます。

```
DROP EVENT MONITOR db2detaildeadlock
```

このイベント・モニターが消費するディスク・スペースの量を制限するために、出力ファイルの最大数に達すると、イベント・モニターが非アクティブになり、メッセージが管理通知ログに書き込まれます。必要のない出力ファイルを除去すると、イベント・モニターは次のデータベースの活動化時にアクティブになります。

バックレベルのサーバーのサポート

DB2 バージョン 7 での環境を DB2 バージョン 8 に移すとき、すべての DB2 サーバーをバージョン 8 に移行する前に DB2 クライアントをバージョン 8 に移行する場合は、制約と制限がいくつかあります。既知の制約事項と制限事項を回避するために、すべての DB2 サーバーをバージョン 8 に移行してから、DB2 クライアントをバージョン 8 に移行してください。

い。これらの制約と制限は DB2 Connect™ には関連しません。また、zSeries®、OS/390®, または iSeries™ データベース・サーバーにも関連しません。

ベンチマーク DB2 パフォーマンス

DB2 を移行する前に、いくつかのテスト照会を実行し、照会が実行されたときの正確な環境条件を記録してください。また、それぞれのテスト照会ごとの **db2expln** コマンド出力の記録を保存しておき、移行前後の結果を比較してください。このことは、性能低下を識別し修正するのに役立ちます。

移行をバックアウトするプランの考案

移行を逆行させるためのクーティリティーはありません。移行をバックアウトする必要がある場合には、システムから DB2 バージョン 8 コードを除去し、以前のバージョンの DB2 を再インストールして、バックレベルのインスタンスを再作成し、データベース・バックアップをリストアする必要があります。移行をバックアウトする必要がある場合には、現行のデータベース・バックアップおよびデータベースとデータベース構成設定値の明細レコードが不可欠です。

DB2 DataPropagator™ レプリケーションでの移行

DB2 DataPropagator 用のキャプチャーまたはアプライ・プログラムを実行している DataJoiner または DB2 UDB のインスタンスを移行する前に、DB2 DataPropagator バージョン 8 用の移行に関する資料をお読みください。DB2 または DataJoiner インスタンスを移行する前に、複製環境の移行の準備を行う必要があります。DB2 または DataJoiner インスタンスの移行後に直ちに実行しなければならない特定のタスクもあります。DB2 DataPropagator バージョン 8 用の移行に関する資料は、<http://www.ibm.com/software/data/dpropr/library.html> の Web サイトにあります。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『ベンチマーク・テスト』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain ツール』

関連タスク:

- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『DB2 Universal Database で計画されている非互換性』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 7 と以前のリリースとの非互換性』

移行スペースに関する推奨事項

このトピックは、DB2 移行のディスク・スペースの推奨事項についての情報を提供します。

表スペース

移行するデータベースのために十分な表スペースがあることを確認してください。移行中、新旧両方のデータベース・カタログのためのシステム・カタログ表スペースが必要です。必要なスペースの量は、データベースの複雑さ、およびデータベース・オブジェクトの数とサイズによって異なります。

システム・カタログ表スペース (SYSCATSPACE)

現在占めているスペースの 2 倍をお勧めします。

TEMPORARY 表スペース (TEMPSPACE1 はデフォルト名)

システム・カタログ表スペースの 2 倍をお勧めします。

以下のコマンドを使用して、表スペースのサイズを調べることができます。

```
db2 list database directory
db2 connect to database_alias
db2 list tablespaces show detail
```

システム・カタログ表スペースの場合、フリー・ページは使用ページと等しいかまたはそれより大きくなければなりません。TEMPORARY 表スペースの合計ページは、システム・カタログ表スペースの合計ページ量の 2 倍でなければなりません。コンテナを追加することによって、DMS (データベース管理スペース) 表スペースに対するスペースの量を増やすことができます。

ログ・ファイル・スペース

移行プロセスでは、単一トランザクション中にデータベースに多数の変更が加えられます。これらの変更には、このトランザクションを含む適切なログ・スペースが必要です。ログ・スペースが不適切な場合は、このトランザクションはロールバックされ、移行は正常に完了しません。ログ・ファイル・スペースがなくならないようにするには、logfilsiz、logprimary、および logsecond のデータベース構成値を 2 倍にすることを考慮する必要があります。

インスタンスをバージョン 8.2 に移行する前に、これらのデータベース構成値を更新しなければなりません。データベースの移行を試行する前に、これらのデータベース構成パラメーターを更新することはできません。しかし、ログ・ファイル・スペースが足りずにデータベースの移行が失敗した場合は、logfilsiz、logprimary、および logsecond データベース構成パラメーターの設定値を大きくしてから、データベース移行コマンドを再発行することができます。移行の完了後にこれらの設定をリセットできます。

DataJoiner

DataJoiner からデータを移行する際には、必要なログ・ファイル・スペースは、移行しようとしているデータベースのサイズに応じて異なります。すべてのログ・ファイルの合計サイズは、データベース・バックアップ・ファイルのサイズの 2 倍である必要があります。以下の公式を使用して、DataJoiner システム上のログ・ファイル・スペースが十分かどうかを判別してください。

$$4096 \times \text{logfilsiz} \times (\text{logprimary} + \text{logsecond}) > 2 \times (\text{DataJoiner データベース・バックアップ・ファイルのサイズ})$$

4096 はログ・ファイルのページ・サイズです。logfilsiz、logprimary、および logsecond はデータベース構成パラメーターです。

例えば、DataJoiner データベースのバックアップ・ファイル・サイズが 117.5 MB の場合は、すべてのログ・ファイルの合計サイズは $2 \times 117.5 = 235$ MB である必要があります。

logfilsiz が 5000 に設定されており、DataJoiner データベースに 6 つの logprimary ファイルと 4 つの logsecond ファイルがある場合は、すべてのログ・ファイルのサイズは以下ようになります。

$$(4096 \times 5000 \times (6 + 4)) = 204.8 \text{ MB}$$

すべてのログ・ファイルの合計ファイル・サイズが DataJoiner データベースのバックアップ・ファイル・サイズの 2 倍未満なので、移行は失敗します。

移行の前に、logfilsiz ログ・ファイル・サイズを大きくするか、追加のログ・ファイルを作成すると、この失敗が起きないようにすることができます。これらの変更は、インスタンスを移行する前に加える必要があります。

関連タスク:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DMS 表スペースへのコンテナの追加』
- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

パーティション・データベース環境での DB2 の移行

以下のようにして、パーティション・データベース環境で DB2 サーバーを移行します。

1. 個々の参加マシンで DB2 バージョン 8 サーバーをインストールします。
2. (UNIX のみ) インスタンスを所有するマシンでインスタンスを移行します。
3. カタログ・ノードでデータベースを移行します。
4. パーティション・データベース環境の個々の参加マシンで DB2 バージョンの DAS を作成します。

関連タスク:

- 54 ページの『パーティション・インストール (Windows)』
- 38 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』
- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』
- 55 ページの『パーティション・インストール (UNIX)』

移行テストの考慮事項

実稼働環境で移行を行う前に、テスト環境で DB2 バージョン 8 に移行してください。これを行うことにより、実稼働環境を移行プロセスにコミットする前に、移行の障害を検出し、アプリケーションおよびツールが確実に適正に作動するようにしておくことができます。

実稼働システムに似せたテスト環境がある場合は、DB2 バージョン 8 をインストールし、インスタンスとデータベースを移行し、アプリケーションをテストする必要があります。UNIX ベースのシステムでは、複数のバージョンの DB2 を共存させることができます。DB2 バージョン 6 または 7 のもとでアプリケーションが依然として稼働中であっても、DB2 バージョン 8 をインストールできます。DB2 バージョン 8 のテスト・インスタンスおよびデータベースを作成して、実稼働サーバーが依然として稼働している状態でアプリケーションをテストしてください。

結果に満足したら、実稼働システムを DB2 バージョン 8 に移動できます。

関連概念:

- 17 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 15 ページの『移行の制約事項』

Explain 表の移行

migrate database コマンドは、Explain 表を移行しません。DB2 バージョン 8 に移行したデータベースの Explain 表を移行する場合、または DataJoiner から移行する場合には、**db2exmig** コマンドを使用して、Explain 表を移行する余分のステップを実行する必要があります。

以前に収集した Explain 表の情報を保持したい場合には、Explain 表を移行することができます。以前に収集した Explain 表の情報を保持したくない場合には、後で Explain 表を再作成し、新規に情報を収集することができます。

手順:

db2exmig コマンドを使用して、Explain 表を移行します。

```
db2exmig -d dbname -e explain_schema [-u userid password]
```

ここで、

- *dbname* はデータベース名を表しています。このパラメーターは必須です。
- *explain_schema* は、移行する Explain 表のスキーマ名を表しています。このパラメーターは必須です。
- *userid* と *password* は、現行ユーザーの ID とパスワードを表しています。これら 2 つのパラメーターは任意指定パラメーターです。

db2exmig を実行しているユーザー ID に属する Explain 表、またはそのデータベースに接続するのに使用したユーザー ID に属する Explain 表が移行されます。Explain 表移行ツールは、バージョン 6 またはバージョン 7 の表の名前を変更し、EXPLAIN.DDL を使用して表の新しいセットを作成するとともに、古い表の内容を新しい表にコピーします。さらに、古い表をドロップします。**db2exmig** コマンドは、ユーザーが Explain 表に追加した列を保存します。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain ツール』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain 表および Explain 情報の編成』

関連タスク:

- 32 ページの『データベースの移行』

第 4 章 移行前のタスク

DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ

移行プロセスを始動する前に、ご使用のデータベースのオフライン・バックアップを実行することをお勧めします。移行プロセス中にエラーが発生した場合には、リカバリーのためデータベース・バックアップが必要です。

このトピックでは、バックアップ・コマンドの完全な構文は提供していません。

前提条件:

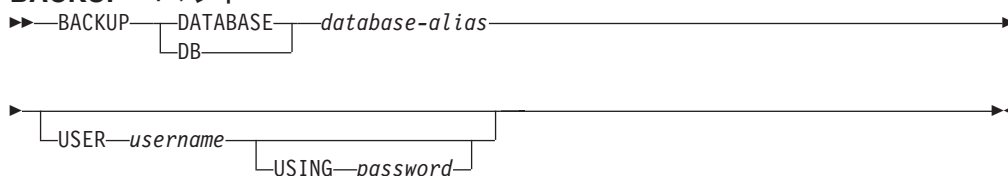
- データベースをバックアップするために、SYSADM、SYSCTRL、または SYSMOINT 権限が必要です。
- データベースはカタログされていなければなりません。現在のインスタンスでカタログされているすべてのデータベースのリストを表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 list database directory
```

手順:

バックアップ・データベース・コマンドを入力して、ローカル・データベースのそれぞれをバックアップします。

BACKUP コマンド



ここで、

DATABASE *database-alias*

バックアップするデータベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下にバックアップするユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワードです。パスワードを省略した場合、それを入力するようプロンプトが出されます。

例えば、DB2 CLP プロンプトから以下のように入力します。

```
db2 backup database sample user pparker using auntmay
```

データベース別名は `sample`、ユーザー名は `pparker`、およびパスワードは `auntmay` です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 19 ページの『移行スペースに関する推奨事項』

DB2 の移行前のシステム構成設定の記録

DB2 を移行する前に、データベースおよびデータベース・マネージャー構成の設定を記録しておくことをお勧めします。構成レコードは、移行が成功したかを確認するために使用することができますし、移行後に障害が生じた場合の問題判別にも役立つことがあります。

DB2 を移行した後、構成レコードを移行後の設定と比較して、設定が正常に移行されたことを確認するようお勧めします。

手順:

以下のようにして、システム構成設定を記録します。

1. ご使用のデータベース構成設定を記録します。

データベースの構成パラメーターは、パーティション・データベース・システム内のそれぞれのコンピューターで同じであるはずですが、そうでなければ、それぞれのパーティションのデータベース構成設定のコピーを保管します。移行の前後の構成設定を比較して、移行が正常に実行されたかを確認することができます。

データベース構成設定をリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database configuration for database_alias
```

ファイルとして保管するには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database configuration for database_alias > c:%db_sample_cfg.txt
```

このタスクは、移行するそれぞれのデータベースごとに実行します。

2. ご使用のデータベース・マネージャー構成設定を記録します。データベース・マネージャー構成設定をリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database manager configuration
```

DB2 CLP ウィンドウからこの情報を切り貼りして、ファイルとして保管します。

3. 移行するそれぞれのデータベースごとに、表スペースを記録します。表スペースをリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 list tablespaces
```

4. 移行するそれぞれのデータベースごとに、パッケージのリストを記録します。パッケージのリストは、以下のコマンドを使用して検索することができます。

```
db2 list packages
```

5. DB2 バージョン 7 からの移行の場合は、DB2 プロファイル・レジストリー変数設定を記録する必要があります。必要な場合は、移行前に記録した情報を参照して、移行後に DB2 プロファイル・レジストリー変数設定の追加や変更を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『構成パラメーター』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『GET DATABASE CONFIGURATION コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『GET DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST PACKAGES/TABLES コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST TABLESPACES コマンド』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『構成パラメーターのサマリー』

DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更

移行アクティビティ中に、診断エラー・レベルを 4 に変更してください。診断エラー・レベル 4 は、すべてのエラー、警告、および通知メッセージを記録します。この情報は、移行上のエラーが生じた場合に、問題判別に使用することができます。diagpath 構成パラメーターは、diaglevel パラメーターの値に基づいて生成される、エラー・ファイル、イベント・ログ・ファイル (Windows のみ)、アラート・ログ・ファイル、およびダンプ・ファイルを入れるディレクトリーを指定します。

手順:

以下のようにして、DB2 移行前に診断エラー・レベルを変更します。

- 以下のコマンドを使用して、データベース・マネージャー構成ファイル内で診断エラー・レベルを設定します。

```
db2 update dbm configuration using diaglevel 4
```

- **db2stop** コマンドを入力します。
- **db2start** コマンドを入力します。

diagpath パラメーターは、以下のコマンドを使用して、データベース・マネージャー構成ファイル内で設定することができます。

```
db2 update dbm configuration using diagpath directory
```

directory は、ご使用のログ・ファイルを保管するためにユーザーが選択したロケーションを表します。

関連概念:

- 17 ページの『移行に関する推奨事項』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『UPDATE DATABASE CONFIGURATION コマンド』
- 15 ページの『移行の制約事項』

データベースが移行できる状態にあることの確認

このタスクは、**db2ckmig** コマンドを使用して、データベースが移行できる状態にあることを確認する方法について説明します。

db2ckmig コマンドは、現行インスタンスによって所有されるデータベースが、移行できる状態にあることを確認します。**db2ckmig** コマンドは、以下の事柄を確認します。

- データベースが不整合な状態にないこと
- データベースがバックアップ・ペンディング状態にないこと
- データベースがロールフォワード・ペンディング状態にないこと
- 表スペースが通常の状態にあること

前提条件:

インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーにある migration.log ファイルに Version of DB2CKMIG being run: VERSION 8 というテキストが含まれていることを確認してください。

手順:

1. 移行元のインスタンスにログオンします。
 - 旧バージョンの DB2 for Linux, UNIX, and Windows から移行する場合は、DB2 インスタンス所有者としてログオンします。
 - DataJoiner から移行する場合は、DataJoiner インスタンス所有者としてログオンします。
2. **db2stop** コマンドを発行して、インスタンスを停止します。
3. Windows では、DB2 バージョン 8 製品 CD を CD-ROM に挿入します。
4. DB2 コマンド行プロンプトから、該当するディレクトリーに変更します。
 - AIX では、このコマンドのパスは /usr/opt/db2_08_01/bin/db2ckmig です。
 - Linux、HP-UX、および Solaris オペレーティング環境では、このコマンドのパスは /opt/IBM/db2/V8.1/bin/db2ckmig です。
 - Windows では、CD 上の %db2%\Windows%\utilities ディレクトリーに変更します。
5. **db2ckmig db_alias /I directory** コマンドを発行し、現行インスタンスによって所有されるデータベースが移行できる状態にあることを確認し、ログ・ファイルを生成します。

db2ckmig コマンドでエラーが検出されない場合は、以下のメッセージが表示されます。

```
db2ckmig was successful. Database(s) can be migrated.
```

6. **db2ckmig** コマンドがエラーを検出した場合は、移行する前に問題を訂正します。

7. ログ・ファイルを調べて、以下のテキストが含まれていることを確認します。

```
Version of DB2CKMIG being run: VERSION 8
```

関連概念:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* マイグレーション・ガイド」の『DB2 Information Integrator に移行するためのインストール手順』

関連タスク:

- 37 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』

移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする

このタスクは、DB2 移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする方法を説明します。移行プロセスを継続する前に、DB2 ライセンス・サービスを停止し、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止し、アプリケーションおよびユーザーを切断し、データベース・マネージャーを停止する必要があります。

前提条件:

- 移行プロセスを開始する前に、ご使用のシステムが DB2 バージョン 8 のインストール要件を満たしていなければなりません。
- SYSADM 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、ご使用のサーバーをオフラインにします。

1. **db2licd -end** コマンドを入力し、DB2 ライセンス・サービスを停止します。
2. Windows 2000 では、サービスに障害が起きた場合にそれを再始動するように、サービスのプロパティを設定することができます。「障害時の再始動 (*restart on failure*)」オプションが任意の DB2 サービスに設定されている場合には、次に進む前に、それを停止する必要があります。
3. コマンド行プロセッサを実行していた各セッションで **db2 terminate** コマンドを入力して、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止します。
4. すべてのアプリケーションおよびユーザーを切断します。 **db2 list applications** コマンドを入力して、現行のインスタンスのすべてのデータベース接続のリストを取得します。すべてのアプリケーションが切断されたら、このコマンドにより、以下のメッセージが戻されます。

```
SQL1611W No data was returned by the Database System Monitor.  
SQLSTATE=00000
```

db2 force applications コマンドを発行して、アプリケーションおよびユーザーを切断することができます。

5. すべてのアプリケーションおよびユーザーを切断したならば、 **db2stop** コマンドを入力して、それぞれのデータベース・マネージャー・インスタンスを停止します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『FORCE APPLICATION コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST APPLICATIONS コマンド』

第 5 章 DB2 サーバーの移行 (Windows)

DB2 UDB の移行 (Windows)

このトピックでは、Windows 上で DB2 UDB バージョン 8 に移行するためのステップをリストします。

DB2 バージョン 8 で使用したい、DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 のインスタンスおよびデータベースがある場合には、移行が必要です。データベースが DB2 バージョン 8 フィックスパック・レベルに移行されている場合には、データベースを移行する必要はありません。Windows では、DB2 バージョン 8 のインストール時に既存のインスタンスはすべて自動的に移行されます。

前提条件:

移行する前に、以下を確認してください。

- 移行に関する推奨事項、制約事項、およびスペースの推奨事項を確認します。
- DB2 移行前の構成設定の記録を行います。
- 診断エラー・レベルの変更を実行します。
- DB2 移行のために DB2 サーバーをオフラインにします。
- データベースが DB2 移行の準備ができていることの確認を行います。
- ご使用のデータベースのバックアップを行います。
- レプリケーションを使用する場合には、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。
- SYSADM 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、DB2 UDB を移行します。

1. DB2 サーバーをインストールします。Windows では、DB2 バージョン 8 のインストール時に既存のインスタンスがすべて移行されます。
2. データベースの移行を行います。
3. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』
- 17 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 27 ページの『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 29 ページの『移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする』
- 28 ページの『データベースが移行できる状態にあることの確認』

- 25 ページの『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 32 ページの『データベースの移行』
- 22 ページの『Explain 表の移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『ARCHIVE LOG コマンド』
- 19 ページの『移行スペースに関する推奨事項』
- 15 ページの『移行の制約事項』

データベースの移行

前提条件:

SYSADM 権限が必要です。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。)
- DB2 DataJoiner バージョン 2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

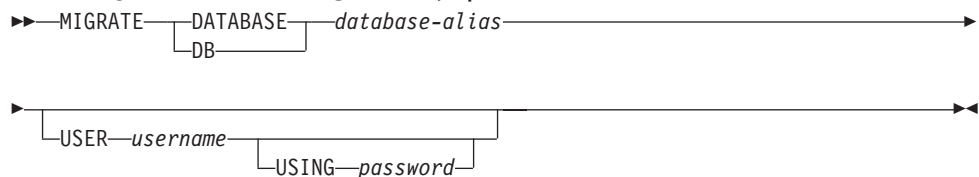
データベースが DB2 バージョン 8 フィックスパック・レベルに移行されている場合には、データベースを移行する必要はありません。

手順:

以下のようにして、DB2 データベースを移行します。

1. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているデータベース・マネージャーのバージョンに移行される、データベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下に移行するユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワード。パスワードを省略しても、ユーザー名が指定されている場合には、パスワードを入力するようプロンプトが出されます。

1

2. オプション: データベース中のローカル表の統計を更新します。データベース移行の完了時に、照会のパフォーマンスを最適化するために使用されていた旧統計は、カタログ内に保存されています。ただし、DB2 バージョン 8 には、改良された統計や DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 にはなかった統計もあります。これらの統計の利点を活用するには、表に対して **runstats** コマンドを実行すると良いでしょう。SQL 照会のパフォーマンスに対して重大な影響のある表の場合は特にそうです。
 3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるたびに再作成されます。**db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。
 4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャ上で、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中、すべての既存関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャの PUBLIC に対して、EXECUTE 特権が付与されます。これは、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れを引き起こします。なぜなら、ユーザーが本来は特権を持たない SQL オブジェクトへのアクセスを可能にするからです。**db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
 5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
 6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかを確認することができます。以下の事柄を確認します。
 - データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード
- 注: 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されません。これを別の値に設定したい場合は、手動で更新する必要があります。

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 22 ページの『Explain 表の移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『MIGRATE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST DATABASE DIRECTORY コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rbind - すべてのパッケージの再バインド・コマンド』

新規システムへのデータベースの移行

このタスクを利用して DB2 Linux、UNIX、および Windows データベースを移行してください。

前提条件:

SYSADM 許可が必要です。

db2 backup database コマンドを使用してデータベースをバックアップしなければなりません。

DataJoiner から移行する場合は、ログ・ファイルの合計サイズは、DataJoiner のデータベースのバックアップ・サイズの 2 倍でなければなりません。

DataJoiner、DB2 Relational Connect、または DB2 Life Sciences Data Connect から移行する場合は、DB2 Information Integrator および DB2 Universal Database for Linux, UNIX, and Windows をターゲット・システム上にインストールしなければなりません。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのオペレーティング・システム。)
- DB2 DataJoiner V2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

手順:

以下のようにして、データベースを新しいシステムに移行します。

1. **db2 restore database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 RESTORE DATABASE コマンド

```
▶▶RESTORE DATABASE source-database-alias
    └──DB──┘
▶▶
▶▶FROM directory-device▶▶
```

各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *source-database-alias*

バックアップが取得されるソース・データベースの別名を指定します。

FROM *directory/device*

バックアップ・イメージがあるディレクトリーまたは装置の完全修飾パス名。FROM パラメーターが省略される場合には、デフォルト値はクライアント・システム上の現行作業ディレクトリーです。このターゲット・ディレクトリーまたは装置は、データベース・サーバー上に存在している必要があります。

2. 以下のエラーが戻される場合は、データベースはリストアされましたが移行されていません。

SQL2519N The database was restored but the restored database was not migrated to the current release. Error "-1704" with tokens "3" is returned.
SQLSTATE=57011

データベースを移行するには、以下のステップを完了しなければなりません。

a. すべてのログ・ファイルの合計サイズを大きくします。

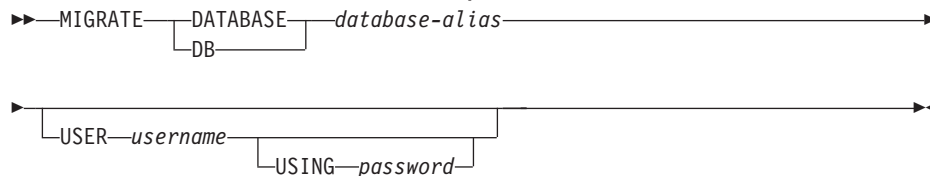
- DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 から移行する場合は、logfilsiz、logprimary、および logsecond パラメーターの値を 2 倍にします。
- DataJoiner から移行する場合は、すべてのログ・ファイルの合計サイズは、データベースのバックアップ・ファイル・サイズの 2 倍である必要があります。以下の公式を使用して、DataJoiner システム上のログ・ファイル・スペースが十分かどうかを判別してください。

$$(4096 \times \text{logfilsiz} \times (\text{logprimary} + \text{logsecond})) > 2 \times (\text{DataJoiner データベース・バックアップ・ファイル・サイズ})$$

4096 はログ・ファイル logfilsiz のページ・サイズです。logfilsiz、logprimary、および logsecond はデータベース構成パラメーターです。

b. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているデータベース・マネージャーのバージョンに移行される、データベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下に移行するユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワード。パスワードを省略しても、ユーザー名が指定されている場合には、パスワードを入力するようプロンプトが出されます。

c. 依然としてログ・ファイルのサイズが足りない場合は、以下のエラーが戻されます。ログ・ファイルのサイズを大きくして、再度 **db2 migrate database** コマンドを発行しなければなりません。

SQL1704N Database migration failed. Reason code "3".

d. 移行が完了したら、logfilsiz、logprimary、および logsecond パラメーターをリセットします。

3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるときに再作成されます。 **db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。

4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャ上で、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中、すべての既存関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャの PUBLIC に対して、EXECUTE 特権が付与されます。これは、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れを引き起こします。なぜなら、ユーザーが本来は特権を持たない SQL オブジェクトへのアクセスを可能にするからです。 **db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかを確認します。以下のことを確認する必要があります。
 - データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード

注: 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。このパラメーターを別の値に設定したい場合は、*maxappls* パラメーターを手動で更新する必要があります。

DB2 UDB バージョン 8 64 ビットへの移行 (Windows)

このトピックでは、Windows 64 ビット環境でデータベースを DB2 UDB バージョン 8 に移行するステップを一覧で示します。

前提条件:

- ご使用の 64 ビット・システムに、64 ビット・バージョンの DB2 バージョン 8 がインストールされていなければなりません。
- 32 ビット Windows システムで DB2 バージョン 8 が実行されていることを確認します。

手順:

Windows 64 ビット上で DB2 バージョン 8 に移行するには、以下のようになります。

1. 32 ビット Windows システム上で DB2 バージョン 8 データベースをバックアップします。
2. ステップ #1 で作成した DB2 バージョン 8 のバックアップを、64 ビット Windows システム上でリストアします。

関連タスク:

- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』

第 6 章 DB2 サーバーの移行 (UNIX)

DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)

このトピックでは、UNIX 上で DB2 バージョン 8 に移行するためのステップをリストします。

DB2 バージョン 8 で使用したい、DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 のインスタンスおよびデータベースがある場合には、移行が必要です。

データベースが DB2 バージョン 8 フィックスパック・レベルに移行されている場合には、データベースを移行する必要はありません。

前提条件:

- 移行に関する推奨事項、制約事項、およびスペースの推奨事項を確認します。
- DB2 移行前の構成設定の記録を行います。
- 診断エラー・レベルの変更を実行します。
- DB2 移行のために DB2 サーバーをオフラインにします。
- ご使用のデータベースのバックアップを行います。
- レプリケーションを使用する場合には、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。
- SYSADM 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、DB2 UDB を移行します。

1. DB2 サーバーをインストールします。
2. インスタンスの移行を行います。
3. オプション: DB2 ツール・カタログを作成し、既存のバージョン 8 より前のスクリプトおよびスケジュール (コントロール・センター用) を使用したい場合には、DB2 Administration Server の移行を行います。
4. データベースの移行を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』
- 17 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 27 ページの『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 29 ページの『移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする』
- 25 ページの『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 38 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』

- 39 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の移行』
- 32 ページの『データベースの移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『ARCHIVE LOG コマンド』
- 19 ページの『移行スペースに関する推奨事項』
- 15 ページの『移行の制約事項』

インスタンスの移行 (UNIX)

db2imigr コマンドを使用して、既存の DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 インスタンスを移行することができます。インスタンスの移行は、DB2 バージョン 8 のインストール後に実行します。

db2imigr コマンドは、以下の事柄を行います。

- インスタンスによって所有される、カタログされたデータベースをチェックして、それらが移行の準備が整っているかを確認します。
- **db2icrt** コマンドを実行して、DB2 バージョン 8 インスタンスを作成します。
- システムおよびローカル・データベース・ディレクトリーを、バージョン 8 フォーマットに更新します。
- DB2 バージョン 6 および DB2 バージョン 7 のデータベース・マネージャー構成と、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャー構成をマージします。

前提条件:

root 権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

db2imigr コマンドを実行する前に、以下の事柄が勧められています。

- /tmp フリー・スペースが 20 MB なければなりません。インスタンス移行トレース・ファイルが /tmp に書き込まれます。
- インスタンスに **db2imigr** コマンドを実行する前に、インスタンス中の個々のデータベースに対して **db2ckmig** を手動で実行してみて、問題があれば解決しておきます。 **db2imigr** は **db2ckmig** が問題を検出する限り、移行を実行しません。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。 (バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。 Linux はバージョン 6 フォックスパック 2 でなければなりません。)
- DB2 DataJoiner V2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

手順:

以下を行って、インスタンスを移行します。

1. **db2imigr** コマンドを使用して、インスタンスを移行します。

```
DB2DIR/instance/db2imigr [-u fencedID] InstName
```

ここで、

DB2DIR

AIX では /usr/opt/db2_08_01、他のすべての UNIX オペレーティング・システムでは /opt/IBM/db2/V8.1 です。

-u fencedID

fenced ユーザー定義関数 (UDF) およびストアード・プロシージャが稼働するユーザー。このパラメーターが必要なのは、クライアント・インスタンスからサーバーに移行する場合だけです。

InstName

インスタンス所有者のログイン名です。

DB2 の単一パーティション・バージョンから DB2 Enterprise Server Edition のパーティション・データベース環境バージョンへ移行した場合は、**db2iupdt** コマンドを使用して、インスタンスをパーティション・フォーマットに更新する必要があります。

関連タスク:

- 28 ページの『データベースが移行できる状態にあることの確認』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2imigr - インスタンスの移行コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2icrt - インスタンスの作成コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の移行

ご使用の DB2 バージョン 8 システムで DB2 ツール・カタログを作成し、バージョン 8 より前の DB2 Administration Server (DAS) で作成したバージョン 8 より前の既存スクリプトおよびスケジュール (コントロール・センター用) を使用したい場合には、DAS をバージョン 8 に移行する必要があります。

Windows の場合、バージョン 8 のインストール中に DB2 ツール・カタログを作成していれば、この移行は自動的に行われます。インストール後に DB2 ツール・カタログを作成した場合は、この移行は手動で行わなければなりません。

UNIX の場合、この移行は、インストール中またはそのあとで DB2 ツール・カタログが作成された後に手動で行う必要があります。

前提条件:

以下が必要です。

- 既存の DB2 ツール・カタログ。
- Windows システムでは、バージョン 8 より前の情報を DB2 ツール・カタログに移行するための DASADM 権限。
- UNIX システムでは、バージョン 8 より前の情報を DB2 ツール・カタログに移行するための root 権限。

手順:

以下のコマンドを入力して、バージョン 8 より前の DAS を DB2 ツール・カタログに移行します。

```
dasmigr previous_das_name new_das_name
```

previous_das_name はバージョン 8 より前の DAS インスタンスの名前を、*new_das_name* は新規 DB2 バージョン 8 DAS の名前を表します。

関連タスク:

- 31 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition の移行 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition の移行 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『dasmigr - DB2 Administration Server の移行コマンド』

データベースの移行

前提条件:

SYSADM 権限が必要です。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

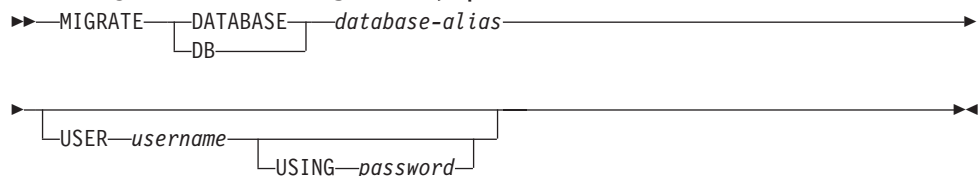
- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。)
- DB2 DataJoiner バージョン 2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

手順:

以下のようにして、DB2 データベースを移行します。

1. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているデータベース・マネージャーのバージョンに移行される、データベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下に移行するユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワード。パスワードを省略しても、ユーザー名が指定されている場合には、パスワードを入力するようプロンプトが出されます。

2. オプション: 統計を更新します。データベース移行の完了時に、照会のパフォーマンスを最適化するために使用されていた旧統計は、カタログ内に保存されています。ただし、DB2 バージョン 8 には、改良された統計や DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 にはなかった統計もあります。これらの統計の利点を活用するには、表に対して **runstats** コマンドを実行すると良いでしょう。SQL 照会のパフォーマンスに対して重大な影響のある表の場合は特にそうです。
3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるたびに再作成されます。 **db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。
4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャ上で、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中、すべての既存関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャの PUBLIC に対して、EXECUTE 特権が付与されます。これは、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れを引き起こします。なぜなら、ユーザーが本来は特権を持たない SQL オブジェクトへのアクセスを可能にするからです。 **db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかを確認することができます。以下の事柄を確認します。
 - データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード

注: 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されません。これを別の値に設定したい場合は、手動で更新する必要があります。

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 22 ページの『Explain 表の移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『MIGRATE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST DATABASE DIRECTORY コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rbind - すべてのパッケージの再バインド・コマンド』

新規システムへのデータベースの移行

このタスクを利用して DB2 Linux、UNIX、および Windows データベースを移行してください。

前提条件:

SYSADM 許可が必要です。

db2 backup database コマンドを使用してデータベースをバックアップしなければなりません。

DataJoiner から移行する場合は、ログ・ファイルの合計サイズは、DataJoiner のデータベースのバックアップ・サイズの 2 倍でなければなりません。

DataJoiner、DB2 Relational Connect、または DB2 Life Sciences Data Connect から移行する場合は、DB2 Information Integrator および DB2 Universal Database for Linux, UNIX, and Windows をターゲット・システム上にインストールしなければなりません。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

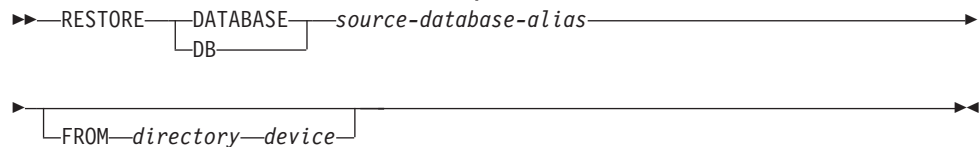
- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのオペレーティング・システム。)
- DB2 DataJoiner V2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

手順:

以下のようにして、データベースを新しいシステムに移行します。

1. **db2 restore database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 RESTORE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *source-database-alias*

バックアップが取得されるソース・データベースの別名を指定します。

FROM *directory/device*

バックアップ・イメージがあるディレクトリーまたは装置の完全修飾パス名。FROM パラメーターが省略される場合には、デフォルト値はク

- d. 移行が完了したら、logfilsiz、logprimary、および logsecond パラメータをリセットします。
 3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるときに再作成されます。 **db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。
 4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャ上で、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中、すべての既存関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャの PUBLIC に対して、EXECUTE 特権が付与されます。これは、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れを引き起こします。なぜなら、ユーザーが本来は特権を持たない SQL オブジェクトへのアクセスを可能にするからです。 **db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
 5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
 6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかを確認します。以下のことを確認する必要があります。
 - データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード
- 注:** 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。このパラメーターを別の値に設定したい場合は、*maxappls* パラメーターを手動で更新する必要があります。

DB2 バージョン 8 64 ビットへの移行 (UNIX)

このトピックでは、UNIX 64 ビット環境でデータベースを DB2 バージョン 8 に移行するステップを一覧で示します。DB2 バージョン 8 の 64 ビット・システムは、AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境でサポートされています。

前提条件:

- 64 ビット・システムで DB2 バージョン 8 に更新する場合、先にデータベースを移行します。このデータベースの移行は、**db2imigr** コマンドを発行してから、**db2iupdt -w64** コマンドを発行するまでの間に行わなければなりません。

制約事項:

- 一度バージョン 8 の 64 ビット・インスタンスに移行されたインスタンスは、バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスには戻せません。

- このトピック中の情報は Linux にだけ当てはまります。バックアップ・ユーティリティとリストア・ユーティリティを使って、Linux 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、Linux 64 ビット DB2 バージョン 8 データベースに移動します。

手順:

DB2 バージョン 7 のデータベースを DB2 バージョン 8 の 64 ビット・システムに移行するには、以下のようにします。

1. 64 ビット・システムに DB2 バージョン 8 をインストールします。直前のバージョンはアンインストールしないでください。
2. インスタンスの所有者として **DB2DIR/bin/db2ckmig** コマンドを実行し、データベースが移行可能であることを確認します。
3. 既存の DB2 バージョン 7 のデータベースをバックアップします。
4. DB2 バージョン 7 のインスタンスを停止させます。
5. **DB2DIR/instance/db2imigr <instance_name>** コマンドを実行します。
6. 既存のデータベースが、64 ビット・システム上の DB2 バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスにある場合は、インスタンスを 64 ビット・インスタンスに更新する必要があります。バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスをバージョン 7 の 64 ビット・インスタンスに更新するときは、**db2iupdt** コマンドを使用し、**-w** パラメーターに **64** の値を指定します。例えば、以下のようにします。

```
DB2DIR/instance/db2iupdt -w 64 db2inst1
```

ここで DB2DIR は、該当するプラットフォーム上の DB2 バージョン 8 のインストール・パスを表します。

7. インスタンスを再始動させます。

バックアップおよびリストア・ユーティリティを使用してシステムを移行できます。バックアップとリストアの方式では、任意の AIX、HP-UX、Solaris オペレーティング環境の 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、任意の AIX、HP-UX、Solaris オペレーティング環境の 64 ビット・バージョン 8 データベースへの移動、または Linux 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、Linux 64 ビット・バージョン 8 データベース (Linux IA64 または Linux AMD64) への移動がサポートされます。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2icrt - インスタンスの作成コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』

AIX バージョン 4 上の DB2 バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に移行する

以下に、AIX バージョン 4 上の DB2 UDB バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 UDB バージョン 8 に移行するのに必要なステップについて詳述します。

AIX バージョン 4 上の DB2 UDB バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 UDB バージョン 8 に移行するには、2 つのオプションがあります。行うことができる操作は、以下のとおりです。

- AIX オペレーティング・システムを AIX バージョン 5 にアップグレードする場合
- AIX バージョン 4 のままの場合

手順:

- AIX バージョン 5 にアップグレードして、AIX バージョン 4 上の DB2 UDB バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に移行するには、以下のようになります。
 1. ご使用のオペレーティング・システムを AIX バージョン 5 にアップグレードします。
 2. DB2 バージョン 7 を DB2 バージョン 7 フィックスバック 4 (AIX 5 用) を使ってアップグレードします。
 3. `/usr/lpp/db2_07_01/instance/db2iupdt` コマンドを使ってインスタンスを更新します。
 4. データベースが依然として動作することを確認します。ご使用のデータベースが AIX バージョン 5 での DB2 UDB バージョン 7 上で動作することを確認しないで直接次のステップに進まないようにしてください。
 5. AIX バージョン 5 用 DB2 UDB バージョン 8 をインストールします。
 6. `/usr/opt/db2_08_01/instance/db2imigr` コマンドを使ってインスタンスを移行します。
- AIX バージョン 4 のままにして、AIX バージョン 4 上の DB2 バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に移行するには、以下のようになります。
 1. インスタンスをドロップします。
 2. それらのインスタンスを 32 ビット・インスタンスとして再作成します。インスタンスのパラメーターを再構成する必要がある場合があります。
 3. AIX バージョン 4 用 DB2 UDB バージョン 8 をインストールします。
 4. `/usr/opt/db2_08_01/instance/db2imigr` コマンドを使ってインスタンスを移行します。

関連タスク:

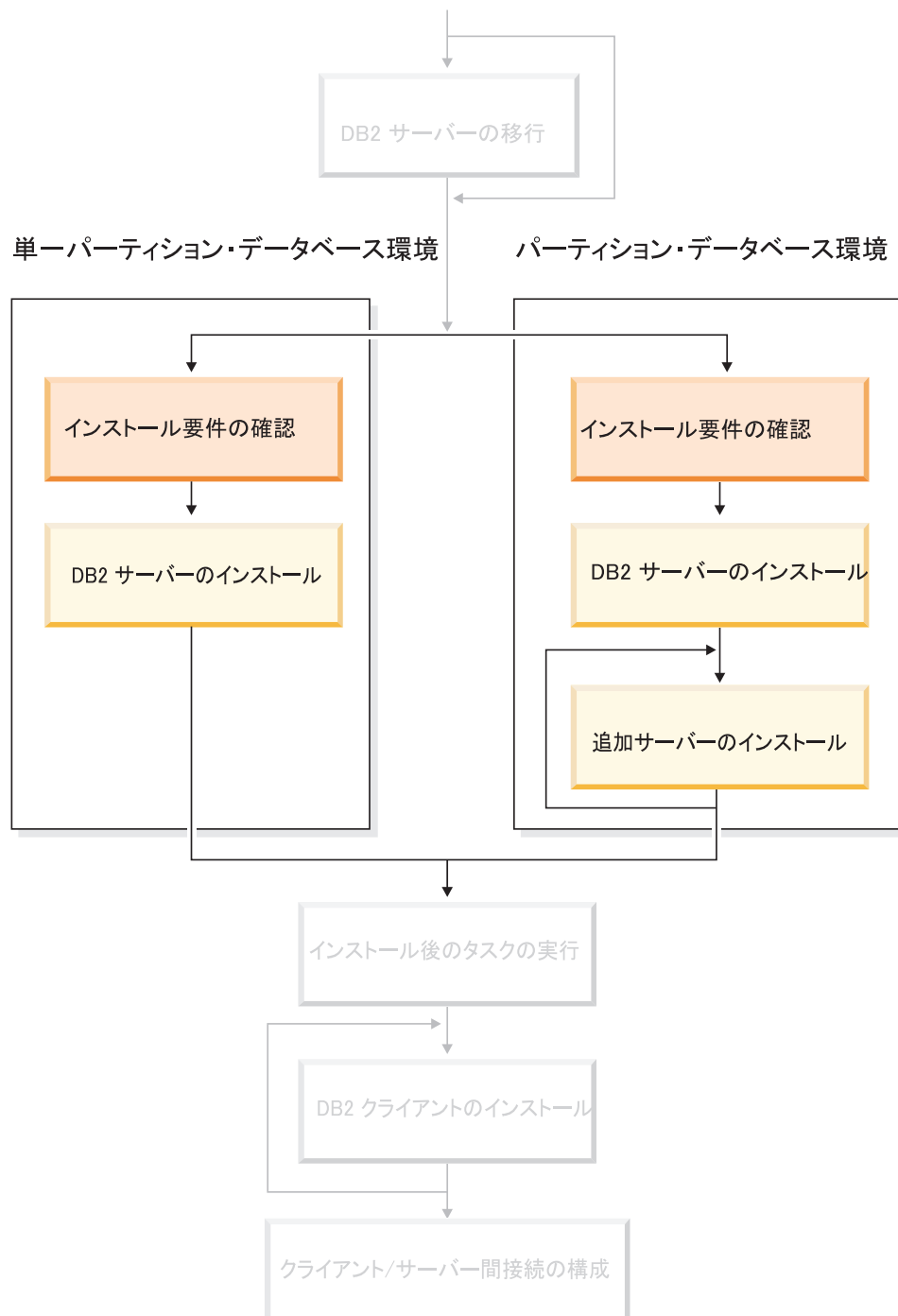
- 135 ページの『パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (UNIX)』
- 132 ページの『単一パーティション環境での DB2 サーバーのインストール (UNIX)』

|
|

関連資料:

- 74 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (AIX)』

第 3 部 DB2 UDB サーバーのインストール



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 7 章 インストールの概要

DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)

このトピックは、DB2[®] UDB インストール方式についての情報を提供します。以下の表は、オペレーティング・システムごとに使用可能なインストール方式を示しています。

表 1. オペレーティング・システムごとのインストール方式

インストール方式	Windows [®]	UNIX [®]
DB2 セットアップ・ウィザード	あり	あり
db2_install スクリプト	なし	あり
応答ファイル・インストール	あり	あり
固有のインストール・ツール	なし	あり

以下に、DB2 のインストール方式を説明します。

DB2 セットアップ・ウィザード

DB2 セットアップ・ウィザードは、UNIX および Windows のどちらのオペレーティング・システムでも使用可能な GUI インストーラーです。DB2 UDB セットアップ・ウィザードは、DB2 をインストールして初期セットアップおよび構成タスクを実行するための、使いやすいインターフェースを提供します。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インスタンスおよび応答ファイルを作成することもできます。

UNIX システムでは、DB2 セットアップ・ウィザードは、テキスト・ベースのインストーラー・インターフェース (db2setup) に置き換わります。

db2_install スクリプト

db2_install スクリプトは、オペレーティング・システムの固有のインストール・ユーティリティを使用して、DB2 UDB をインストールします。db2_install スクリプトは DB2 製品キーワードを入力するようプロンプトを出します。このスクリプトは DB2 製品の、ユーザーが指定するすべてのコンポーネント (英語のみ) をインストールします。コンポーネントまたはインターフェース言語のサポートを選択または選択解除することはできません。db2_install スクリプトは、ユーザーおよびグループの作成、インスタンスの作成、構成は実行しません。DB2 コンポーネントをご使用のシステムにインストールします。このインストール方式は、インストール・セットアップ・プロセスに対して、GUI インストーラーより強力な制御が必要な場合に有利です。

応答ファイル・インストール

応答ファイルは、セットアップ値および構成値を入れた ASCII ファイルです。ファイルは DB2 セットアップ・プログラムに渡され、指定された値に従ってインストールが実行されます。応答ファイルを作成する方法がいくつかあります。

- 応答ファイル生成プログラムを使用します (Windows)
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用します (UNIX および Windows)
- それぞれの DB2 製品で提供されているサンプル応答ファイルをカスタマイズします (UNIX および Windows)

応答ファイル生成プログラムを使用すれば、応答ファイルを作成して、既存のインストールを複製することができます。例えば、DB2 クライアントをインストールし、そのクライアントの構成を十分に行った後、応答ファイルを生成して、そのクライアントのインストールおよび構成を他のコンピューターに複製することができます。応答ファイル生成プログラムを利用できるのは、Windows の場合だけです。

DB2 セットアップ・ウィザードで、UNIX および Windows の両方のインストール用の応答ファイルを作成することができます。DB2 セットアップ・ウィザードにより続けて行う選択は、応答ファイルに記録され、それをご使用のシステム上のあるロケーションに保管しておくことができます。

ユーザーの便宜のために、インストールを実行せずに応答ファイルを作成することができます。この機能は、DBA がインストールを実行する権限を持たない環境で役立ちます。DBA は、インストール用の応答ファイルを作成して、DBA に代わって製品をインストールするシステム管理者にそれを提供することができます。

応答ファイル生成プログラムまたは DB2 セットアップ・ウィザードを使用して応答ファイルを作成する代わりに、サンプル応答ファイルを手動で変更することもできます。サンプル応答ファイルは DB2 製品 CD-ROM で提供されています。

固有のインストール・ツール

ご使用のオペレーティング・システムの固有のインストールを使用した DB2 のインストールは、インストール・プロセスに対する最大の制御を提供します。しかしこれは、他のインストール方式よりも困難でもあります。特定の DB2 製品をインストールするときには、確実に、必要なコンポーネントをインストールし、コンポーネントの従属関係が保守されるようにすることが必要です。DB2 およびご使用のオペレーティング環境の両方についての十分な知識が必要です。ユーザーおよびグループの作成、インスタンスの作成、および構成は、手動で実行しなければなりません。

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品の手動インストール』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

単一パーティションのインストール (Windows)

このトピックでは、Windows 上の単一パーティション・データベース環境での、DB2 Enterprise Server Edition または Workgroup Server Edition のインストールについてのステップを概説します。

手順:

以下のようにして、Windows 上の単一パーティション・データベース環境で DB2 Enterprise Server Edition または Workgroup Server Edition をインストールします。

1. DB2 製品の前提条件を確認します。
2. DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 製品をインストールします。DB2 セットアップ・ウィザード機能には、以下のものが組み込まれています。
 - ランチパッド。ここからインストール情報およびリリース情報を参照したり、DB2 UDB バージョン 8 の機能について学習したりすることができます。
 - 一般、コンパクト、およびカスタムのインストール・タイプ。
 - インストールを実行する際の、複数の言語選択項目。
 - ユーザー・インターフェースと製品メッセージは、複数の言語で使用でき、選択した言語でインストールされます。複数の言語をインストールすると、希望する言語でインターフェースやメッセージを表示できます。
 - DB2 Administration Server のセットアップ (DAS ユーザーのセットアップを含む)。
 - 管理連絡先およびヘルス・モニター通知のセットアップ。
 - インスタンスのセットアップおよび構成 (インスタンス・ユーザーのセットアップを含む)。
 - DB2 ツール・メタデータおよびデータウェアハウス・コントロール・データベースのセットアップ
 - 応答ファイルの作成。ご使用のインストール選択項目を応答ファイル中に保管しておき、後でインストールに使用したり、別のコンピューター上にインストールを複製したりすることができます。

関連タスク:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ツール・カタログ・データベースおよび DAS スケジューラーのセットアップと構成』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『通知、連絡先リストのセットアップ、および構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『UPDATE ADMIN CONFIGURATION コマンド』
- 63 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 68 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』
- 61 ページの『ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』

パーティション・インストール (Windows)

このトピックでは、Windows 上のパーティション・データベース環境での、DB2 Enterprise Server Edition サーバーのインストールについてのステップを概説します。

手順:

以下のようにして、Windows 上のパーティション・データベース環境で DB2 Enterprise Server Edition サーバーをインストールします。

1. DB2 製品の前提条件を確認します。
2. インスタンス所有データベース・パーティション・サーバーのインストールを行います。
3. 参加コンピューター上で使用可能なポート範囲の検査を行います。
4. 応答ファイルを使用した、参加コンピューター上へのデータベース・パーティション・サーバーのインストールを行います。

関連タスク:

- 122 ページの『パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (Windows)』
- 127 ページの『参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (Windows)』
- 128 ページの『参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)』

関連資料:

- 68 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』

単一パーティション・インストール (UNIX)

このトピックでは、AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境での、DB2 Enterprise Server Edition (単一パーティション・データベース環境) または DB2 Workgroup Server Edition のインストール・ステップを概説します。

手順:

以下のようにして、AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境で、DB2 Enterprise Server Edition (単一パーティション・データベース環境) または DB2 Workgroup Server Edition をインストールします。

1. DB2 製品の前提条件を確認します。
2. DB2 製品 CD-ROM をマウントします。
3. HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境でカーネル・パラメーターに変更を加えます。
4. DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 製品をインストールします。DB2 セットアップ・ウィザード機能には、以下のものが組み込まれています。
 - ランチパッド。ここからインストール情報およびリリース情報を参照したり、DB2 バージョン 8 の機能について学習したりすることができます。

- 一般、コンパクト、およびカスタムのインストール・タイプ
- インストールを実行する際の、複数の言語選択項目。
- ユーザー・インターフェースと製品メッセージは、複数の言語で使用でき、選択した言語でインストールされます。複数の言語をインストールすると、希望する言語でインターフェースやメッセージを表示できます。
- DB2 Administration Server のセットアップ (DAS ユーザーのセットアップを含む)
- 管理連絡先およびヘルス・モニター通知のセットアップ
- インスタンスのセットアップおよび構成 (インスタンス・ユーザーのセットアップを含む)
- DB2 ツール・メタデータおよびデータウェアハウス・コントロール・データベースのセットアップ
- 応答ファイルの作成

関連資料:

- 74 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (AIX)』
- 77 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (HP-UX)』
- 79 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (Linux)』
- 83 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

パーティション・インストール (UNIX)

このトピックでは、UNIX ベースのプラットフォーム上のパーティション・データベース環境での、DB2 サーバーのセットアップについてのステップを概説します。

手順:

以下のようにして、UNIX ベースのプラットフォーム上のパーティション・データベース環境で DB2 サーバーをインストールします。

1. DB2 製品の前提条件を確認します。
2. HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境でカーネル・パラメーターに変更を加えます。
3. NFS が実行されているかどうかを確認します。
4. パーティション・データベース環境のホーム・ファイル・システムを作成します。
5. 必要なユーザーを作成します。
6. DB2 製品 CD-ROM をマウントします。
7. DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、基本コンピューターに DB2 サーバーをインストールします。
8. 応答ファイルを使用して、参加コンピューター上へ DB2 サーバーをインストールします。

9. ノード構成ファイル (db2nodes.cfg) を更新します。
10. データベース・パーティション・サーバーの相互通信を使用可能にします。
11. リモート・コマンドの実行を使用可能にします。
12. コントロール・センター管理の使用可能化を行います。

関連タスク:

- 99 ページの『ESE ワークステーションにコマンドを配布する一括作業のセットアップ (AIX)』

DB2 ユーザーおよびグループ (UNIX)

UNIX® 上での DB2® UDB の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。DB2 製品のインストール時に、DB2 セットアップ・ウィザードにより以下のユーザーとグループが自動的に作成されます。

インスタンス所有者

DB2 インスタンスはインスタンス所有者のホーム・ディレクトリー中に作成されます。このユーザー ID は、すべての DB2 プロセスを制御し、インスタンス中に含まれているデータベースで使用されるすべてのファイルシステムと装置を所有します。デフォルト・ユーザーは db2inst1 で、デフォルト・グループは db2iadm1 です。

デフォルト名と同じ (db2inst1 など) ユーザーが既存の場合は、DB2 インストーラーはユーザー db2inst2 を検索します。このユーザーが存在しない場合は、このユーザーを作成します。このユーザーが存在する場合は、DB2 インストーラーは使用可能なユーザーが検出されるまで検索を (db2inst3、db2inst4 というように) 続行します。このアルゴリズムは、fenced ユーザーや DB2 Administration Server のユーザーを作成する際にも適用されます。

fenced ユーザー

fenced ユーザーは、DB2 データベースで使用されるアドレス・スペースの外部にあるユーザー定義関数 (UDF) およびストアード・プロシージャを実行するために使用されます。デフォルト・ユーザーは db2fenc1 で、デフォルト・グループは db2fadm1 です。このレベルのセキュリティーが必要ない場合は (テスト環境など)、インスタンス所有者を fenced ユーザーとして使用することもできます。

DB2 Administration Server のユーザー

DB2 Administration Server のユーザーのユーザー ID は、システムで DB2 Administration Server を実行するために使用されます。デフォルト・ユーザーは dasusr1 で、デフォルト・グループは dasadm1 です。このユーザー ID は、DB2 GUI ツールで、ローカル・サーバーのデータベース・インスタンスやデータベースに対して管理タスクを実行する際にも使用されます。

このユーザーにはデータベースは含まれず、管理サーバーはマシン当たり 1 つのみ存在します。例えば、1 つの管理サーバーで複数のデータベース・サービスを保守することができます。

関連タスク:

- 112 ページの『パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (AIX)』
- 113 ページの『パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (HP-UX)』
- 115 ページの『パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (Linux)』
- 116 ページの『パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (Solaris オペレーティング環境)』

ユーザー権限の付与 (Windows)

このトピックでは、Windows オペレーティング・システムでユーザー権限を付与するのに必要なステップを説明します。DB2 のインストールとセットアップに必要なユーザー・アカウントごとに、それぞれ個別のユーザー権限が推奨されています。

前提条件:

Windows 上で高度なユーザー権利を付与するには、ローカル管理者としてログオンしなければなりません。

手順:

Windows NT

1. 「スタート」をクリックし、「プログラム」->「管理ツール (共通)」->「ドメイン ユーザーマネージャ」を選択します。
2. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウでは、メニュー・バーから「原則」->「ユーザーの権利」を選択します。
3. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウでは、「高度なユーザー権利の表示」チェック・ボックスを選択してから、「権利」ドロップダウン・ボックスで、付与したいユーザー権利を選択します。「追加」をクリックします。
4. 「ユーザーとグループの追加」ウィンドウで、権利を付与したいユーザーまたはグループを選択し、「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで、「この権利を与えられたアカウント」リスト・ボックスから追加したユーザーまたはグループを選択し、「OK」をクリックします。

Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

1. 「スタート」をクリックし、「設定」->「コントロール パネル」->「管理ツール」を選択します。

注: Windows XP および Windows Server 2003 コンピューターでは Windows Theme によってはこれは、「設定」->「コントロール パネル」->「パフォーマンスおよび保守 (Performance and Maintenance)」->「管理ツール」になります。

2. 「ローカル セキュリティ ポリシー」を選択します。

3. 左のウィンドウ区画で、「ローカル ポリシー」オブジェクトを拡張し、「ユーザー権利の割り当て」を選択します。
4. 右のウィンドウ区画で、割り当てたいユーザー権利を選択します。
5. メニューから、「操作」->「セキュリティ...」を選択します
6. 「追加」をクリックし、権利を割り当てるユーザーまたはグループを選択し、「追加」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

注: Windows 2000 または Windows Server 2003 ドメインに属するコンピューターの場合、ドメイン・ユーザー権限がローカル設定をオーバーライドする可能性があります。その場合、ネットワーク管理者がユーザー権限を変更しなければなりません。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 68 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』

DB2 UDB システム管理者グループ (Windows)

デフォルトでは、アカウントが定義されているコンピューター上の管理者グループに属する有効な DB2[®] ユーザー・アカウントすべてにシステム管理 (SYSADM) 権限が認可されます。アカウントがローカル・アカウントである場合、ローカル管理者グループに属していなければなりません。アカウントがドメイン・アカウントである場合、ドメイン・コントローラーにある管理者グループに属していなければなりません。

例えば、ユーザーがドメイン・アカウントにログオンし、DB2 データベースにアクセスしようと試みる場合、DB2 はドメイン・コントローラーに移動してグループ (管理者グループも含む) を列挙します。レジストリー変数

DB2_GRP_LOOKUP=local を設定し、ドメイン・アカウント (またはグローバル・グループ) をローカル管理者グループに追加すれば、DB2 に常時ローカル・コンピューター上でグループ検索を強制実行させることができます。

ドメイン・ユーザーの場合、SYSADM 権限を持つには、ドメイン・コントローラーで管理者グループに属していなければなりません。DB2 は常に、アカウントが定義されるマシンで許可を実行するので、サーバー上でローカル管理者グループにドメイン・ユーザーを追加しても、ドメイン・ユーザーの SYSADM 権限をこのグループに付与することにはなりません。

ドメイン・ユーザーをドメイン・コントローラーの管理者グループに追加しないようにするには、グローバル・グループを作成し、SYSADM 権限を付与したいドメ

イン・ユーザーをこのグループに追加してから、グローバル・グループの名前を持つ DB2 構成パラメーター SYSADM_GROUP を更新します。これを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
db2stop
db2 update dbm cfg using sysadm_group global_group
db2start
```

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

Kerberos 認証

AIX Kerberos 認証の使用を計画している場合は、AIX V5.2 以降を実行している IBM Network Authentication Service クライアント V1.3 以降が必要です。

HP-UX

HP-UX では Kerberos 認証はサポートされていません。

Linux Kerberos 認証の使用を計画している場合は、以下のファイルセットを含む Redhat Enterprise Linux Advanced Server 2.1 (32 ビット Intel のみ) が必要です。

- krb5-libs
- krb5-workstation

Solaris オペレーティング環境

Kerberos 認証の使用を計画している場合は、SEAM (Sun Enterprise Authentication Mechanism) クライアントを含む Solaris オペレーティング環境 8 以降が必要です。SEAM クライアントは、Solaris 8 Admin Pack に組み込まれています。また、IBM NAS Toolkit V1.3 も必要です。

Windows

Kerberos 認証の使用を計画している場合は、Windows 2000 以上が必要です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『サーバーでの認証メソッド』

第 8 章 インストール要件

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、および資料のために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、最低でも RAM の 2 倍の SWAP スペースが推奨されています (要求されているわけではありません)。

NIS インストールの注意点

NIS または NIS+ といったセキュリティー・ソフトウェアが組み込まれた環境では、インストールの注意点がいくつかあります。DB2 インストール・スクリプトは、ユーザーやグループといった、セキュリティー・パッケージの制御下にあるオブジェクトを更新しようとするますが、NIS または NIS+ がインストールされている場合はそうすることはできません。

インスタンスの作成時に、セキュリティー・コンポーネントが存在しないと、インスタンス所有ユーザーのグループ・プロパティが自動的に変更されて、Administration Server のグループにセカンダリー・グループとして追加されます。そして、Administration Server のグループ・プロパティがインスタンス所有者のグループを組み込むように変更されます。インスタンス作成プログラムがこれらのプロパティの変更を行うことができない場合には (NIS/NIS+ がグループを制御している場合には行えない)、できなかったことを報告します。警告メッセージで、手動で変更を行うのに必要な情報を提供します。

外部セキュリティー・プログラムのために、DB2 インストールまたはインスタンス作成プログラムがユーザー特性を変更できない環境では、これらのことに注意する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードがご使用のコンピューターで NIS を検出した場合、インストール中に新規ユーザーを作成するオプションを提供されません。その代わりに既存のユーザーを選択しなければなりません。

NIS または NIS+ を使用している場合には、以下の制約事項を考慮してください。

- DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、NIS サーバー上でグループおよびユーザーを作成する必要があります。
- NIS サーバー上で、DB2 インスタンス所有者や DB2 Administration Server 用にセカンダリー・グループを作成する必要があります。その後、インスタンス所有者のプライマリー・グループを、セカンダリー DB2 Administration Server グループへ追加しなければなりません。同様に、プライマリー DB2 Administration Server グループについても、インスタンス所有者のセカンダリー・グループへ追加しなければなりません。
- DB2 ESE システムでは、インスタンスを作成する前に、etc/services ファイル内にインスタンスの項目を入れておく必要があります。例えば、ユーザー db2inst1 のインスタンスを作成する場合、以下のような項目が必要です。

```
DB2_db2inst1    50000/tcp
```

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』
- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition の必須のグループとユーザーの手動作成 (Linux)』

DB2 サーバーのインストール (Windows)

DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)

DB2 UDB サーバーをインストールする場合、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、ハードウェア、および通信要件に適合していなければなりません。

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

DB2 UDB Workgroup Server Edition は、以下のオペレーティング・システムで稼働します。

- Windows NT バージョン 4 (Service Pack 6a 以降を適用)
- Windows 2000 Professional、Standard Server、Advanced Server、および Datacenter Server
- Windows XP (32 ビット)
- Windows Server 2003 (32 ビット)

DB2 UDB Enterprise Server Edition は、以下のオペレーティング・システムで稼働します。

- Windows NT バージョン 4 (Service Pack 6a 以降を適用)
- Windows 2000 Professional、Standard Server、Advanced Server、および Datacenter Server。 Windows ターミナル・サーバーには Windows 2000 Service Pack 2 以降が必要です。
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)

以下のいずれかの環境で DB2 アプリケーションを実行するには、Windows 2000 Service Pack 3 と Windows XP Service Pack 1 が必要です。

- Open Database Connectivity (ODBC) を使用する COM+ オブジェクトを持つアプリケーション
- OLE DB リソース・プールを使用不可にした状態で、ODBC に対して OLE DB Provider を使用するアプリケーション

ご使用のアプリケーション環境が上記の条件に合うかがわからない場合は、適切な Windows サービス・レベルをインストールすることをお勧めします。

COM+ に関して詳しくは、以下の Microsoft Knowledge Base の記事をご覧ください。

- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=KB;EN-US;306414>

DB2 サーバーまたは DB2 製品の一部として出荷されているアプリケーションを実行するためには、Windows 2000 Service Pack 3 と Windows XP Service Pack 1 は必要ありません。

ハードウェア要件

32 ビット DB2 製品では、Pentium または Pentium 互換 CPU が必要です。64 ビット DB2 製品では、Itanium または Itanium 互換 CPU が必要です。

ソフトウェア要件

- MDAC 2.7 が必要です。DB2 セットアップ・ウィザードは、MDAC 2.7 がまだインストールされていない場合はインストールします。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

Windows 2000 ターミナル・サーバーでのインストールの制限:

Windows 2000 ターミナル・サーバー・エディション上のリモート・セッションを使って、ネットワークにマップされたドライブから DB2 バージョン 8 をインストールすることはできません。有効な予備手段としては、汎用命名規則 (UNC) のパスを使ってインストールを立ち上げるか、コンソール・セッションからインストールを実行します。

例えば、serverA 上のディレクトリ c:%pathA%pathB%...%pathN が serverdir として共有されている場合は、
%%serverA%serverdir%filename.ext を開いて、サーバー上のファイル c:%pathA%pathB%...pathN%filename.ext にアクセスします。

通信要件

APPC、TCP/IP、MPTN (TCP/IP を介した APPC)、名前付きパイプ、および NetBIOS を使用することができます。バージョン 8 の DB2 UDB データベースをリモート側で管理するためには、TCP/IP を使用して接続する必要があります。DB2 バージョン 8 サーバーは DB2 Connect サーバー・サポート機能を使用して、アウトバウンドのクライアント APPC 要求のみサポートします。インバウンドのクライアント APPC 要求のサポートはありません。

- TCP/IP、名前付きパイプ、および NetBIOS 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- DB2 Connect サーバー・サポート機能を介した APPC (CPI-C) 接続の場合は、以下の表に示されている通信製品のいずれかが必要です。

表 2. サポートされる SNA (APPC) 製品

オペレーティング・システム	SNA (APPC) 通信製品
Windows NT	IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降 IBM パーソナル・コミュニケーションズ for Windows バージョン 5.0、CSD 3 付き Microsoft SNA Server バージョン 3 Service Pack 3 以降

表 2. サポートされる SNA (APPC) 製品 (続き)

オペレーティング・システム	SNA (APPC) 通信製品
Windows 2000	IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降 IBM パーソナル・コミュニケーションズ for Windows バージョン 5.0、CSD 3 付き Microsoft SNA Server バージョン 4 Service Pack 3 以降
Windows XP	IBM パーソナル・コミュニケーションズ for Windows バージョン 5.5、APAR IC23490 付き
Windows Server 2003	サポートされていません。

- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を使用したい場合、Microsoft LDAP クライアントまたは IBM SecureWay LDAP クライアント V3.2.1 以降のいずれかが必要になります。

Windows (64 ビット) 考慮事項

- ローカル 32 ビット・アプリケーションはサポートされません。
- 32 ビット UDF およびストアード・プロシージャはサポートされません。
- リモート 32 ビット下位レベル・クライアントからの SQL 要求はサポートされません。
- DB2 バージョン 8 Windows 64 ビット・サーバーは、SQL 要求のためだけに、DB2 バージョン 6 およびバージョン 7 の 32 ビット・クライアントからの接続をサポートします。バージョン 7 の 64 ビット・クライアントからの接続はサポートされません。

関連タスク:

- 53 ページの『単一パーティションのインストール (Windows)』

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 Universal Database インストール時のセキュリティー問題

製品をインストールする時点から、セキュリティー問題は DB2[®] 管理者にとって重要な問題になります。

DB2 Universal Database™ (DB2 UDB) のインストールを完了するには、ユーザー ID、グループ名、およびパスワードが必要です。GUI ベースの DB2 UDB インストール・プログラムは、さまざまなユーザー ID およびグループのデフォルト値を作成します。作成されるデフォルトは、UNIX または Windows プラットフォームのどちらでインストールするかに応じて異なります。

- UNIX プラットフォームでは、DB2 UDB インストール・プログラムが作成するデフォルト・ユーザーは、DAS (dasusr)、インスタンス所有者 (db2inst)、および fenced ユーザー (db2fenc) で異なります。

DB2 UDB インストール・プログラムは、既存でないユーザー ID が作成されるように、デフォルトのユーザー名に 1 から 99 までの数値を付加します。例えば、ユーザー db2inst1 および db2inst2 が既存の場合は、DB2 UDB インストール・プログラムはユーザー db2inst3 を作成します。10 より大きい数値が使用される場合は、デフォルト・ユーザー ID の名前の文字部分は切り捨てられます。例えば、ユーザー ID db2fenc9 が既存の場合は、DB2 UDB インストール・プログラムはこのユーザー ID 中の c を切り捨ててから、10 を付加します (db2fen10)。デフォルト DAS ユーザーに数値が付加される場合は切り捨ては行われません (dasusr24 など)。

- Windows プラットフォームでは、DB2 UDB インストール・プログラムは DAS ユーザー、インスタンス所有者、および fenced ユーザーのデフォルト・ユーザー db2admin を作成します。UNIX プラットフォームとは違って、ユーザー ID に数値は付加されません。

管理者以外のユーザーがデフォルトを調べ、データベースやインスタンス中で不適切な方法で使用するリスクを最小限にするために、インストール時にデフォルトを、選択した新規または既存のユーザー ID に変更してください。

注: 応答ファイル・インストールでは、ユーザー ID やグループ名のデフォルト値は使用されません。これらの値は、応答ファイル内に指定されているはずで

す。

ユーザー認証時にパスワードは非常に重要です。オペレーティング・システム・レベルで認証要件が設定されていない場合に、データベースがオペレーティング・システムを使用してユーザーを認証していると、ユーザーは接続を許可されます。例えば、UNIX オペレーティング・システムでは、未定義パスワードは NULL として扱われます。この状態では、定義済みのパスワードのないユーザーは、NULL パスワードがあると見なされます。オペレーティング・システムのレベルでは、これは一致しており、ユーザーは妥当性検査されてデータベースに接続できます。オペレーティング・システムにデータベースに関するユーザー認証をさせたい場合は、オペレーティング・システム・レベルのパスワードを使用してください。

注: データベース環境が共通基準要件を満たすようにしたい場合は、未定義のパスワードを使用できません。

DB2 Universal Database のインストール後にも、ユーザーに付与されたデフォルト特権を確認して (必要な場合は) 変更してください。デフォルトでは、オペレーティング・システムごとに、インストール・プロセスはシステム管理 (SYSADM) 特権を以下のユーザーに付与します。

Windows® 9x	Windows 98、または Windows ME ユーザー。
その他の Windows 環境	Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 では、管理者グループに属する有効な DB2 UDB ユーザー名。
UNIX プラットフォーム	インスタンス所有者のプライマリー・グループに属している有効な DB2 UDB ユーザー名。

SYSADM 特権は、DB2 Universal Database 中で使用できる最も強力な特権の集合です。したがって、デフォルトでこれらのすべてのユーザーに SYSADM 特権を付与

したくない場合もあります。DB2 UDB には、管理者がグループや個人のユーザー ID に特権を付与して取り消す機能が備えられています。

管理者は、データベース・マネージャー構成パラメーター `sysadm_group` を更新すると、どのユーザーのグループが SYSADM 特権を制御するか制御できます。DB2 UDB のインストールおよびその後のインスタンスとデータベースの作成の両方に関するセキュリティ要件を完成するには、以下の指針に従わなければなりません。

(`sysadm_group` を更新して)、システム管理グループとして定義されているグループが存在していなければなりません。このグループの名前は、インスタンス所有者のために作成されたグループとして簡単に識別できる必要があります。このグループに属するユーザー ID とグループには、それぞれのインスタンスに関するシステム管理者権限があります。

管理者は、特定のインスタンスに関連していることが簡単に認識されるインスタンス所有者ユーザー ID を作成することを考慮する必要があります。このユーザー ID には、そのグループの一員として、前述の作成された SYSADM グループの名前がある必要があります。別の推奨事項として、このインスタンス所有者ユーザー ID を、インスタンス所有者グループのメンバーとして使用することに限定し、他のグループでは使用しないことをお勧めします。こうすると、インスタンスやインスタンス中のオブジェクトを変更できるユーザー ID とグループの急増を制御できるはずですが。

作成するユーザー ID は、インスタンス中のデータやデータベースに入ることを許可する前の認証に使用するパスワードに関連していなければなりません。パスワードを作成する際には、ご自分の組織のパスワード命名指針に従うことをお勧めします。

関連概念:

- 「管理ガイド: プランニング」の『NLS 環境での命名規則』
- 「管理ガイド: プランニング」の『Unicode 環境での命名規則』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『Windows NT プラットフォームでのユーザーのセキュリティに関する考慮事項』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『UNIX プラットフォームでのユーザーのセキュリティに関する考慮事項』
- 「管理ガイド: プランニング」の『認証』
- 「管理ガイド: プランニング」の『許可』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『インスタンス・ディレクトリーの場所』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『一般的な命名規則』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 にインストールする場合には、以下の DB2 サーバー・ユーザー・アカウントが必要です。

- 1 つのインストール・ユーザー・アカウント
- 1 つ以上のセットアップ・ユーザー・アカウント
 - 1 つの DB2 Administration Server (DAS) ユーザー・アカウント
 - 1 つの DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

インストール・ユーザー・アカウントは、DB2 セットアップ・ウィザードの実行に先立って定義する必要があります。セットアップ・ユーザー・アカウントは、インストールの前に定義することもできますし、DB2 セットアップ・プログラムに作成させることもできます。

すべてのユーザー・アカウント名は、ご使用のシステムの命名規則と DB2 命名規則に従ったものでなければなりません。

Windows 上の DB2 拡張セキュリティー:

現在 DB2 は拡張 Windows セキュリティーを備えています。ユーザー ID を使用して DB2 をインストールできますが、そのユーザー ID が DB2ADMNS または DB2USERS グループのいずれかに属していない場合は、そのユーザー ID は DB2 コマンドを実行できません。

これらの 2 つの新しいグループは、DB2 インストーラーによって作成されます。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。

このセキュリティー機能を使用可能にするには、DB2 のインストール時に、「DB2 オブジェクトのためにオペレーティング・システム・セキュリティーを使用可能にする」パネルで、「オペレーティング・システム・セキュリティーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「DB2 管理者グループ」フィールドと「DB2 ユーザー・グループ」フィールドで、デフォルト値を受け入れます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。既存のグループ名と競合する場合は、グループ名を変更するようプロンプトで指示されます。必要な場合は、独自の値を指定できます。

DB2 サーバー・ユーザー・アカウント:

インストール・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、インストールを実行するために必要です。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者 グループに属していなければなりません。

ドメイン・アカウントの場合、DB2 サーバー上のユーザー ID を検査するには、インストール・ユーザー ID が、アカウントを作成するドメイン上のドメイン管理者グループに属していなければなりません。

標準装備のローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 Administration Server (DAS) のユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 Administration Server (DAS) に必要です。

応答ファイルのインストールを実行している場合に、応答ファイル中にローカル・システム・アカウントを指定することもできます。詳細については、`db2\windows\samples` ディレクトリー中のサンプル応答ファイルを参照してください。

DB2 Administration Server (DAS) は、GUI ツールをサポートするために使用される特殊 DB2 管理サービスで、ローカルおよびリモート DB2 サーバー上の管理タスクを援助します。DAS にはユーザー・アカウントが割り振られており、それは、DAS サービスの開始時のコンピューターへの DAS サービスのログオンに使われます。

DAS ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者 グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- メモリー内のページのロック
- サービスとしてログオン
- クォータの増加
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー内のページのロック特権は、AWE (高機能ウィンドウ操作拡張) サポートの場合に必要です。「プログラムのデバッグ」特権は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用することが明示的に指定されている場合のみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成される場合は、そのユーザー・アカウントにこれらの特権が付与されます。また、ユーザー・アカウントが既存の場合は、このアカウントにもこれらの特権が付与されます。インストール時に特権が付与される場合、これらの特権の一部は、これらの特権が付与されたアカウントによる最初のログオン時かリブート時にのみ有効になります。

ご使用の環境内のそれぞれの DB2 システム上の DAS ユーザーに、SYSADM 権限を与えることをお勧めします。そうすれば、必要であれば、

それが他のインスタンスを開始したり停止したりすることができます。デフォルトでは、管理者グループに参加しているユーザーには SYSADM 権限があります。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 インスタンスに必要です。どの DB2 インスタンスにも、インスタンスの作成時に割り振られる 1 つのユーザーがあります。インスタンスの開始時に、DB2 はこのユーザー名でログオンします。

標準装備のローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- クォータの増加
- メモリー内のページのロック
- サービスとしてログオン
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー内のページのロック特権は、AWE (高機能ウィンドウ操作拡張) サポートの場合に必要です。「プログラムのデバッグ」特権は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用することが明示的に指定されている場合のみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成される場合は、そのユーザー・アカウントにこれらの特権が付与されます。また、ユーザー・アカウントが既存の場合は、このアカウントにもこれらの特権が付与されます。インストール時に特権が付与される場合、これらの特権の一部は、これらの特権が付与されたアカウントによる最初のログオン時かりブート時にのみ有効になります。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 53 ページの『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 54 ページの『パーティション・インストール (Windows)』

パーティション DB2 サーバーの環境の準備 (Windows)

このトピックでは、DB2 Enterprise Server Edition のパーティション・インストールのための Windows 環境を準備するために必要なステップを説明します。

制約事項:

それぞれの参加コンピューターには、同じオペレーティング・システムが必要です。例えば、パーティション・データベース・システムに、Windows NT および Windows 2000 の両方のオペレーティング・システムを組み込むことはできません。

手順:

以下のようにして、インストールのために Windows 環境を準備します。

1. 基本コンピューターおよび参加コンピューターが同じ Windows ドメインに属していることを確認します。

Windows NT

「コントロール パネル」からアクセスできる「ネットワーク」ダイアログを使用して、コンピューターが属するドメインを調べることができます。

Windows 2000 または Windows Server 2003

「コントロール パネル」からアクセスできる「システム プロパティ」ダイアログを使用して、コンピューターが属するドメインを調べることができます。

2. 基本コンピューターと参加コンピューターの時刻と日付の設定が整合していることを確認してください。整合していると見なすためには、すべてのコンピューターの GMT (グリニッジ標準時) 時刻の差が 1 時間以内でなければなりません。

システム日付と時刻は、「コントロール パネル」からアクセスできる「日付と時刻」ダイアログを使用して変更することができます。max_time_diff 構成パラメーターを使えば、この制限を変更することが可能です。このデフォルトは max_time_diff = 60 になっており、この場合に許容される差は 60 分未満です。

3. すべての参加コンピューターが TCP/IP を使用して相互に通信できることを確認します。
 - a. 1 つの参加コンピューター上で **hostname** コマンドを入力します。このコマンドはそのコンピューターのホスト名を戻します。
 - b. 別の参加コンピューターで、以下のコマンドを入力します。

```
ping hostname
```

hostname は、基本コンピューターのホスト名を表します。テストが成功した場合は、以下のような出力を受け取ります。

```
Pinging ServerA.ibm.com [9.21.27.230] with 32 bytes of data:
```

```
Reply from 9.21.27.230: bytes=32 time<10ms TTL=128
Reply from 9.21.27.230: bytes=32 time<10ms TTL=128
Reply from 9.21.27.230: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

すべての参加コンピューターが TCP/IP を介して相互に通信できることを確認できるまで、以上のステップを繰り返します。それぞれのコンピューターに静的 IP アドレスがなければなりません。

複数のネットワーク・アダプターを使用する予定であれば、データベース・パーティション・サーバーの相互通信に使用するアダプターを指定することができます。インストール完了後に、**db2nchg** コマンドを使用して、**db2nodes.cfg** ファイルの **netname** フィールドを指定します。

4. インストール中に、DB2 Administration Server ユーザー・アカウントを入力するよう指示されます。これは、DB2 Administration Server (DAS) で使用されるローカルまたはドメインのユーザー・アカウントです。DAS は、GUI ツールをサポートするために使用される管理サービスで、管理タスクを援助します。ここでユーザーを定義することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザーを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するアカウントが、ドメイン・ユーザーを作成する権限を持っている必要があります。
5. 基本コンピューターで、インスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールする場合には、ローカル管理者 グループに属するドメイン・ユーザー・アカウントが必要です。DB2 のインストール時には、このユーザーとしてログオンします。同じユーザー・アカウントは、それぞれの参加コンピューター上のローカル管理者 グループにも追加する必要があります。このユーザーには、「オペレーティング システムの一部として機能する」というユーザー権限も設定する必要があります。
6. DB2 を各参加コンピューター上の同じドライブにインストールするようにしてください。例えば DB2 を、インスタンス所有データベース・サーバーには c: ドライブに、あるデータベース・パーティション・サーバーには d: ドライブに、そして別のデータベース・パーティション・サーバーには j: ドライブにインストールするようなことはしないでください。インスタンス所有データベース・サーバーの c: ドライブに DB2 をインストールしたら、他の参加データベース・パーティション・サーバーにも c: ドライブに DB2 をインストールします。
7. インストール中に、DB2 インスタンスに関連付けられたドメイン・ユーザー・アカウントを入力するよう指示されます。どの DB2 インスタンスにも、1 つのユーザーが割り振られます。インスタンスの開始時に、DB2 はこのユーザー名でログオンします。ここでユーザーを定義することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザーを作成させることもできます。

DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザーを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するアカウントが、ドメイン・ユーザーを作成する権限を持っている必要があります。インスタンス・ユーザー・ドメイン・アカウントは、すべての参加コンピューター上でローカル管理者 グループに属している必要があります、以下のユーザー権限を付与されることとなります。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- トークン・オブジェクトの作成
- メモリー内のページのロック
- サービスとしてログオン
- クォータの増加

- プロセス・レベル・トークンの置き換え

インストール・プログラムは、プログラムのデバッグ特権を除く上記の特権をすべて付与します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2nchg - データベース・パーティション・サーバー構成の変更コマンド』
- 68 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』

高速コミュニケーション・マネージャー (Windows)

高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) は、DB2[®] UDB Enterprise Server Edition の通信サポートを提供します。データベース・パーティション・サーバーには、それぞれ 1 つの FCM スレッドがあります。それによって、データベース・パーティション・サーバーの相互通信の提供、エージェント要求の処理、およびメッセージ・バッファの送達を行います。インスタンスを開始すると、FCM スレッドが開始されます。

データベース・パーティション・サーバーの相互通信で障害が発生した場合や、または通信が再確立された場合、FCM スレッドは情報 (データベース・システム・モニターで照会できる情報) を更新し、適切な処置 (影響を受けたトランザクションのロールバックなど) をとらせます。データベース・システム・モニターを使用すると、FCM 構成パラメーターを設定するのに役立ちます。

注: FCM メッセージ・バッファの数は、*fcm_num_buffers* データベース・マネージャー構成パラメーターで指定することができます。

関連タスク:

- 127 ページの『参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (Windows)』

仮想インターフェース・アーキテクチャー

Windows[®] では、パーティション DB2[®] UDB Enterprise Server Edition は、仮想インターフェース (VI) アーキテクチャーの利点を活用することができます。VI アーキテクチャーは、サーバーでデータをやりとりする場合の大ボリュームの標準の相互接続のニーズにこたえるため開発されたものです。VI アーキテクチャーを使うと、大ボリュームのデータをクラスター・サーバーが互いに高速でやりとりすることができます。

VI アーキテクチャーが開発される前は、クラスター内のデータベース・パーティション・サーバー相互の通信は、オペレーティング・システムに備わったネットワーク・インフラストラクチャーを介して行われていました。この以前の方式は、パーティション・データベース・サーバーの通信が行われるたびに、オペレーティング・システムにかかる処理のオーバーヘッドが生じていました。

VI アーキテクチャーは、シン (thin) でしかも高速のインターフェースを定義し、それによって、ネットワークのハードウェアにソフトウェア・アプリケーションを直接接続する一方で、オペレーティング・システムのセキュリティー保護を強固に保

ちます。通信に重点が置かれた環境では、DB2 ESE とともに VI アーキテクチャーを導入すれば、データベース・トランザクションと照会の全体的なシステム・スループットで、かなりの改善を実現することができます。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 UDB Enterprise Server Edition』

関連タスク:

- 54 ページの『パーティション・インストール (Windows)』

DB2 サーバーのインストール (UNIX)

DB2 サーバーのインストール要件 (AIX)

このトピックでは、AIX 上の、DB2 Enterprise Server Edition および DB2 Workgroup Server Edition のハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

ハードウェア要件

以下のいずれかが必要です。

- IBM RISC/6000
- eServer pSeries

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

単一パーティションまたはパーティション・データベース環境のいずれの場合も、DB2 Enterprise Server Edition は以下のオペレーティング・システム上で使用できます。

AIX バージョン 4.3.3 (32 ビットのみ)

保守レベル 11

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY49385

Java の場合:

OpenGL.OpenGL_X.rte.base

OpenGL.OpenGL_X.rte.soft

X11.adt.lib

AIX バージョン 5.1.0 (32 ビットおよび 64 ビット)

保守レベル 5

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY48735

JFS2 ファイルシステムの場合:

APAR IY49254

Java の場合:

推奨される保守パッケージ AIX 5100-04 および APAR IY46667

1000 より多くの db2agent を実行する場合:

APAR IY49220、および db2start の前か AIX ブート中に "vmtune -T 0" を指定

AIX バージョン 5.2.0 (32 ビットおよび 64 ビット)

保守レベル 2、および

並行入出力 (CIO) および直接入出力 (DIO) マウント・ボリュームの場合:

APAR IY49129 および IY49346

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY48339

JFS2 ファイルシステムの場合:

APAR IY49304

Java の場合:

推奨される保守パッケージ AIX 5200-01 および APAR IY46668

1000 より多くの db2agent を実行し、32 ビット AIX カーネルを使用する場合:

APAR IY49885 および db2start の前か AIX ブート中に "vmo -o pta_balance_threshold=0" を指定

単一パーティション環境専用の DB2 Workgroup Server Edition は、以下のオペレーティング・システム上で使用できます。

AIX バージョン 4.3.3 (32 ビットのみ)

保守レベル 11

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY49385

Java の場合:

OpenGL.OpenGL_X.rte.base

OpenGL.OpenGL_X.rte.soft

X11.adt.lib

AIX バージョン 5.1.0 (32 ビットおよび 64 ビット)

保守レベル 5

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY48735

JFS2 ファイルシステムの場合:

APAR IY49254

Java の場合:

推奨される保守パッケージ AIX 5100-04 および APAR IY46667

1000 より多くの db2agent を実行する場合:

APAR IY49220、および db2start の前か AIX ブート中に "vmtune -T 0" を指定

注: `instfix -v -i -k <APAR>` コマンドを使用して、特定の APAR がシステムにインストールされているかどうかを照会できます。例えば、`instfix -v -i -k IY31254`。

以下の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- アジア諸国の言語の場合、以下のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、以下のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.base 4.3.3.76
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.soft 4.3.3.75
 - X11.adt.lib 4.3.3.10
- AIX バージョン 5.x では、以下のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x

AIX ファイル・セットは、<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

DB2 Administration Server (DAS) の要件

以下の要件を満たす必要があります。

- GUI ツールが適切に作動するよう管理したい DB2 サーバーごとに DAS を作成しなければなりません。物理マシン当たり 1 つのみ DAS が存在している必要があります。
- 各 DAS は (インスタンスと同じ) ユーザー ID のもとで作成されなければなりません。
- すべての物理コンピューターで同じユーザー ID を使用する場合は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーは他のコンピューターと共有 (クロス・マウント) できません。
- DAS ごとに異なるユーザー ID を使用する場合は、使用されるユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有 (クロス・マウント) できます。

- DAS が各コンピューター上に作成されていれば、以下のいずれでもかまいません。
 - DAS ごとに異なるユーザー ID を使用します。または
 - 同じユーザー ID を使用し、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有しません。

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 UDB のインストール

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 製品のインストールはサポートされていません。NFS 上に DB2 をインストールする (例えば NFS に /usr/opt/db2_08_01 または /opt/IBM/db2/V8.1 をマウントする) とエラーが起こりやすく、そのエラーは診断が困難です。

DB2 インストール・イメージだけが NFS マウント可能です (DB2 を実行しているシステム以外のシステム、あるいはリモート・ファイル・システムまたはパーティション上に置くことができます)。DB2 は、NFS マウント・ドライブではなく、ローカル・ドライブにインストールしなければなりません。

例えば、DB2 製品 CD をシステム A (例えば、NFS サーバー) にコピーし、NFS を使ってシステム A から DB2 インストール・コードを起動してシステム B、C、および D に DB2 をインストールすることができます。ただし、DB2 製品をシステム A にインストールし、DB2 をシステム B、C、および D 上で使用するということはできません。また、システム B 上で DB2 インストール・プロセスを起動して、システム A にコードをインストールし、それをシステム B 上で使用するということもできません。DB2 コードは DB2 を実行するシステム上になければなりません。

関連タスク:

- 54 ページの『単一パーティション・インストール (UNIX)』

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 サーバーのインストール要件 (HP-UX)

このトピックでは、HP-UX 上の DB2 サーバーのためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件をリストします。

ハードウェア要件

- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム
- HP Integrity Series サーバー

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

DB2 Workgroup Server Edition (単一パーティション・データベース環境のみ)、および DB2 Enterprise Server Edition (単一パーティションおよびパーティション・データベース環境) は、以下をインストール済みの、PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11) 上で実行することができます。

- 2003 年 6 月 GOLDBASE11i バンドル
- 2003 年 6 月 GOLDAPPS11i バンドル
- パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、PHCO_27434、および PHCO_29960
- Java SDK 1.3.1 のパッチ。必要なパッチについては、
<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

DB2 Workgroup Server Edition (単一パーティション・データベース環境のみ)、および DB2 Enterprise Server Edition (単一パーティションおよびパーティション・データベース環境) は、パッチ PHKL_30065 をインストール済みの、Itanium ベースのシステム用の HP-UX バージョン 11i v2 (B.11.23) 上で実行することができます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

通信要件

APPC または TCP/IP。データベースをリモート側で管理するときには使用できるのは、TCP/IP のみです。

- TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- DB2 Connect サーバー・サポート機能を介した APPC (CPI-C) 接続の場合は、以下のソフトウェアが必要です。
 - SNAplus2 Link R6.11.00.00
 - SNAplus2 API R.6.11.00.00

DB2 UDB バージョン 8 サーバーは DB2 Connect サーバー・サポート機能を使用して、アウトバウンドのクライアント APPC 要求のみサポートします。インバウンドのクライアント APPC 要求のサポートはありません。

DB2 バージョン 8 の HP-UX 64 ビット・サーバーは、DB2 バージョン 7 の 64 ビット・ローカル・アプリケーションの実行をサポートしません。

DB2 Administration Server (DAS) の要件

以下の要件を満たす必要があります。

- コントロール・センターおよびタスク・センター用の各物理システムに、DAS が正しく動作するように作成されなければなりません。
- 各 DAS は (インスタンスと同じ) ユーザー ID のもとで作成されなければなりません。
- すべての物理システムで同じユーザー ID を使用する場合は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーは他のシステムと共有 (クロス・マウント) できません。
- DAS ごとに異なるユーザー ID を使用する場合は、使用されるユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有 (クロス・マウント) できます。
- DAS が各システム上に作成されていれば、以下のいずれでもかまいません。

- DAS ごとに異なるユーザー ID を使用します。または
- 同じユーザー ID を使用し、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有しません。

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 UDB のインストール

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 製品のインストールはサポートされていません。NFS 上に DB2 をインストールする (例えば NFS に /usr/opt/db2_08_01 または /opt/IBM/db2/V8.1 をマウントする) とエラーが起こりやすく、そのエラーは診断が困難です。

DB2 インストール・イメージだけが NFS マウント可能です (DB2 を実行しているシステム以外のシステム、あるいはリモート・ファイル・システムまたはパーティション上に置くことができます)。DB2 は、NFS マウント・ドライブではなく、ローカル・ドライブにインストールしなければなりません。

例えば、DB2 製品 CD をシステム A (例えば、NFS サーバー) にコピーし、NFS を使ってシステム A から DB2 インストール・コードを起動してシステム B、C、および D に DB2 をインストールすることができます。ただし、DB2 製品をシステム A にインストールし、DB2 をシステム B、C、および D 上で使用するということはできません。また、システム B 上で DB2 インストール・プロセスを起動して、システム A にコードをインストールし、それをシステム B 上で使用するということもできません。DB2 コードは DB2 を実行するシステム上になければなりません。

関連タスク:

- 93 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 サーバーのインストール要件 (Linux)

このトピックでは、Linux 上の DB2 Enterprise Server Edition、Workgroup Server Edition、DB2 Workgroup Server Unlimited Edition のハードウェア、配布、パッケージ、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

ハードウェア要件

DB2 Workgroup Server Edition および DB2 Workgroup Server Unlimited Edition は、以下のオペレーティング・システムで稼働することができます。

- Intel 32 ビット
- Linux をサポートする IBM eServer iSeries
- Linux をサポートする IBM eServer pSeries

単一パーティションまたはパーティション環境のいずれの場合も、DB2 Enterprise Server Edition は、以下のオペレーティング・システムで稼働することができます。

- Intel 32 ビットおよび 64 ビット
- AMD 64 ビット

- PowerPC 64 ビット
- DB2 31 ビットには、 S/390 9672 Generation 5 以降、 Multiprise 3000、
または eServer zSeries が必要です。
- DB2 64 ビットには eServer zSeries が必要です。
- Linux をサポートする IBM eServer iSeries
- Linux をサポートする IBM eServer pSeries

配布要件

サポートされている配布レベルおよびカーネル・レベルの最新情報については、ブラウザで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

パッケージ要件

以下の表には、 DB2 パーティション・サーバー (Linux) バージョン 8 の場合の、 SuSE と RedHat の配布に関するパッケージ要件がリストされています。 pdksh パッケージはすべての DB2 システムで必要です。 rsh-server および nfs-utils パッケージは、パーティション・データベース・システムで必要です。パーティション・データベース・システムで DB2 のセットアップを続行するには、両方のパッケージともインストールして実行する必要があります。 rsh-server を実行するには、 inetd (または xinetd) もインストールして実行しなければなりません。

詳細は、Linux 配布の資料を参照してください。

SuSE のパッケージ要件

パッケージ名	説明
pdksh	Korn シェル。このパッケージはパーティション・データベース環境で必要です。
rsh-server	このパッケージにはサーバー・プログラムの集合が含まれており、ユーザーはこれらのプログラムを使用して、リモート・コンピュータ上でコマンドを実行し、他のコンピュータにログインし、コンピュータ (rsh、rexec、rlogin、および rcp) 間でファイルをコピーできます。
nfs-utils	ネットワーク・ファイル・システム・サポート・パッケージ。このパッケージを使用すると、ローカル・ファイルからリモート・コンピュータにアクセスできます。

RedHat のパッケージ要件

ディレクトリ	パッケージ名	説明
/System Environment/Shell	pdksh	Korn シェル。このパッケージはパーティション・データベース環境で必要です。
/System Environment/Daemons	rsh-server	このパッケージにはプログラムの集合が含まれており、ユーザーはこれらのプログラムを使用して、リモート・コンピュータ上でコマンドを実行できます。パーティション・データベース環境で必要です。

RedHat のパッケージ要件

ディレクトリー	パッケージ名	説明
/System Environment/Daemons	nfs-utils	ネットワーク・ファイル・システム・サポート・パッケージ。このパッケージを使用すると、ローカル・ファイルからリモート・コンピューターにアクセスできます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- オンライン・ヘルプを表示するには Web ブラウザーが必要です。
- グラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示できる X Window System ソフトウェアが必要です。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Enterprise Server Edition をインストールしたい場合や、DB2 グラフィック・ツールをしたい場合は、このソフトウェアが必要です。

通信要件

リモート・データベースにアクセスするには TCP/IP が必要です。特定の Linux 配布版には TCP/IP 接続が備えられており、インストール時に選択できます。Linux コンピューターを既存のネットワークにインストールしており、このコンピューターで静的 IP アドレスを使用する必要がある場合は、ネットワーク管理者から以下の表に示されているような情報を収集する必要があります。

TCP/IP 設定の例

名前	番号の例
ホスト IP アドレス	191.72.1.3
サブネット・マスク	255.255.255.0
ゲートウェイ	191.72.1.1
ドメイン・ネーム	191.72.3.1

Linux 配布版のインストール時か、配布版のセットアップ・ユーティリティを使用してインストールをし終えた後に、この情報を指定する必要があります。

DB2 Administration Server (DAS) の要件

以下の要件を満たす必要があります。

- コントロール・センターおよびタスク・センター用の各物理システムに、DAS が正しく動作するように作成されなければなりません。
- 各 DAS は (インスタンスと同じ) ユーザー ID のもとで作成されなければなりません。
- すべての物理システムで同じユーザー ID を使用する場合は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーは他のシステムと共有 (クロス・マウント) できません。

- DAS ごとに異なるユーザー ID を使用する場合は、使用されるユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有 (クロス・マウント) できます。
- DAS が各システム上に作成されていれば、以下のいずれでもかまいません。
 - DAS ごとに異なるユーザー ID を使用します。または
 - 同じユーザー ID を使用し、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有しません。

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) 上への DB2 製品のインストールまたはインスタンス・ディレクトリーの共有

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 製品のインストールはサポートされていません。NFS 上に DB2 をインストールする (例えば NFS に /usr/opt/db2_08_01 または /opt/IBM/db2/V8.1 をマウントする) とエラーが起こりやすく、そのエラーは診断が困難です。

DB2 インストール・イメージだけが NFS マウント可能です (DB2 を実行しているシステム以外のシステム、あるいはリモート・ファイル・システムまたはパーティション上に置くことができます)。DB2 は、NFS マウント・ドライブではなく、ローカル・ドライブにインストールしなければなりません。

例えば、DB2 製品 CD をシステム A (例えば、NFS サーバー) にコピーし、NFS を使ってシステム A から DB2 インストール・コードを起動してシステム B、C、および D にインストールすることができます。ただし、DB2 製品をシステム A にインストールし、DB2 をシステム B、C、および D 上で使用するということはできません。また、システム B 上で DB2 インストール・プロセスを起動して、システム A にコードをインストールし、それをシステム B 上で使用するということもできません。DB2 コードは DB2 を実行するシステム上になければなりません。

関連タスク:

- 82 ページの『zSeries 上での DB2 UDB for Linux のインストール準備』
- 95 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Linux)』

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

zSeries 上での DB2 UDB for Linux のインストール準備

Linux を実行している S/390 コンピューターに DB2 UDB または DB2 Connect をインストールするには、S/390 コンピューターにアクセス可能なインストール・イメージを作成しなければなりません。FTP を使用して、Linux を実行している S/390 コンピューターにインストール・イメージを送ることもできますし、NFS マウントを使用して、Linux を実行している S/390 コンピューターに対して製品 CD-ROM を使用可能にすることもできます。

FTP 使用してインストール・イメージにアクセスする:

Linux を実行している S/390 コンピューターから、以下のことを実行します。

1. 以下のコマンドを入力します。ftp *yourserver.com* (*yourserver.com* は、インストール・イメージがある FTP サーバーを表します。)
2. 自分のユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
bin
get product.tar
```

product は、適切な製品パッケージ名を表します。つまり、DB2 Enterprise Server Edition の場合は *db2ese*、DB2 Connect Enterprise Edition の場合は *db2cee*、DB2 Run-Time Client の場合は *db2rtc* です。

4. 以下のコマンドを入力して、インストール・イメージを *untar* します。

```
tar -xvf product.tar
```

NFS 上で DB2 製品 CD-ROM を使用してインストール・イメージにアクセスする
:

DB2 または DB2 Connect 製品 CD-ROM を UNIX オペレーティング・システム上で使用するには、以下のようにします。

1. 適切な CD-ROM をマウントします。
2. CD-ROM をマウントしたディレクトリーをエクスポートします。例えば、CD-ROM を */cdrom* 下にマウントした場合には、*/cdrom* ディレクトリーをエクスポートします。
3. Linux を実行している S/390 コンピューター上で、以下のコマンドを使用してこのディレクトリーを NFS マウントします。

```
mount -t nfs -o ro nfsservername:/cdrom /local_directory_name
```

nfsservername は NFS サーバー名、*cdrom* は NFS サーバー上のディレクトリー名、*local_directory_name* はローカル・ディレクトリー名を表します。

4. Linux を実行している S/390 コンピューターから、CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。このことは、**cd /local_directory_name** コマンドを入力することによって行えます。*local_directory_name* は、製品 CD-ROM のマウント・ポイントです。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)』

DB2 サーバーのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)

このトピックでは、Solaris オペレーティング環境上の DB2 Enterprise Server Edition または Workgroup Server Edition のハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

ハードウェア要件

Solaris UltraSPARC ベースのコンピューター

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

DB2 Workgroup Server Edition (単一パーティション・データベース環境のみ) は、以下のバージョンの Solaris オペレーティング環境でサポートされます。

- Solaris 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
- Solaris 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 9 (32 ビット)

DB2 Enterprise Server Edition (単一パーティションおよびパーティション・データベース環境の両方) は、以下のバージョンの Solaris オペレーティング環境でサポートされます。

- Solaris 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
- Solaris 7 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
- Solaris 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 8 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 9 (32 ビット)
- Solaris 9 (64 ビット)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側のパネルで「Patches」メニュー項目をクリックします。

さらに J2SE Solaris オペレーティング環境 Patch Cluster および SUNWlibC ソフトウェアも必要で、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。

64 ビット Fujitsu PRIMEPOWER システムで DB2 を使用するには、以下が必要になります。

- パッチ 912040-01 のフィックスを入手するには、Solaris 8 Kernel Update Patch 108528-16 以降。
- パッチ 912041-01 のフィックスを入手するには、Solaris 9 Kernel Update Patch 112233-01 以降。

Solaris オペレーティング環境用の Fujitsu PRIMEPOWER パッチは、<http://download.ftsi.fujitsu.com/> の FTSI からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。

- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

通信要件

APPC または TCP/IP。DB2 UDB バージョン 8 サーバーは DB2 Connect サーバー・サポート機能を使用して、アウトバウンドの APPC クライアント要求のみサポートします。インバウンドの APPC クライアント要求のサポートはありません。データベースをリモート側で管理するときに使用できるのは、TCP/IP のみです。

- TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- DB2 Connect サーバー・サポート機能を介した APPC (CPI-C) 接続の場合は、SNAP-IX for Solaris V7.02 が必要です。

DB2 Administration Server (DAS) の要件

以下の要件を満たす必要があります。

- コントロール・センターおよびタスク・センター用の各物理コンピューターに、DAS が正しく動作するように作成されなければなりません。
- 各 DAS は (インスタンスと同じ) ユーザー ID のもとで作成されなければなりません。
- すべての物理コンピューターで同じユーザー ID を使用する場合は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーは他のコンピューターと共有 (クロス・マウント) できません。
- DAS ごとに異なるユーザー ID を使用する場合は、使用されるユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有 (クロス・マウント) できます。
- DAS が各コンピューター上に作成されていれば、以下のいずれでもかまいません。
 - DAS ごとに異なるユーザー ID を使用します。または
 - 同じユーザー ID を使用し、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーを共有しません。

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 UDB のインストール

NFS (ネットワーク・ファイル・システム) への DB2 製品のインストールはサポートされていません。NFS 上に DB2 をインストールする (例えば NFS に /usr/opt/db2_08_01 または /opt/IBM/db2/V8.1 をマウントする) とエラーが起こりやすく、そのエラーは診断が困難です。

DB2 インストール・イメージだけが NFS マウント可能です (DB2 を実行しているシステム以外のシステム、あるいはリモート・ファイル・システムまたはパーティション上に置くことができます)。DB2 は、NFS マウント・ドライブではなく、ローカル・ドライブにインストールしなければなりません。

例えば、DB2 製品 CD をシステム A (例えば、NFS サーバー) にコピーし、NFS を使ってシステム A から DB2 インストール・コードを起動してシステム B、C、および D に DB2 をインストールすることができます。ただし、DB2 製品をシステム A にインストールし、DB2 をシステム B、C、および D 上で使用するということはできません。また、システム B 上で DB2 インストール・プロセスを起動して、システム A にコードをインストールし、それをシステム B 上で使用するということもできません。DB2 コードは DB2 を実行するシステム上になければなりません。

関連タスク:

- 96 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)』

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

高速コミュニケーション・マネージャー (UNIX)

高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) は、DB2[®] UDB Enterprise Server Edition の通信サポートを提供します。データベース・パーティション・サーバーには、それぞれ 1 つの FCM デーモンがあります。それによって、データベース・パーティション・サーバー間の通信の提供、エージェント要求の処理、およびメッセージ・バッファの送達を行います。インスタンスを開始すると、FCM デーモンが開始されます。

データベース・パーティション・サーバーの相互通信で障害が発生した場合や、または通信が再確立された場合、FCM デーモンは情報 (データベース・システム・モニターで照会できる情報) を更新し、適切な処置 (影響を受けたトランザクションのロールバックなど) をとらせます。データベース・システム・モニターを使用すると、FCM 構成パラメーターを設定するのに役立ちます。

FCM メッセージ・バッファの数は、*fcm_num_buffers* データベース・マネージャー構成パラメーターで指定することができます。

関連タスク:

- 158 ページの『データベース・パーティション・サーバーの相互通信の使用可能化 (UNIX)』

第 9 章 インストール前のタスク

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)

Windows 2000 または Windows Server 2003 で Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマを拡張して、DB2 オブジェクト・クラスおよび属性定義を組み込まなければなりません。このタスクは、DB2 製品をインストール前に行う必要があります。

前提条件:

Windows ユーザー・アカウントは、スキーマ管理権限をもっていなければなりません。

手順:

ディレクトリー・スキーマを拡張するには、以下の手順に従います。

1. ドメイン・コントローラーとしてログオンします。
2. スキーマ管理権限で、インストール CD から **db2schex.exe** プログラムを実行します。このプログラムは、以下のようにスキーマ管理権限を使用して、ログオフおよび再度ログオンをすることなく実行できます。

```
runas /user:MyDomain¥Administrator x:¥db2¥Windows¥utilities¥db2schex.exe
```

ここで、x: は CD-ROM の文字です。

db2schex.exe が完了したら、DB2 製品のインストールに進むことができます。

関連資料:

- 63 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』

IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)

DB2[®] が DB2 コントロール・センターを使用したり、ストアード・プロシージャやユーザー定義関数などの Java アプリケーションを作成および実行したりするには、IBM[®] Developer Kit for Java[™] (SDK) 1.3.1、SDK 1.4.1、または SDK 1.4.2 が必要です (ご使用のオペレーティング・システムによって異なる)。IBM Software Developer's Kit (SDK) は、HP-UX JDK および Solaris オペレーティング環境 JDK とともにサポートされます。

ハイブリッド・プラットフォームは、同じインストールで 32 ビットおよび 64 ビットのインスタンス・サポートを取得するプラットフォームです。ハイブリッド・プラットフォーム上では、SDK の 32 ビット・バージョンが DB2 製品インストール中にインストールされます。SDK の 64 ビット・バージョンはインストールされません。SDK の 64 ビット・バージョンは別の CD-ROM で出荷されます。ハイ

ブリッドでないプラットフォーム上では、DB2 製品インストール中に、31 ビット、32 ビット、または 64 ビットのうちの適切な SDK がインストールされます。

64 ビット SDK は、ハイブリッドでない 64 ビット・プラットフォーム上では、DB2 製品 CD-ROM の一部です。ハイブリッド 64 ビット・プラットフォームの場合、64 ビット SDK は別個の CD-ROM 上にあり、DB2 製品 CD-ROM の一部としては出荷されません。

SDK は、Java を必要とするコンポーネントがインストールされているときにインストールされます。ただし、SDK がすでにインストールされていることをインストーラーが検出した場合、再びインストールされることはありません。SDK は独自のディレクトリーにインストールされ、以前のレベルの SDK を上書きすることはありません。

64 ビット Java が必要な場合には、Java 64 ビットが必要であることを知らせるメッセージが表示されます。このメッセージが表示された場合には、Java 64 ビットをインストールしなければなりません。このことは、ハイブリッド・プラットフォームにのみ適用されます。

制約事項:

以下の DB2 インストール方式のいずれか 1 つを使用している場合にのみ、Java SDK のインストールが試行されます。

- GUI インストール・プログラム (db2setup)
- 応答ファイル・インストール (db2setup -r response_file)

SMIT や db2_install スクリプトを使用するそれ以外の方式では、Java SDK はインストールされません。

手順:

SDK を手動でインストールするには、以下のようにします。

1. ご使用のオペレーティング・システムに適切なコマンドを、
/cdrom/db2/<platform>/Java-1.4 ディレクトリーから実行します (<platform> は、ご使用のオペレーティング・システムを表します (例えば、aix または solaris)。)

オペレーティング・システム	コマンド	インストール・ディレクトリー
AIX® 32 ビット (SDK 1.3.1)	installp -acgqX -d . Java131.adt	/usr/java131
AIX 64 ビット (SDK 1.3.1)	installp -acgqX -d . Java131_64.adt	/usr/java13_64
AIX 32 ビット	installp -acgqX -Y -d . Java14.sdk	/usr/java141
AIX 64 ビット	installp -acgqX -Y -d . Java14_64.sdk	/usr/java14_64

オペレーティング・システム	コマンド	インストール・ディレクトリー
HP-UX 32 ビットおよび 64 ビット	<pre>swinstall -x allow_incompatible=true -x mount_all_filesystems=false -s <path_to_depot_dir>/sdk14_1420_1100.depot T1456AA</pre> <p>注: path_to_depot_dir は、 "/" で始まり、デポ・ファイル・セットを含むディレクトリーへの実際のパスでなければなりません。例えば、HP-UX 32 ビット CD 上の path_to_depot_dir は /cdrom/db2/hpux/Java-1.4/ になります。</p>	/opt/java1.4
HP Itanium 32 ビットおよび 64 ビット	<pre>swinstall -x allow_incompatible=true -x mount_all_filesystems=false -s <path_to_depot_dir>/sdk14_14201_1122.depot T1458AA</pre> <p>注: path_to_depot_dir は、 "/" で始まり、デポ・ファイル・セットを含むディレクトリーへの実際のパスでなければなりません。例えば、HP-UX 32 ビット CD 上の path_to_depot_dir は /cdrom/db2/hpux/Java-1.4/ になります。</p>	/opt/java1.4
Linux IA32	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.i386.rpm	/opt/IBMJava2-141
Linux IA64	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ia64.rpm	/opt/IBMJava2-141
Linux 390	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.s390.rpm	/opt/IBMJava2-s390-141
Linux 390 64 ビット	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.s390x.rpm	/opt/IBMJava2-s390-141
Linux PPC 32 ビット	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ppc.rpm	/opt/IBMJava2-ppc-141
Linux PPC 64 ビット	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ppc64.rpm	/opt/IBMJava2-ppc64-141
SUN 32 ビット	pkgadd -d . SUNWj3rt SUNWj3dev SUNWj3man SUNWj3dmo	/usr/j2se
SUN 64 ビット	pkgadd -d . SUNWj3rt SUNWj3dev SUNWj3man SUNWj3dmo SUNWj3rtx SUNWj3dmx SUNWj3dvx	/usr/j2se

2. IBM SDK がインストールされたことを確認するには、**<path>/jre/bin/java -version** コマンドを実行します (<path> は SDK がインストールされたパスを表します。) 上述されている各プラットフォームごとのインストール・ディレクトリーを参照してください。

以下のような出力を受け取ります。以下の例は AIX の場合です。

```
java version "1.4.1"
Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.4.1)
Classic VM (build 1.4.1, J2RE 1.4.1 IBM AIX build ca141-20030930
(JIT enabled: jitc))
```

IBM SDK は以下の IBM developerWorks® Web サイトでも入手可能です。

- <http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/index.html>

Linux 上での DB2 の RPM ベースのインストール:

DB2 Universal Database™ バージョン 8 を Linux 上にインストールする場合には、RPM ベースのインストールが、IBM Java RPM (IBM SDK 1.4.1 SR2) をインストールしようとしています。さらに新しいレベルの RPM、例えば IBM SDK 1.5.1 SR1 がすでに存在している場合、バックレベルの RPM はインストールされません。

ただしこの場合、インストールの JDK_PATH データベース構成パラメーターは、バックレベルのパスを指したままになります。このため、DB2 インストール・カタログを含め、Java に依存する機能はどれも作動しません。

問題を解決するには、インスタンスの所有者として以下のコマンドを実行します。

```
db2 update dbm cfg using JDK_PATH <existing SDK path> <back-level SDK path>
```

このように更新すれば、DB2 Universal Database が正しい IBM Developer Kit を指すようになります。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 UDB 用の Java SDK レベル

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、下記にリストされた適切なレベルの SDK が必要です。

インストールされるいくつかのコンポーネントが SDK を必要とするものの、SDK がまだインストールされていない場合には、DB2 セットアップ・ウィザードまたは製品をインストールする応答ファイルのいずれかを使用すれば、SDK がインストールされます。

SDK は DB2 Run-Time Client ではインストールされません。

最新の SDK 情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> にある DB2 UDB システム要件 Web ページを参照してください。

最新の Linux SDK 情報については、以下の IBM developer kit for Linux Web ページを参照してください。

<http://www-106.ibm.com/developerworks/java/jdk/linux/tested.html>

以下の表は、オペレーティング・システムに応じた DB2 用の SDK レベルをリストします。

オペレーティング・システム		SDK レベル
Windows	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
AIX 4.3.3	32 ビット	SDK 1.3.1

オペレーティング・システム		SDK レベル
AIX 5	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
Solaris オペレーティング環境 (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2
	64 ビット	SDK 1.4.2
HP-UX RISC (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2.01
	64 ビット	SDK 1.4.2.01
HP-UX Itanium (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2.01
	64 ビット	SDK 1.4.2.01
LinuxIA	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	詳しくは、DB2 UDB システム要件 Web ページを参照してください。
Linux390	31 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
LinuxAMD (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2 (32 ビット・バージョン)
LinuxPPC (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2

関連概念:

- 87 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

DB2 UDB インストールのためのグループおよびユーザー ID の作成 (UNIX)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。以下の説明で使用されるユーザーおよびグループの名前は、下記の表のとおりです。システムの命名規則と DB2 の命名規則に従った名前である限り、独自のユーザー名およびグループ名を指定できます。

作成するユーザー ID は、それ以降のセットアップ・タスクで必要になります。

表 3. 必要なユーザーおよびグループ

必要なユーザー	サンプル・ユーザー名	サンプル・グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
DB2 Administration Server のユーザー	dasusr1	dasadm1

- インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーは、DB2 インスタンスが作成される場所です。

- fenced ユーザーは、DB2 データベースで使用されるアドレス・スペースの外部にあるユーザー定義関数 (UDF) およびストアド・プロシージャを実行するために使用されます。
- DB2 Administration Server のユーザーのユーザー ID は、システムで DB2 Administration Server を実行するために使用されます。

前提条件:

ユーザーおよびグループを作成するためには、root 権限が必要です。

手順:

DB2 のためのグループおよびユーザー ID を作成するには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. オペレーティング・システムごとに該当するコマンドを入力します。

注: これらのコマンド行の例にはパスワードは含まれていません。これらのコマンド行は単なる例にすぎません。コマンド行から `passwd username` パラメーターを使用して、パスワードを設定できます。

AIX AIX でグループを作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
mkgroup id=999 db2iadml
mkgroup id=998 db2fadml
mkgroup id=997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
mkuser id=1004 pgrp=db2iadml groups=db2iadml
  home=/home/db2inst1 db2inst1
mkuser id=1003 pgrp=db2fadml groups=db2fadml
  home=/home/db2fenc1 db2fenc1
mkuser id=1002 pgrp=dasadm1 groups=dasadm1
  home=/home/dasusr1 dasusr1
```

HP-UX

HP-UX でグループを作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadml
groupadd -g 998 db2fadml
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
useradd -g db2iadml -d /home/db2inst1 -m db2inst1
useradd -g db2fadml -d /home/db2fenc1 -m db2fenc1
useradd -g dbasgrp -d /home/dasusr1 -m dasusr1
```

Linux Linux でグループを作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadml
groupadd -g 998 db2fadml
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
mkuser -u 1004 -g db2iadml -m -d /home/db2inst1 db2inst1
mkuser -u 1003 -g db2fadml -m -d /home/db2fenc1 db2fenc1
mkuser -u 1002 -g dasadm1 -m -d /home/dasusr1 dasusr1
```

Solaris オペレーティング環境

Solaris オペレーティング環境でグループを作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
useradd -g db2iadm1 -u 1004 -d /export/home/db2inst1 -m db2inst1
```

```
useradd -g db2fadm1 -u 1003 -d /export/home/db2fenc1 -m db2fenc1
```

```
useradd -g dasadm1 -u 1002 -d /export/home/dasusr1 -m dasusr1
```

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『一般的な命名規則』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品の手動インストール』

カーネル・パラメーター (UNIX)

カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)

DB2 for HP-UX 製品をインストールする前に、ご使用のシステムのカーネル構成パラメーターを更新する必要があるかもしれません。カーネル構成パラメーターを更新した後、コンピューターを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、カーネル・パラメーターを変更します。

1. **sam** コマンドを入力して、System Administration Manager (SAM) プログラムを開始します。
2. 「カーネル構成 (Kernel Configuration)」アイコンをダブルクリックします。
3. 「構成パラメーター (Configurable Parameters)」アイコンをダブルクリックします。
4. 変更するパラメーターをダブルクリックし、「公式/値 (Formula/Value)」フィールドに新規値を入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 変更するすべてのカーネル構成パラメーターについて、これらのステップを繰り返します。
7. カーネル構成パラメーターをすべて設定し終えたならば、「アクション (Action)」 --> (アクション・メニュー・バーから) 「新規カーネルの処理 (Process New Kernel)」を選択します。

カーネル構成パラメーターの値を変更した後、HP-UX オペレーティング・システムが自動的に再始動します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2osconf - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

推奨されるカーネル構成パラメーター (HP-UX)

DB2 UDB 64 ビットを実行している HP-UX システムの場合には、 **db2osconf** コマンドを実行して、ご使用のシステムに適切なカーネル構成パラメーター値を提案してください。

DB2 UDB 32 ビットを実行している HP-UX システムの場合には、適切なカーネル構成パラメーターの推奨値について、以下の表を調べてください。

表 4. カーネル構成パラメーターの推奨値 (HP-UX)

カーネル・パラメーター	物理メモリー : 64MB - 128MB	物理メモリー : 128MB - 256MB	物理メモリー : 256MB - 512MB	物理メモリー : 512MB+
maxuprc	256	384	512	1500
maxfiles	256	256	256	256
nproc	512	768	1024	2048
nflocks	2048	4096	8192	8192
ninode	512	1024	2048	2048
nfile	(4 * ninode)	(4 * ninode)	(4 * ninode)	(4 * ninode)
msgseg	8192	16384	32767 (1)	32767 (1)
msgmnb	65535	65535	65535	65535
msgmax	65535	65535	65535	65535
msgtql	256	512	1024	2048
msgmap	130	258	258	2050
msgmni	128	256	256	1024
msgssz	16	16	16	16
semnmi	128	256	512	2048
semmap	130	258	514	2050
semnms	256	512	1024	4096
semnmu	256	512	1024	1024
shmax	67 108 864	134 217 728 (2)	268 435 456 (2)	268 435 456 (2)
shmmni	300	300	300	1 000

注:

1. msgmax パラメーターは、65 535 に設定しなければなりません。
2. msgseg パラメーターは、32 767 以下に設定しなければなりません。

3. `shmmax` パラメーターは、134 217 728 と、物理メモリーの 90% (バイト数) のどちらか大きい方に設定しなければなりません。例えば、システムの物理メモリーが 196 MB の場合、`shmmax` を 184 968 806 ($196 * 1024 * 1024 * 0.9$) に設定します。

関連タスク:

- 93 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』

カーネル・パラメーターの変更 (Linux)

DB2 UDB をインストールする前に、ご使用の Linux カーネル・パラメーターを更新することができます。DB2 UDB は必要であれば、自動的に IPC 限界を引き上げます。ユーザーの特定の必要に応じては、これらの限界をさらに引き上げることができます。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、カーネル・パラメーターを更新します。

RedHat および SuSE

2.4.x シリーズのカーネルを使用しているシステムでは、メッセージ・キュー・パラメーターのデフォルト値 (`msgmni`) があります。これは、同時にわずかな数だけの DB2 への接続が許可される値です。DB2 を正常に実行するためには、セマフォ配列パラメーターも変更する必要があります。

ipcs -l コマンドを発行して、共用メモリー・セグメント、セマフォ配列、およびメッセージ・キューの限界をチェックします。

ipcs -l コマンドの出力は以下のようになります。

```
# ipcs -l

----- Shared Memory Limits -----
max number of segments = 4096           // SHMMNI
max seg size (kbytes) = 32768
max total shared memory (kbytes) = 8388608
min seg size (bytes) = 1

----- Semaphore Limits -----
max number of arrays = 1024             // SEMMNI
max semaphores per array = 250
max semaphores system wide = 256000
max ops per semop call = 32
semaphore max value = 32767

----- Messages: Limits -----
max queues system wide = 1024          // MSGMNI
max size of message (bytes) = 65536
default max size of queue (bytes) = 16384 // MSGMAX
```

デフォルトのシステム制御構成ファイル `/etc/sysctl.conf` に以下の項目を追加することによって、カーネル・パラメーターを変更してください。

```
kernel.msgmni = 1024
kernel.sem = 250 256000 32 1024
```

ここで、

```
max semaphores system wide =  
max number of arrays x max semaphores/array
```

sysctl を `-p` パラメーターを指定して実行し、デフォルトのファイル `/etc/sysctl.conf` から sysctl 設定にロードします。

```
sysctl -p
```

ネットワーク初期設定スクリプトでの始動中に、`sysctl.conf` ファイルから項目が読み取られます。

配布によっては、システム初期設定ファイルの 1 つ (例えば `rc.local`) に `sysctl -p` を追加して、リポートされるたびにカーネル・パラメーターが設定されるようにしなければならないことがあります。

カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)

DB2 UDB をインストールする前に、ご使用のシステム・カーネル構成パラメーターを更新することをお勧めします。

`db2osconf` コマンドを使用して、推奨されるカーネル・パラメーターを提案してください。

カーネル・パラメーターを変更した後、システムを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

カーネル・パラメーターを設定するには、`/etc/system` ファイルの末尾に、以下の行を追加します。

```
set parameter_name = value
```

例えば、`msgsys:msginfo_msgmax` パラメーターの値を設定するには、`/etc/system` ファイルの末尾に、以下の行を追加します。

```
set msgsys:msginfo_msgmax = 65535
```

`/etc/system` ファイルの更新後、システムを再始動します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『`db2osconf` - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

パーティション・データベース環境のインストール前の追加タスク (UNIX)

パーティション DB2 インストールのための環境設定の更新 (AIX)

このタスクでは、パーティション・データベース・システムに参加するそれぞれのコンピューター上で更新する必要のある、環境設定を記述しています。

手順:

以下のようにして、AIX 環境設定を更新します。

1. root 権限を持つユーザーとしてコンピューターにログオンします。
2. 以下のコマンドを発行して、AIX の maxuproc (各ユーザーごとの最大プロセス数) 装置属性を 4096 に設定します。

```
chdev -l sys0 -a maxuproc='4096'
```

3. パーティション・データベース・システムに参加するすべてのワークステーションで、TCP/IP ネットワーク・パラメーターを以下のような値に設定します。これらの値は、これらのパラメーターの最小値です。ネットワーク関連パラメーターがすでにもっと高い値に設定されている場合には、それを変更しないでください。

```
thewall      = 65536
sb_max       = 1310720
rfc1323      = 1
tcp_sendspace = 221184
tcp_recvspace = 221184
udp_sendspace = 65536
udp_recvspace = 65536
ipqmaxlen    = 250
somaxconn    = 1024
```

ネットワーク関連のパラメーターの現行設定値をすべてリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
no -a | more
```

パラメーターを設定するには、以下のようなコマンドを入力します。

```
no -o parameter_name=value
```

各要素の意味は以下のとおりです。

- *parameter_name* は、設定したいパラメーターを表します。
- *value* は、このパラメーターに設定したい値を表します。

例えば、tcp_sendspace パラメーターを 221184 に設定するには、以下のようなコマンドを入力します。

```
no -o tcp_sendspace=221184
```

4. 高速相互接続を使う場合は、css0 の spoolsize と rpoolsize を以下のような値に設定する必要があります。

```
spoolsize    16777216
rpoolsize    16777216
```

これらのパラメーターの現行設定値をリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
lsattr -l css0 -E
```

これらのパラメーターを設定するには、以下のコマンドを入力します。

```
/usr/lpp/ssp/css/chgcss -l css0 -a spoolsize=16777216
/usr/lpp/ssp/css/chgcss -l css0 -a rpoolsize=16777216
```

システムを調整するために /tftpboot/tuning.cst ファイルを使用しない場合、インストール後に /opt/lpp/db2_08_01/misc/rc.local.sample サンプル・スク

リプト・ファイルを使って、ネットワーク関連パラメーターを更新することができます。インストール後にサンプル・スクリプト・ファイルを使ってネットワーク関連パラメーターを更新するには、以下のステップで行います。

- a. 以下のようなコマンドを入力して、このスクリプト・ファイルを `/etc` ディレクトリーにコピーし、`root` によってそれを実行可能にします。

```
cp /opt/lpp/db2_08_01/misc/rc.local.sample /etc/rc.local
chown root:sys /etc/rc.local
chmod 744 /etc/rc.local
```

- b. `/etc/rc.local` ファイルを調べて、必要であれば、更新します。
- c. マシンがリブートされるときに必ず `/etc/rc.local` スクリプトが実行されるように、`/etc/inittab` ファイルに項目を追加します。 **mkitab** コマンドを使用して、`/etc/inittab` ファイルに項目を追加することができます。この項目を追加するには、以下のようなコマンドを入力します。

```
mkitab "rclocal:2:wait:/etc/rc.local > /dev/console 2>&1"
```

- d. 以下のようなコマンドを入力して、`/etc/rc.nfs` 項目に必ず `/etc/inittab` ファイルが入るようにします。

```
lsitab rcnfs
```

- e. 以下のようなコマンドを入力して、マシンをリブートしないでネットワーク・パラメーターを更新します。

```
/etc/rc.local
```

5. B2 ESE のパーティション・インストールを実行するのに十分なページ・スペースがあることを確認してください。十分なページ・スペースがない場合、仮想メモリーを最も多く使用するプロセス (DB2 プロセスのうちの 1 つが可能性が高い) が、オペレーティング・システムによって強制終了されます。使用可能なページ・スペースをチェックするには、以下のようなコマンドを入力します。

```
lsps -a
```

このコマンドは、以下のような出力を戻します。

Page Space	Physical Volume	Volume Group	Size	%Used	Active	Auto	Type
paging00	hdisk1	rootvg	60MB	19	yes	yes	lv
hd6	hdisk0	rootvg	60MB	21	yes	yes	lv
hd6	hdisk2	rootvg	64MB	21	yes	yes	lv

使用可能なページ・スペースを、コンピューターにインストールされている物理メモリーの 2 倍の容量にすることをお勧めします。

6. 小さいサイズあるいは中間サイズまでのパーティション・データベース・システムを作成するときは、インスタンス所有者のコンピューター上のネットワーク・ファイル・システム・デーモン (NFSD) の数を、ほぼ以下の値にする必要があります。

```
# of biod on a computer X # of computers in the instance
```

コンピューターごとに 10 個の `biod` プロセスを実行するようお勧めします。4 つのコンピューター・システムに 10 個の `biod` プロセスがある場合、この公式に従えば 40 個の NFSD を使用することになります。

大型システムをインストールする場合は、コンピューターには最高 120 までの NFSD をもつことができます。

NFS の追加情報については、NFS の資料を参照してください。

ESE ワークステーションにコマンドを配布する一括作業のセットアップ (AIX)

AIX のパーティション・データベース環境では、パーティション・データベース・システムに参加する RS/6000 SP ワークステーションのセットにコマンドを配布するための、一括作業をセットアップすることができます。dsh コマンドによって、ワークステーションにコマンドを配布することができます。

これは、AIX でパーティション・データベース・システムをインストールまたは管理する場合に役立つことがあります。その環境にあるすべてのコンピューター上で同じコマンドを、少ないエラーですばやく実行することができるからです。

前提条件:

一括作業に組み込むそれぞれのコンピューターのホスト名を知っている必要があります。

root 権限を持つユーザーとして制御ワークステーションにログオンする必要があります。

手順:

パーティション・データベース・システムに参加する、すべての RS/6000 SP ワークステーションのホスト名をリストしたファイルを用意します。以下のようにして、ワークステーションのこのリストにコマンドを配布する一括作業をセットアップします。

1. 一括作業に組み込むすべてのワークステーションの ホスト名 をリストする、`eeelist.txt` というファイルを作成します。

例えば、`workstation1` および `workstation2` という 2 つの SP ノードを指定して、一括作業を作成しようとしているとします。そのファイルの内容は以下のようになります。

```
workstation1
workstation2
```

2. 一括作業環境変数を更新します。以下のコマンドを入力して、このリストを更新します。

```
export WCOLL=path/eeelist.txt
```

ここで、`path` は `eeelist.txt` が作成されたロケーションになります。`eeelist.txt` は、一括作業に組み込まれた RS/6000 SP ワークステーションをリストするために作成したファイルの名前です。

3. 以下のようなコマンドを入力して、一括作業ファイル内の名前が本当に、組み込みたいワークステーションであることを確認します。

```
dsh -q
```

以下のような出力が表示されます。

```
Working collective file /eeelist.txt:
workstation1
workstation2
Fanout: 64
```

関連タスク:

- 100 ページの『NFS 稼働の検査 (UNIX)』

ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー

このタスクでは、DB2 ESE 製品の CD-ROM の内容を、共用 DB2 ホーム・ファイル・システムにコピーするためのステップを記述します。DB2 CD-ROM の内容のコピーは、DB2 のパーティション・インストールにユニークなステップです。DB2 を同時に複数のコンピューターにインストールしようとしているため、ハード・ディスクからのインストールは、CD-ROM からのインストールよりもかなり速く実行されます。この方式は、コンピューターが 5 台以上組み込まれているシステムの場合に推奨されます。

代替方法として、それぞれのコンピューターから CD-ROM ファイル・システムを NFS マウントする方法があります。DB2 ホーム・ファイル・システム上に十分なディスク・スペースがない場合、または 3 台以下のコンピューターにインストールする場合には、それぞれのコンピューターから CD-ROM をマウントすることができます。

手順:

以下のようにして、DB2 インストール CD をマウントし、内容をコピーします。

1. ご使用の /db2home ファイル・システムに、DB2 製品 CD-ROM のためのディレクトリーを作成します。

```
mkdir /db2home/db2cdrom
```

2. 作成したディレクトリーに CD-ROM の内容をコピーします。

```
cp -R /cdrom /db2home/db2cdrom
```

NFS 稼働の検査 (UNIX)

それぞれのコンピューター上で、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) が稼働している必要があります。

手順:

パーティション・データベース・システムに参加する各コンピューター上で、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) が稼働していることを確認するには、以下のようにします。

- AIX** それぞれのコンピューター上で以下のコマンドを入力します。

```
lssrc -g nfs
```

NFS プロセスの「状況 (Status)」フィールドが、「アクティブ (active)」と表示されていなければなりません。

それぞれのシステムで NFS が稼働していることを確認したならば、DB2 が必要とする特定の NFS プロセスを検査します。必要なプロセスとは、以下のものです。

```
rpc.lockd  
rpc.statd
```

HP-UX および Solaris オペレーティング環境

以下のコマンドを入力します。

```
showmount -e hostname
```

showmount コマンドを *hostname* パラメーターを指定せずに入力すると、ローカル・システムを検査することになります。

NFS がアクティブでない場合には、以下のようなメッセージを受け取ります。

```
showmount: ServerA: RPC: Program not registered
```

それぞれのシステムで NFS が稼働していることを確認したならば、DB2 が必要とする特定の NFS プロセスを検査します。必要なプロセスとは、以下のものです。

```
rpc.lockd  
rpc.statd
```

以下のコマンドを使用して、これらのプロセスを検査することができます。

```
ps -ef | grep rpc.lockd  
ps -ef | grep rpc.statd
```

LINUX 以下のコマンドを入力します。

```
showmount -e hostname
```

showmount コマンドを *hostname* パラメーターを指定せずに入力すると、ローカル・システムを検査することになります。

NFS がアクティブでない場合には、以下のようなメッセージを受け取ります。

```
showmount: ServerA: RPC: Program not registered
```

それぞれのシステムで NFS が稼働していることを確認したならば、DB2 が必要とする特定の NFS プロセスを検査します。必要なプロセスは **rpc.statd** です。このプロセスを検査するには、**ps -ef | grep rpc.statd** コマンドを使用します。

これらのプロセスが実行されていない場合は、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

パーティション・データベース環境用のファイル・システムの作成

パーティション・データベース・システム用の DB2 ホーム・ファイル・システムの作成 (AIX)

このタスクでは、DB2 ホーム・ファイル・システムの作成方法、ホーム・ファイル・システムの NFS エクスポートの方法、およびそれぞれの参加コンピュータからホーム・ファイル・システムを NFS マウントする方法について説明します。

サイズが 1 GB 以上のホーム・ファイル・システムを作成することをお勧めします。後述のインストールの指示では、DB2 製品 CD-ROM の内容を、ご使用の DB2 ホーム・ファイル・システム上のディレクトリーにコピーすることを求められます。DB2 製品 CD-ROM は、約 700 MB のスペースを一時的に占有します。DB2 インスタンスは、最低 50 MB のスペースを必要とします。1 GB のフリー・スペースがない場合には、内容をディスクにコピーする代わりに、それぞれの参加コンピュータから DB2 製品 CD-ROM をマウントすることができます。

前提条件:

以下の条件が必要です。

- ファイル・システムを作成するために root 権限が必要です。
- ファイル・システムが物理的に常駐するボリューム・グループを作成済みであることが必要です。

手順:

DB2 ホーム・ファイル・システムを作成、NFS エクスポート、および NFS マウントするには、以下のようなステップを行います。

DB2 ホーム・ファイル・システムの作成

ご使用のパーティション・データベース・システムの基本コンピュータ (ServerA) に、root 権限を持つユーザーとしてログオンし、ご使用のパーティション・データベース・システムのために /db2home というホーム・ファイル・システムを作成します。

1. **smit jfs** コマンドを入力します。
2. 「ジャーナル・ファイル・システムの追加 (Add a Journaled File System)」アイコンをクリックします。
3. 「標準ジャーナル・ファイル・システムの追加 (Add a Standard Journaled File System)」アイコンをクリックします。
4. そのファイル・システムを物理的に常駐させる既存のボリューム・グループを、「ボリューム・グループ名 (Volume Group Name)」リストから選択します。
5. 「ファイル・システムのサイズ (512 バイト・ブロック単位) (数) (SIZE of file system (in 512-byte blocks) (Num.))」フィールドを 180,000 (約 90 MB) に設定します。
6. このファイル・システムのマウント・ポイントを「マウント・ポイント (MOUNT POINT)」フィールドに入力します。この例では、マウント・ポイントは /db2home です。

7. 「システムの再始動時に自動マウント (Mount AUTOMATICALLY at system restart)」フィールドを「はい (Yes)」に設定します。

残りのフィールドは、デフォルト設定のままにしてもかまいません。

8. 「OK」をクリックします。

DB2 ホーム・ファイル・システムのエクスポート

1. /db2home ファイル・システムを NFS エクスポートし、パーティション・データベース・システムの一員となるすべてのコンピューターで、このファイルを使えるようにします。
 - a. **smit nfs** コマンドを入力します。
 - b. 「ネットワーク・ファイル・システム (NFS) (Network File System (NFS))」アイコンをクリックします。
 - c. 「エクスポート・リストへのディレクトリーの追加 (Add a Directory to Exports List)」アイコンをクリックします。
 - d. パス名とエクスポートするディレクトリー (例えば /db2home) を、「エクスポートするディレクトリーのパス名 (PATHNAME of directory to export)」フィールドに入力します。
 - e. パーティション・データベース・システムの一員となる各ワークステーションの名前を、「root アクセスできるホスト (HOSTS allowed root access)」フィールドに入力します。各名前間の区切り文字としてコンマ (,) を使用します。例えば ServerA, ServerB, ServerC のようにします。高速相互接続を使用する場合、各ワークステーション用の高速相互接続名もこのフィールドに指定することをお勧めします。残りのフィールドは、デフォルト設定のままにしてもかまいません。
 - f. 「OK」をクリックします。
2. ログアウトします。

それぞれの参加コンピューターからの DB2 ホーム・ファイル・システムのマウント

以下のようなステップを行って、各 参加コンピューター (ServerB、ServerC、ServerD) にログオンし、エクスポートしたファイル・システムを NFS マウントします。

1. **smit nfs** コマンドを入力します。
2. 「ネットワーク・ファイル・システム (NFS) (Network File System (NFS))」アイコンをクリックします。
3. 「マウント用のファイル・システムの追加 (Add a File System for Mounting)」アイコンをクリックします。
4. マウント・ポイントのパス名を「マウント・ポイントのパス名 (パス) (PATHNAME of the mount point (Path))」フィールドに入力します。

マウント・ポイントのパス名は、DB2 ホーム・ディレクトリーを作成する場所になります。この例では、/db2home を使用します。

5. リモート・ディレクトリーのパス名を「リモート・ディレクトリーのパス名 (PATHNAME of the remote directory)」フィールドに入力します。

例えば、「マウント・ポイントのパス名 (パス) (PATHNAME of the mount point (Path))」フィールドに入力したのと同じ値を入力してください。

6. ファイルをエクスポートしたマシンのホスト名を、「リモート・ディレクトリーが置かれるホスト (HOST where the remote directory resides)」フィールドに入力します。

これは、マウントしようとしているファイル・システムが作成されたマシンのホスト名です。

パフォーマンスを向上するには、作成したファイル・システムを高速相互接続を介してマウントするとよいかもしれません。高速相互接続を介してそのファイル・システムをマウントしたい場合、その名前を「リモート・ディレクトリーが置かれるホスト (HOST where the remote directory resides)」フィールドに入力します。

なんらかの理由で高速相互接続が使えなくなった場合、パーティション・データベース・システムに参加しているすべてのワークステーションが、その DB2 ホーム・ディレクトリーにアクセスできなくなることに注意してください。

7. 「ただちにマウント、項目を /etc/filesystems に追加、またはこの両方 (MOUNT now, add entry to /etc/filesystems or both?)」フィールドを「両方 (both)」に設定します。
8. 「/etc/filesystems 項目はシステムの再始動時にディレクトリーをマウント (/etc/filesystems entry will mount the directory on system RESTART)」フィールドを「はい (yes)」に設定します。
9. 「この NFS ファイル・システムのモード (MODE for this NFS file system)」フィールドを「読み取り/書き込み (read-write)」に設定します。
10. 「ファイル・システムのソフト・マウントまたはハード・マウント (Mount file system soft or hard)」フィールドを「ソフト (soft)」に設定します。

ソフト・マウントとは、コンピューターが、際限なくディレクトリーのリモート・マウントを試みないことを意味します。ハード・マウントとは、マシンが、際限なくディレクトリーのマウントを試みることを意味します。そのため、システム破損という問題を生じることがあります。このフィールドを「ソフト (soft)」に設定することをお勧めします。

残りのフィールドは、デフォルト設定のままにしてもかまいません。

11. このファイル・システムをマウントするときは、必ず「このファイル・システムで SUID および sgid プログラムを実行してもよい (Allow

execution of SUID and sgid programs in this file system?)」フィールドを「はい (Yes)」に設定してください。これがデフォルトの設定です。

12. 「OK」をクリックします。
13. ログアウトします。

関連タスク:

- 100 ページの『ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー』

パーティション・データベース・システム用の DB2 ホーム・ファイル・システムの作成 (HP-UX)

このタスクでは、DB2 ホーム・ファイル・システムの作成方法、ホーム・ファイル・システムの NFS エクスポートの方法、およびそれぞれの参加コンピューターからホーム・ファイル・システムを NFS マウントする方法について説明します。

サイズが 1 GB 以上のホーム・ファイル・システムを作成することをお勧めします。後述のインストールの指示では、DB2 製品 CD-ROM の内容を、ご使用の DB2 ホーム・ファイル・システム上のディレクトリーにコピーすることを求められます。DB2 製品 CD-ROM は、約 700 MB のスペースを一時的に占有します。DB2 インスタンスは、最低 50 MB のスペースを必要とします。1 GB のフリー・スペースがない場合には、内容をディスクにコピーする代わりに、それぞれの参加コンピューターから DB2 製品 CD-ROM をマウントすることができます。

前提条件:

ファイル・システムを作成するために、root 権限が必要です。

手順:

DB2 ホーム・ファイル・システムを作成、NFS エクスポート、および NFS マウントするには、以下のようなステップを行います。

DB2 ホーム・ファイル・システムの作成

手動で行う場合:

1. ディスク・パーティションまたは論理ボリュームを選択してから、newfs などのユーティリティーを使って、そのファイル・システムを作成します。詳細は、**man newfs** コマンドを入力します。
2. このファイル・システムをローカル・マウントしてから、システム再起動のたびにこのファイル・システムがマウントされるよう、`/etc/fstab` ファイルに項目を追加します。

SAM を使用する場合:

1. **sam** コマンドを入力します。
2. 「ディスクとファイル・システム (Disks and File Systems)」アイコンをクリックします。
3. 「ファイル・システム (File Systems)」アイコンをクリックします。

4. 「アクション (Action)」 → 「ローカル・ファイル・システムの追加 (Add Local File systems)」を選択します。
5. 論理ボリューム・マネージャーを使用するか使用しないかを選択します。論理ボリューム・マネージャーの使用をお勧めします。

DB2 ホーム・ファイル・システムのエクスポート

HP-UX システムのクラスターに DB2 ESE をインストールする場合、NFS を介して、または SAM を使用して、このファイル・システムをエクスポートするため、`/etc/exports` ファイルに項目を追加することができます。

以下のようにして、SAM を使用してファイル・システムをエクスポートします。

1. **sam** コマンドを入力します。
2. 「ネットワークングおよび通信 (Networking and Communications)」アイコンをクリックします。
3. 「ネットワーク・ファイル・システム (Networked File Systems)」アイコンをクリックします。
4. 「エクスポートされたローカル・ファイル・システム (Exported Local File Systems)」アイコンをクリックします。
5. 「アクション (Action)」メニューをクリックして、「エクスポート・ファイル・システムの追加 (Add Exported File System)」を選択します。
6. エクスポートするパス名とディレクトリー (例えば `/db2home`) を、「ローカル・ディレクトリー名 (Local Directory Name)」フィールドに入力します。
7. 「ユーザー・アクセス (User Access)」ボタンをクリックして、表示されているウィンドウ内のインスタンスにある他のコンピューターに読み取り/書き込みアクセスを追加します。
8. 「ルート・ユーザー・アクセス (Root User Access)」ボタンをクリックして、表示されているウィンドウ内のインスタンスにある他のコンピューターに読み取り/書き込みアクセスを追加します。
9. 「OK」をクリックします。
10. ログアウトします。

それぞれの参加コンピューターからの DB2 ホーム・ファイル・システムのマウント

このファイル・システムをエクスポートし終わったら、それぞれの参加コンピューター上に、このファイル・システムをマウントする必要があります。

それぞれの参加コンピューター上で、以下のように行います。

1. **sam** コマンドを入力します。
2. 「ネットワークングおよび通信 (Networking and Communications)」アイコンをクリックします。
3. 「ネットワーク・ファイル・システム (Networked File Systems)」アイコンをクリックします。
4. 「マウントされたりリモート・ファイル・システム (Mounted Remote File Systems)」アイコンをクリックします。

5. 「**アクション (Action)**」メニューをクリックして「**NFS を使用するリモート・ファイル・システムの追加 (Add Remote File System Using NFS)**」を選択します。
6. 「**ローカル・ディレクトリー名 (Local Directory Name)**」フィールドに、マウントするファイル・システムのマウント・ポイントを入力します (例えば、 /db2home)。
7. 「**リモート・サーバー名 (Remote Server Name)**」フィールドに、リモート・サーバーの名前を入力します (例えば ServerA)。
8. リモート・ディレクトリーのパス名とディレクトリー (例えば /db2home) を、「**リモート・ディレクトリー名 (Remote Directory Name)**」フィールドに入力します。
9. 「**システム・ブート時にマウント (Mount At System Boot)**」オプションをオンに設定します。
10. 「**NFS マウント・オプション (NFS Mount Options)**」ボタンをクリックして、「**ソフト (soft)**」マウント・タイプを設定し、「**SetUID 実行の許可 (Allow SetUID Execution)**」オプションをオンに設定します。

ソフト・マウントとは、コンピューターが、際限なくディレクトリーのリモート・マウントを試みない ことを意味します。ハード・マウントとは、マシンが、際限なくディレクトリーのマウントを試みることを意味します。そのため、システム破損という問題を生じることがあります。このフィールドを「ソフト (soft)」に設定することをお勧めします。

残りのフィールドは、デフォルト設定のままにしてもかまいません。

11. 「**OK**」をクリックします。
12. ログアウトします。

関連タスク:

- 100 ページの『ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー』

パーティション DB2 サーバー用のファイル・システムの作成 (Linux)

このタスクは、DB2 ESE の Linux 上でのインストールのより大きなタスクの一部です。

パーティション・データベース・システムに参加するすべてのマシンで使用可能なファイル・システムが必要です。このファイル・システムは、インスタンスのホーム・ディレクトリーとして使用されます。

1 つのデータベース・インスタンスに複数のマシンを使う構成の場合、NFS (Network File System) を使用して、このファイル・システムを共有します。一般には、クラスター内の 1 つのマシンを使用し、NFS を使用してファイル・システムをエクスポートします。そしてクラスター内の残りのマシンは、このマシンから

NFS ファイル・システムをマウントします。ファイル・システムをエクスポートするマシンは、ローカルにマウントされたファイル・システムを所有しています。

コマンドの詳細は、Linux 配布の資料を参照してください。

手順:

このファイル・システムを作成するには、以下のステップを実行します。

- 1 つのマシンで、ディスク・パーティションを選択するか、**fdisk** を使用してそれを作成します。
- mkfs** のようなユーティリティーを使用し、このパーティション上にファイル・システムを作成します。ファイル・システムは、必要な DB2 プログラム・ファイルはもちろん、データベースに必要なスペースも十分含められるだけの大きさでなければなりません。
- 作成したばかりのこのファイル・システムをローカル・マウントしてから、システムのリブートのたびにこのファイル・システムがマウントされるよう、`/etc/fstab` ファイルに項目を追加します。例えば、以下のようにします。

```
/dev/hda1 /db2home ext2 defaults 1 2
```

- ブート時に、自動的に NFS ファイル・システムを Linux へエクスポートするには、`/etc/exports` ファイルへ項目を追加します。クラスター内に含まれるすべてのホスト名だけでなく、マシンのそれぞれの名前すべてを含めるようにします。さらに、クラスター内の各マシンに、“root” オプションを使用してエクスポートしたファイル・システムに対する、root 権限があることを確認します。

`/etc/exportfs` は、以下のタイプの情報を含んだ ASCII ファイルです。

```
/db2home machine1_name(rw) machine2_name(rw)
```

以下を実行して、NFS ディレクトリーをエクスポートします。

```
/usr/sbin/exportfs -r
```

- クラスター内に残っている各マシンで、`/etc/fstab` ファイルへ項目を追加し、ブート時にファイル・システムを自動的に NFS マウントさせるようにします。以下の例で示すように、マウント・ポイント・オプションを指定するときには、ブート時にファイル・システムがマウントされること、読み取り/書き込み可能なこと、ハード・マウントされること、bg (バックグラウンド) オプションが含まれること、そして `setuid` プログラムを適切に実行できることを確保します。

```
fusion-en:/db2home /db2home nfs - rw,time0=300,retrans=5,  
hard,intr,bg,suid,rw
```

`fusion-en` はマシン名を表します。

- 以下のコマンドを入力し、エクスポートしたファイル・システムを、クラスター内の残りのマシンのそれぞれに NFS マウントします。

```
mount /db2home
```

マウント・コマンドに失敗したら、**showmount** コマンドを使い、NFS サーバーの状況を調べます。例えば、以下のようにします。

```
showmount -e fusion-en
```

この **showmount** コマンドは、fusion-en というマシンからエクスポートされるファイル・システムをリストするものです。このコマンドが失敗する場合、NFS サーバーが始動していない可能性があります。NFS サーバーのルートで以下のコマンドを実行して、サーバーを手動で始動します。

```
/etc/rc.d/init.d/nfs restart
```

現在の実行レベルが 3 である場合には、ディレクトリー /etc/rc.d/rc3.d で K20nfs を S20nfs にリネームすることによって、このコマンドをブート時に自動的に実行させることができます。

7. 以下のステップが正常に実行されたことを確認します。
 - a. クラスタ内の 1 つのマシンで、インスタンスおよびホーム・ディレクトリーとして使用するファイル・システムを作成したこと。
 - b. 1 つのデータベース・インスタンスに複数のマシンを使う構成の場合、NFS を使用してこのファイル・システムをエクスポートしたこと。
 - c. クラスタ内の残りのマシンのそれぞれに、エクスポートしたファイル・システムをマウントしたこと。

関連タスク:

- 100 ページの『ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー』

パーティション DB2 サーバー用ファイル・システムの作成 (Solaris オペレーティング環境)

このタスクでは、DB2 ホーム・ファイル・システムの作成方法、ホーム・ファイル・システムの NFS エクスポートの方法、およびそれぞれの参加コンピューターからホーム・ファイル・システムを NFS マウントする方法について説明します。

サイズが 1 GB 以上のホーム・ファイル・システムを作成することをお勧めします。後述のインストールの指示では、DB2 製品 CD-ROM の内容を、ご使用の DB2 ホーム・ファイル・システム上のディレクトリーにコピーすることを求められます。DB2 製品 CD-ROM は、約 700 MB のスペースを一時的に占有します。DB2 インスタンスは、最低 50 MB のスペースを必要とします。1 GB のフリー・スペースがない場合には、内容をディスクにコピーする代わりに、それぞれの参加コンピューターから DB2 製品 CD-ROM をマウントすることができます。

Solaris オペレーティング環境システムでローカル・ファイル・システムを作成する場合、いろいろな方法があります。Veritas などの製品を使ってファイル・システムを作成する場合は、その製品の資料を参照してください。

前提条件:

ファイル・システムを作成するために、root 権限が必要です。

手順:

DB2 ホーム・ファイル・システムを作成、NFS エクスポート、および NFS マウントするには、以下のようなステップを行います。

DB2 ホーム・ファイル・システムの作成

1. 基本コンピューター (ServerA) で、ディスク・パーティションを選択するか、**format** コマンドを使用してそれを構成します。**format** コマンドを使うときには、使用するディスク・パーティションがオーバーラップしていないことを確認してください。パーティションがオーバーラップしていると、データが破壊されたりファイル・システムに障害が発生する可能性があります。コマンドを正確に入力したかを確認してください。間違いがあると、重大な問題が生じることがあります。
2. **newfs** や **mkfs** のようなユーティリティーを使用し、このパーティション上にファイル・システムを作成します。ファイル・システムは、必要な DB2 ファイルだけでなく、DB2 ファイル以外のファイルも含められるだけの十分な大きさでなければなりません。最小でも 300 MB は確保するようお勧めします。
3. 作成したばかりのこのファイル・システムをローカル・マウントしてから、システムのリブートのたびにこのファイル・システムがマウントされるよう、`/etc/vfstab` ファイルに項目を追加します。例えば、


```
/dev/dsk/c1t0d2s2 /dev/rdisk/c1t0d2s2 /db2home ufs 2 yes -
```

DB2 ホーム・ファイル・システムのエクスポート

1. ブート時に、自動的に NFS ファイル・システムを Solaris へエクスポートするには、`/etc/dfs/dfstab` ファイルへ項目を追加します。参加コンピューターのすべてのホスト名だけでなく、指定されたコンピューターのそれぞれの名前すべてを含めるようにします。さらに、各コンピューターに、“root” オプションを使用してエクスポートしたファイル・システムに対する、root 権限があることを確認します。

以下の例では、4 つのコンピューター・パーティション・データベース・システムの項目を、`/etc/dfs/dfstab` ファイルへ追加します。参加コンピューター ServerB、ServerC、および ServerD には、ファイル・システム `/db2home` をマウントする許可が与えられます。これは、DB2 ホーム・ファイル・システムとして使用されます。

```
share -F nfs -o ¥
rw=ServerB.torolab.ibm.com,¥
root=ServerB.torolab.ibm.com ¥

rw=ServerC.torolab.ibm.com, ¥
root=ServerC.torolab.ibm.com¥

rw=ServerD.torolab.ibm.com,¥
root=ServerD.torolab.ibm.com ¥
-d "homes" /db2home
```

コンピューターが複数のホスト名によって認知されている場合には、`/etc/dfs/dfstab` ファイルにすべての別名を組み込む必要があります。例えば、ServerB が ServerB-tokenring という名前でも認知されている場合には、`/etc/dfs/dfstab` 内の ServerB の項目が以下のようになります。

```
rw=ServerB.torolab.ibm.com:ServerB-tokenring.torolab.ibm.com,¥
root=ServerB.torolab.ibm.com:ServerB-tokenring.torolab.ibm.com ¥
```

2. 参加コンピューターのそれぞれで、`/etc/vfstab` ファイルへ項目を追加し、ブート時にファイル・システムを自動的に NFS マウントさせるようにします。以下の例で示すように、マウント・ポイント・オプション

を指定するときには、ブート時にファイル・システムがマウントされること、読み取り/書き込み可能なこと、ハード・マウントされること、bg (バックグラウンド) オプションが含まれること、そして `suid` プログラムを適切に実行できることを確保します。

```
ServerA:/db2home - /db2home nfs - yes rw,hard,intr,bg,suid
```

それぞれの参加コンピューターからの DB2 ホーム・ファイル・システムのマウント

1. 以下のコマンドを入力し、エクスポートしたファイル・システムを作成して、それをパーティション・データベース環境にある参加コンピューターそれぞれに NFS マウントします。

```
mkdir /db2home  
mount /db2home
```

マウント・コマンドに失敗したら、`showmount` コマンドを使い、NFS サーバーの状況を調べます。例えば、

```
showmount -e ServerA
```

この `showmount` コマンドは、`ServerA` というコンピューターからエクスポートされるファイル・システムをリストするものです。このコマンドが失敗する場合、NFS サーバーが始動していない可能性があります。サーバーを手動で始動するには、NFS サーバーのルートとして、以下のコマンドを実行します。

```
/usr/lib/nfs/mountd  
/usr/lib/nfs/nfsd -a 16
```

これらのコマンドは、`/etc/dfs/dfstab` ファイルに項目があれば、ブート時に自動的に実行されます。NFS サーバーの始動後、以下のコマンドを実行し、NFS ファイル・システムをエクスポートし直します。

```
sh /etc/dfs/dfstab
```

以下のステップを完了したことを確認します。

1. パーティション・データベース環境内の 1 つのコンピューターで、インスタンスおよびホーム・ディレクトリーとして使用するファイル・システムを作成したこと。
2. NFS を介してこのファイル・システムをエクスポートしたこと。
3. 参加コンピューターそれぞれに、エクスポートしたファイル・システムをマウントしたこと。

関連タスク:

- 100 ページの『ご使用のコンピューターへの DB2 製品 CD-ROM の内容のコピー』

必要なユーザーの作成

パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (AIX)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。この説明で使用されるユーザーおよびグループの名前は、以下の表で解説されています。

表 5. 必要なユーザーおよびグループ (AIX)

必要なユーザー	ユーザー名	グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
Administration Server ユーザー	db2as	dasadm1

Administration Server ユーザーが既存ユーザーである場合は、インストール前にこのユーザーがすべての参加コンピューター上になければなりません。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インスタンス所有のコンピューター上で Administration Server に新規ユーザーを作成する場合には、応答ファイルのインストール中にこのユーザーが、参加コンピューター上にも作成されます (必要であれば)。ユーザーがすでに参加コンピューター上に存在している場合には、そのユーザーは同じプライマリー・グループを持っている必要があります。

前提条件:

- ユーザーおよびグループを作成するためには、root 権限が必要です。
- NIS/NIS+ または同様のセキュリティ・ソフトウェアを使用してユーザーおよびグループを管理する場合には、ユーザーおよびグループを作成する前に、*NIS/NIS+ の注意点* を参照してください。DB2 ユーザーおよびグループを定義する場合には、追加のステップが必要です。

制約事項:

作成するユーザー名は、オペレーティング・システムの命名規則と DB2 の命名規則に沿ったものでなければなりません。

手順:

これらの 3 種類のユーザーをすべて作成するには、以下のようなステップを実行します。

1. 基本コンピューターにログオンします。
2. 以下のようなコマンドを入力して、インスタンス所有者のグループ (例えば、db2iadm1)、UDF またはストアド・プロシージャを実行するユーザー (例えば、db2fadm1)、および Administration Server (例えば、dasadm1) を作成します。

```
mkgroup id=999 db2iadm1
mkgroup id=998 db2fadm1
mkgroup id=997 dasadm1
```


3. 以下のようなコマンドを使用して、前のステップで作成した各グループに属するユーザーを作成します。それぞれのユーザーのホーム・ディレクトリーは、ユーザーが以前に作成し共用した DB2 ホーム・ディレクトリー (db2home) となります。

```
mkuser id=1004 pgrp=db2iadm1 groups=db2iadm1 home=/db2home/db2inst1
  core=-1 data=491519 stack=32767 rss=-1 fsize=-1 db2inst1
mkuser id=1003 pgrp=db2fadm1 groups=db2fadm1 home=/db2home/db2fenc1
  db2fenc1
mkuser id=1002 pgrp=dasadm1 groups=dasadm1 home=/home/dasusr1
  dasusr1
```

4. 以下のようなコマンドを入力して、作成した各ユーザーの初期パスワードを設定します。

```
passwd db2inst1
passwd db2fenc1
passwd dasusr1
```

5. ログアウトします。
6. 作成した各ユーザー (db2inst1、db2fenc1、および dasusr1) として、基本コンピュータにログオンします。それぞれのユーザーのパスワードを変更するようプロンプトで指示されることがあります。そのユーザーがシステムにログオンするのはこれが初めてだからです。
7. ログアウトします。
8. パーティション・データベース・システムに参加するそれぞれのコンピュータ上に、まったく同じユーザー・アカウントおよびグループ・アカウントを作成します。この例では、このタスクを ComputerB、ComputerC、および ComputerD で実行します。

関連資料:

- 62 ページの『NIS インストールの注意点』

パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (HP-UX)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。以下の説明で使用されるユーザーおよびグループの名前が、以下の表に示されています。ご使用のシステムの命名規則および DB2 命名規則に従う限り、自分独自のユーザー名およびグループ名を指定することができます。

表 6. 必要なユーザーおよびグループ

必要なユーザー	ユーザー名	グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
Administration Server ユーザー	dasusr1	dasadm1

Administration Server ユーザーとして既存ユーザーを使用する場合には、インストール前に、このユーザーがすべての参加コンピュータ上でも存在している必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インスタンス所有のコンピュータ上で Administration Server に新規ユーザーを作成する場合には、応答ファイルのインストール中にこのユーザーが、参加コンピュータ上にも作成されます。

(必要であれば)。ユーザーがすでに参加コンピューター上に存在している場合には、同じプライマリー・グループを持っている必要があります。

前提条件:

- ユーザーおよびグループを作成するためには、root 権限が必要です。
- NIS/NIS+ または同様のセキュリティ・ソフトウェアを使用してユーザーおよびグループを管理する場合には、ユーザーおよびグループを作成する前に、NIS/NIS+ の注意点を参照してください。DB2 ユーザーおよびグループを定義する場合には、追加のステップが必要です。

制約事項:

作成するユーザー名は、オペレーティング・システムの命名規則と DB2 の命名規則に沿ったものでなければなりません。

手順:

これらの 3 種類のユーザーをすべて作成するには、以下のようなステップを実行します。

1. 基本コンピューターにログオンします。
2. 以下のようなコマンドを入力して、インスタンス所有者のグループ (例えば、db2iadm1)、UDF またはストアード・プロシージャを実行するユーザー (例えば、db2fadm1)、および Administration Server (例えば、dasadm1) を作成します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

3. 以下のようなコマンドを使用して、前のステップで作成した各グループに属するユーザーを作成します。それぞれのユーザーのホーム・ディレクトリーは、ユーザーが以前に作成し共用した DB2 ホーム・ディレクトリー (db2home) となります。

```
useradd -u 1004 db2iadm1 -d /db2home/db2inst1 -m db2inst1
useradd -u 1003 db2fadm1 -d /db2home/db2fenc1 -m db2fenc1
useradd -u 1002 dbasgrp -d /home/dasusr1 -m dasusr1
```

4. 以下のようなコマンドを入力して、作成した各ユーザーの初期パスワードを設定します。

```
passwd db2inst1
passwd db2fenc1
passwd dasusr1
```

5. ログアウトします。
6. 作成した各ユーザー (db2inst1、db2fenc1、および dasusr1) として、基本コンピューターにログオンします。それぞれのユーザーのパスワードを変更するようプロンプトで指示されることがあります。そのユーザーがシステムにログオンするのはこれが初めてだからです。
7. ログアウトします。
8. パーティション・データベース・システムに参加するそれぞれのコンピューター上に、まったく同じユーザー・アカウントおよびグループ・アカウントを作成します。この例では、このタスクを ComputerB、ComputerC、および ComputerD で実行します。

関連資料:

- 62 ページの『NIS インストールの注意点』

パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (Linux)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。以下の説明で使用されるユーザーおよびグループの名前が、以下の表に示されています。ご使用のシステムの命名規則および DB2 命名規則に従う限り、自分独自のユーザー名およびグループ名を指定することができます。

表 7. 必要なユーザーおよびグループ

必要なユーザー	ユーザー名	グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
Administration Server ユーザー	dasusr1	dasadm1

Administration Server ユーザーとして既存ユーザーを使用する場合には、インストール前に、このユーザーがすべての参加コンピューター上でも存在している必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インスタンス所有のコンピューター上で Administration Server に新規ユーザーを作成する場合には、応答ファイルのインストール中にこのユーザーが、参加コンピューター上にも作成されます(必要であれば)。ユーザーがすでに参加コンピューター上に存在している場合には、同じプライマリー・グループを持っている必要があります。

前提条件:

- ユーザーおよびグループを作成するためには、root 権限が必要です。
- NIS/NIS+ または同様のセキュリティー・ソフトウェアを使用してユーザーおよびグループを管理する場合には、ユーザーおよびグループを作成する前に、*NIS/NIS+ の注意点* を参照してください。DB2 ユーザーおよびグループを定義する場合には、追加のステップが必要です。

制約事項:

作成するユーザー名は、オペレーティング・システムの命名規則と DB2 の命名規則に沿ったものでなければなりません。

手順:

これらの 3 種類のユーザーをすべて作成するには、以下のようなステップを実行します。

1. 基本コンピューターにログオンします。
2. 以下のようなコマンドを入力して、インスタンス所有者のグループ (例えば、db2iadm1)、UDF またはストアド・プロシージャを実行するユーザー (例えば、db2fadm1)、および Administration Server (例えば、dasadm1) を作成します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

使用する特定の各番号が現在どのマシン上にも存在していないことを確認してください。

3. 以下のようなコマンドを使用して、前のステップで作成した各グループに属するユーザーを作成します。それぞれのユーザーのホーム・ディレクトリーは、ユーザーが以前に作成し共用した DB2 ホーム・ディレクトリー (db2home) となります。

```
useradd -u 1004 -g db2iadm1 -m -d /db2home/db2inst1 db2inst1 -p password1
useradd -u 1003 -g db2fadm1 -m -d /db2home/db2fenc1 db2fenc1 -p password2
useradd -u 1002 -g dasadm1 -m -d /home/dasusr1 dasusr1 -p password3
```

4. 以下のようなコマンドを入力して、作成した各ユーザーの初期パスワードを設定します。

```
passwd db2inst1
passwd db2fenc1
passwd dasusr1
```

5. ログアウトします。
6. 作成した各ユーザー (db2inst1、db2fenc1、および dasusr1) として、基本コンピュータにログオンします。それぞれのユーザーのパスワードを変更するようプロンプトで指示されることがあります。そのユーザーがシステムにログオンするのはこれが初めてだからです。
7. ログアウトします。
8. パーティション・データベース・システムに参加するそれぞれのコンピュータ上に、まったく同じユーザー・アカウントおよびグループ・アカウントを作成します。この例では、このタスクを ComputerB、ComputerC、および ComputerD で実行します。

関連資料:

- 62 ページの『NIS インストールの注意点』

パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストールに必要なユーザーの作成 (Solaris オペレーティング環境)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。以下の説明で使用されるユーザーおよびグループの名前が、以下の表に示されています。ご使用のシステムの命名規則および DB2 命名規則に従う限り、自分独自のユーザー名およびグループ名を指定することができます。

表 8. 必要なユーザーおよびグループ

必要なユーザー	ユーザー名	グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
Administration Server ユーザー	dasusr1	dasadm1

Administration Server ユーザーとして既存ユーザーを使用する場合には、インストール前に、このユーザーがすべての参加コンピュータ上でも存在している必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インスタンス所有のコンピュータ上で Administration Server に新規ユーザーを作成する場合には、応答ファイルのインストール中にこのユーザーが、参加コンピュータ上にも作成されます。

(必要であれば)。ユーザーがすでに参加コンピューター上に存在している場合には、同じプライマリー・グループを持っている必要があります。

前提条件:

- ユーザーおよびグループを作成するためには、root 権限が必要です。
- NIS/NIS+ または同様のセキュリティー・ソフトウェアを使用してユーザーおよびグループを管理する場合には、ユーザーおよびグループを作成する前に、NIS/NIS+ の注意点を参照してください。

制約事項:

作成するユーザー名は、オペレーティング・システムの命名規則と DB2 の命名規則に沿ったものでなければなりません。

手順:

これらの 3 種類のユーザーをすべて作成するには、以下のようなステップを実行します。

1. 基本コンピューターにログオンします。
2. 以下のようなコマンドを入力して、インスタンス所有者のグループ (例えば、db2iadm1)、UDF またはストアード・プロシージャを実行するユーザー (例えば、db2fadm1)、および Administration Server (例えば、dasadm1) を作成します。

```
groupadd id=999 db2iadm1
groupadd id=998 db2fadm1
groupadd id=997 dasadm1
```

3. 以下のコマンドを使用して、それぞれのグループごとにユーザーを作成します。それぞれのユーザーのホーム・ディレクトリーは、ユーザーが以前に作成し共用した DB2 ホーム・ディレクトリー (/db2home) となります。

```
useradd -g db2iadm1 -d /db2home/db2inst1 -m db2inst1 passwd mypasswd
useradd -g db2fadm1 -d /db2home/db2fenc1 -m db2fenc1 passwd mypasswd
useradd -g dbasgrp -d /export/home/dasusr1 -m dasusr1 passwd mypasswd
```

4. 以下のようなコマンドを入力して、作成した各ユーザーの初期パスワードを設定します。

```
passwd db2inst1
passwd db2fenc1
passwd dasusr1
```

5. ログアウトします。
6. 作成した各ユーザー (db2inst1、db2fenc1、および dasusr1) として、基本コンピューターにログオンします。それぞれのユーザーのパスワードを変更するようプロンプトで指示されることがあります。そのユーザーがシステムにログオンするのはこれが初めてだからです。
7. ログアウトします。
8. パーティション・データベース・システムに参加するそれぞれのコンピューター上に、まったく同じユーザー・アカウントおよびグループ・アカウントを作成します。この例では、このタスクを ComputerB、ComputerC、および ComputerD で実行します。

関連資料:

- 62 ページの『NIS インストールの注意点』

第 10 章 インストール・タスク

単一パーティション・データベース環境 (Windows)

単一パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストール (Windows)

このタスクでは、Windows 上で DB2 セットアップ・ウィザードを開始する方法を説明します。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストールを定義し、DB2 をご使用のシステムにインストールします。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に、以下の事柄を行います。

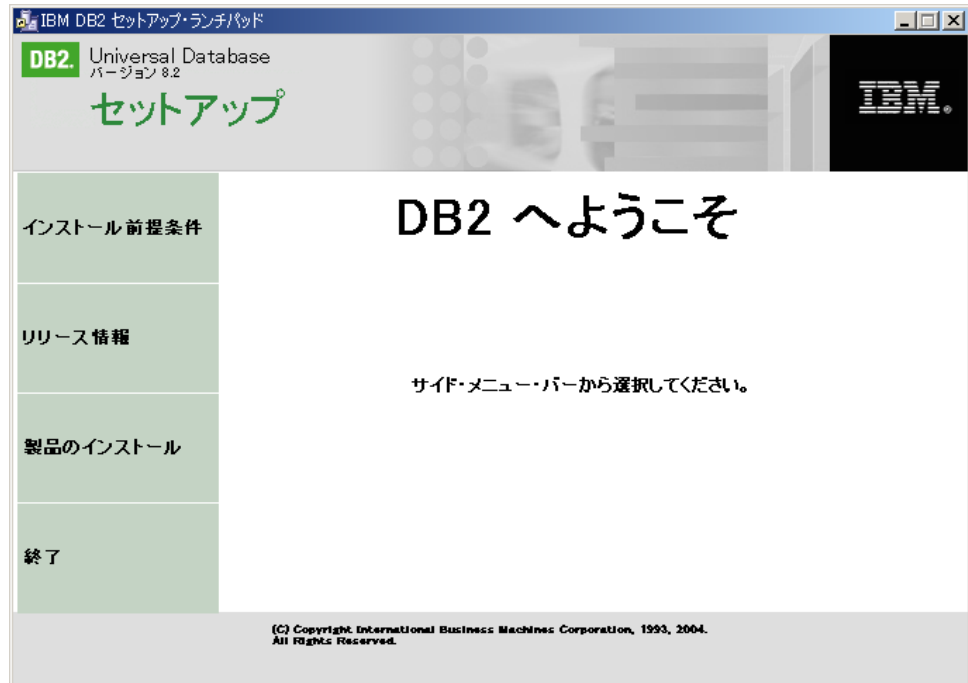
- ご使用のシステムがインストール、メモリー、およびディスクの各要件に合うことを確認します。
- Windows 2000 または Windows Server 2003 上で LDAP を使用して、DB2 サーバーを Active Directory に登録する予定であれば、インストールの前にディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。
- インストールを実行するために推奨されるユーザー権限を持つ、ローカル管理者ユーザー・アカウントを持っている必要があります。
- すべてのプログラムをクローズして、必要であればインストール・プログラムがファイルを更新できるようにします。

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

1. DB2 インストールのために定義した管理者アカウントで、システムにログオンします。

2. CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能を使用可能にしている場合には、それが DB2 セットアップ・ランチパッドを自動的に開始します。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。後で追加されたインストール前提条件およびリリース情報を参照することもできます。「製品のインストール (Install Products)」を選択して、DB2 製品のインストールを選択します。

3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
- b. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:%setup /i language
```

各要素の意味は以下のとおりです。

- *x*: は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は、ご使用の言語の地域 ID です (例えば英語は EN)。

/i フラグが指定されていない場合には、インストール・プログラムはオペレーティング・システムのデフォルトの言語で実行されます。

- c. 「OK」をクリックします。

4. インストールを立ち上げ、セットアップ・プログラムの指示に従って作業を進めていきます。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用

きます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。

サンプル・データベースを使用してインストールを検査する場合には、必ず入門 (Getting Started) コンポーネント・グループにあるサンプル・データベース・コンポーネントをインストールしてください。標準インストールでは、サンプル・データベースはパーツとして組み込まれています。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、「My Documents」¥DB2LOG¥ ディレクトリーにある、db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。db2.log は、DB2 インストールの履歴をキャプチャーします。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』を参照してください。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』
- 128 ページの『参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ツール・カタログ・データベースおよび DAS スケジューラーのセットアップと構成』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『通知、連絡先リストのセットアップ、および構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『UPDATE ADMIN CONFIGURATION コマンド』
- 63 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 219 ページの『別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID』
- 61 ページの『ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)』

パーティション・データベース環境 (Windows)

パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (Windows)

このタスクでは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、基本コンピューター上にインスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールする方法を説明します。

前提条件:

インスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールする前に、以下の事柄を行っておきます。

- ご使用のシステムがインストール、メモリー、およびディスクの各要件に合うことを確認します。
- Windows 2000 または Windows Server 2003 上で LDAP を使用して、DB2 サーバーを Active Directory に登録する予定であれば、インストールの前にディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。
- インストールを実行するために推奨されるユーザー権限を持つ、ローカル管理者ユーザー・アカウントを持っている必要があります。
- インスタンス作成時に、インスタンスがサポート可能な論理ノードの数に等しい数のポートが `/etc/services` に予約されます。これらのポートは高速コミュニケーション・マネージャーによって使用されます。予約されたポートは以下の形式になります。

```
DB2_InstanceName
DB2_InstanceName_1
DB2_InstanceName_2
DB2_InstanceName_END
```

必須の項目は、開始 (`DB2_InstanceName`) および終了 (`DB2_InstanceName_END`) のポートのみです。他の項目は、他のアプリケーションがそれらのポートを使用しないようにサービス・ファイルに予約されます。

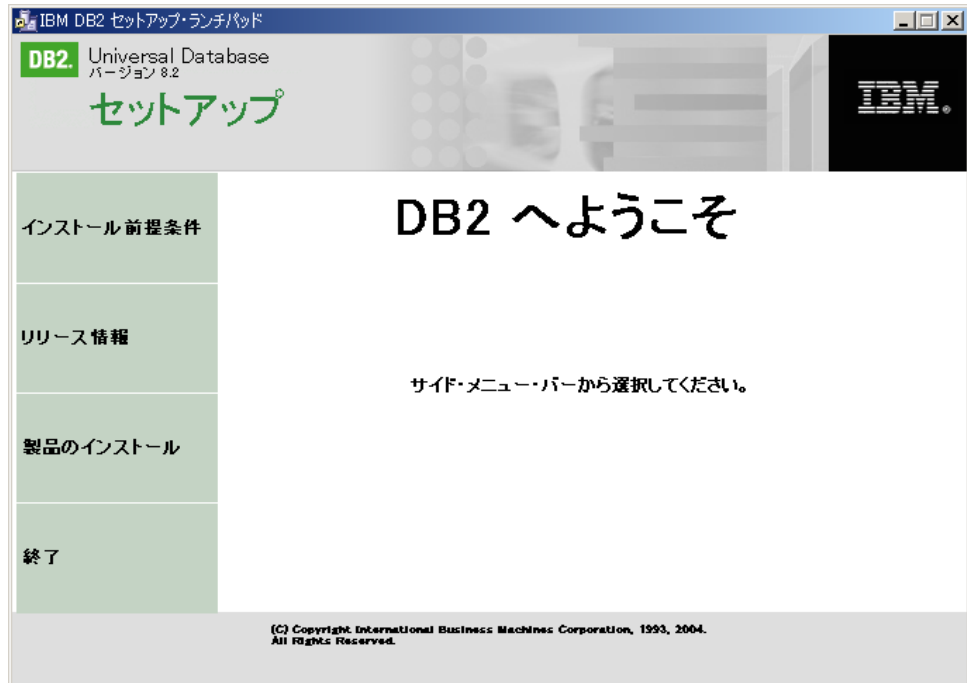
- 複数の物理ノードをサポートするには、DB2 のインストール先のコンピューターがアクセス可能ドメインに属していなければなりません。しかし、このコンピューターがドメインに属していない場合でも、このコンピューターにローカル・ノードを追加できます。詳細については、このトピックの最後にある関連リンクを参照してください。

手順:

以下のようにして、インスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールします。

1. インストールを実行するために使用するドメイン・ユーザー・アカウントで、システムにログオンします。これは、それぞれのコンピューター上のローカル管理者グループに追加した、ドメイン・ユーザー・アカウントです。
2. すべてのプログラムをクローズして、必要であればインストール・プログラムがファイルを更新できるようにします。

3. CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能を使用可能にしている場合には、それが DB2 セットアップ・ランチパッドを自動的に開始します。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。後で追加されたインストール前提条件およびリリース情報を参照することもできます。「製品のインストール (Install Products)」を選択して、DB2 製品のインストールを選択します。

4. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
- b. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:%setup /i language
```

各要素の意味は以下のとおりです。

- *x*: は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は、ご使用の言語の地域 ID です (例えば英語は EN)。

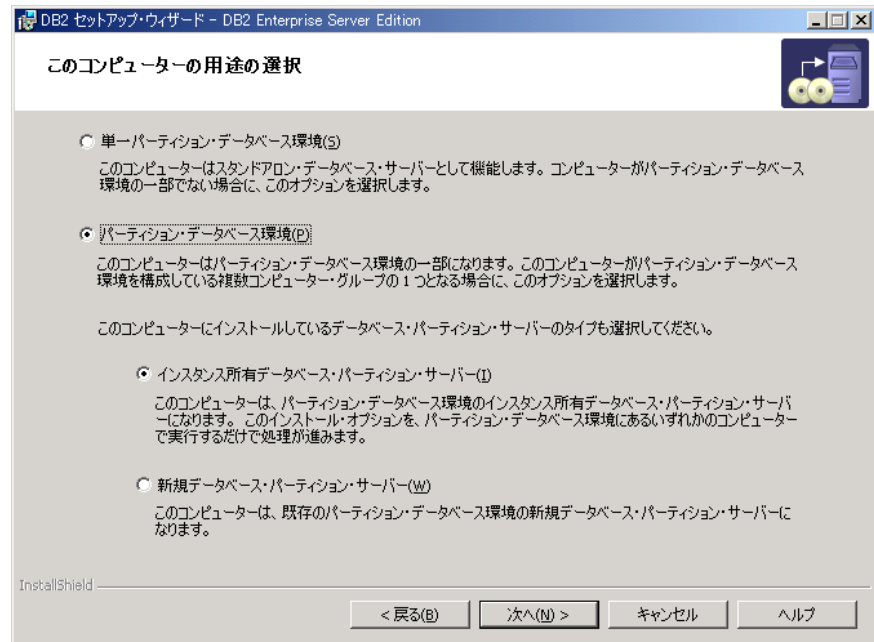
/i フラグが指定されていない場合には、インストール・プログラムはオペレーティング・システムのデフォルトの言語で実行されます。

- c. 「OK」をクリックします。
5. ランチパッドの情報を参照し終わったら、インストールを進めます。以下に、DB2 セットアップ・ウィザードのインストール・パネル、および基本コンピューター

上にインスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーを適正にインストールするために行う必要のある選択について説明します。

このマシンの使用方法の選択 (Select how this computer will be used)

「このマシンの使用方法の選択 (Select how this computer will be used)」パネルで、「パーティション・データベース環境 (Partitioned database environment)」ラジオ・ボタンと「インスタンス所有データベース・パーティション・サーバー (Instance-owning database partition server)」ラジオ・ボタンを選択してください。

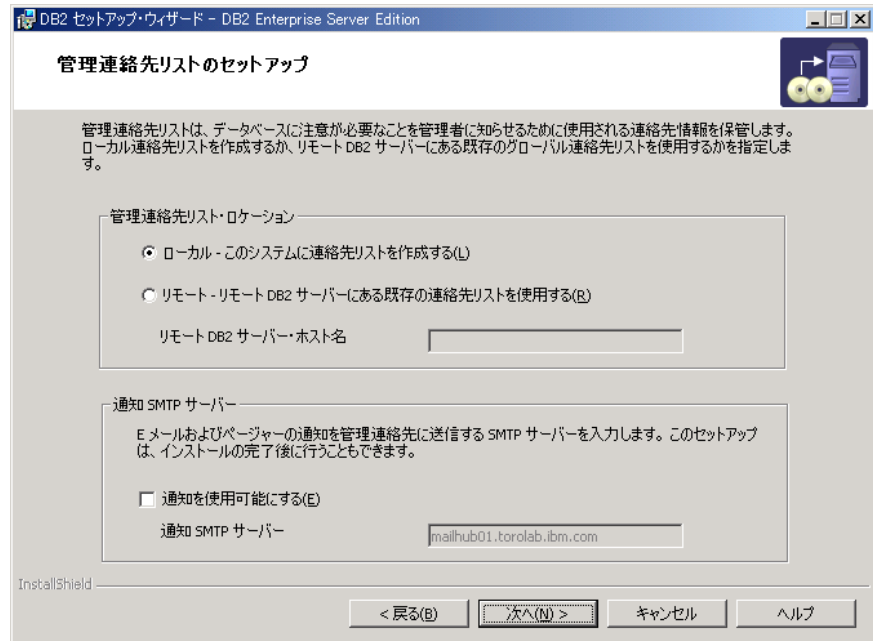


管理連絡先リストのセットアップ (Set up the administration contact list)

「管理連絡先リストのセットアップ (Set up the administration contact list)」パネルで、「ローカル (Local)」を選択します。この選択では、ご使用のシステムの連絡先情報を保管するため、基本コンピューター上にファイルを作成します

連絡先情報は、DB2 がシステム管理者に、通知やアラートを送信するために使用します。通知はジョブが完了したことを知らせます。アラートは、システムしきい値が違反されたことを知らせます。セットアップ完了後に、通知パラメーターとアラート・パラメーターを指定することができます。

参加コンピューターは、このコンピューター上の連絡先リストにリモート側でアクセスします。

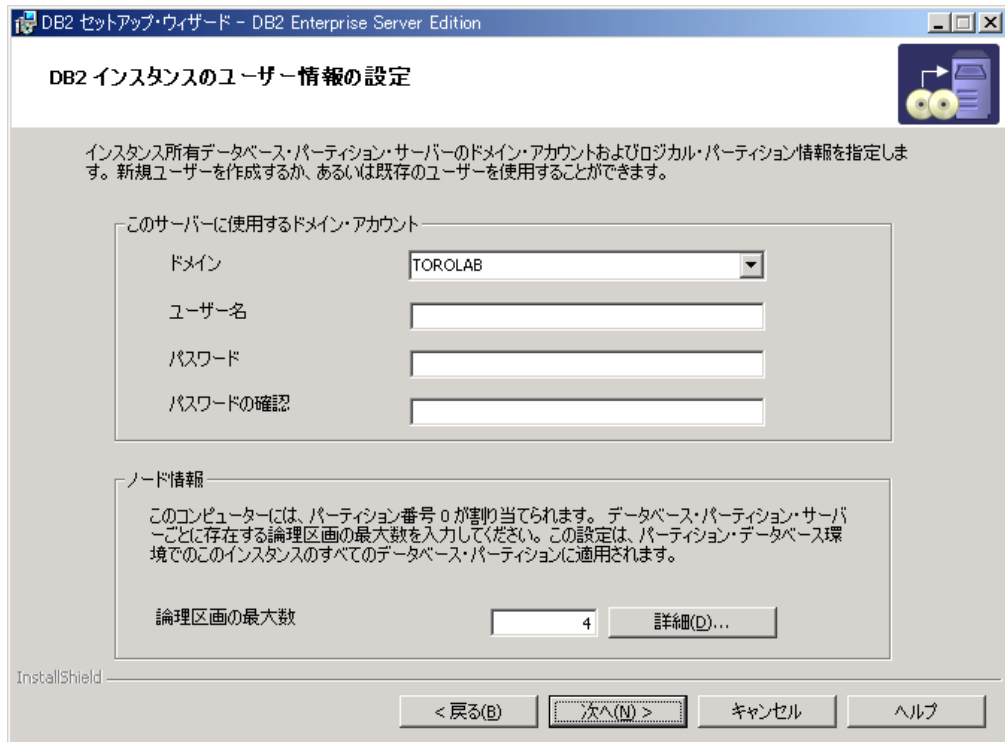


DB2 インスタンス所有者のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 instance)

「DB2 インスタンス所有者のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 instance)」パネルで、DB2 インスタンスのドメインと、コンピューター上に持つことのできるデータベース・パーティションの最大数を指定することができます。

パーティション・データベースが置かれるドメインを、ドロップダウン・ボックスから選択します。「ドメイン (Domain)」フィールドにドメイン・ネームを入力してドメイン・ネームを指定することもできます。

コンピューターあたりのデフォルトの最大論理区画数は 4 です。コンピューターにデータベース・パーティション・サーバーが 1 つある場合には、ポートは 1 つだけ必要です。デフォルト値の 4 を保持する場合には、4 つのポートがデータベース・パーティション・サーバー通信のために予約されます。参加コンピューターにデータベース・パーティション・サーバーをインストールする際に、DB2 は同一のポート番号の予約を試行します。



残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックするか、または **F1** を押します。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了」をクリックした後に、DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\DB2LOG¥ ディレクトリーにある、db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。db2.log は、DB2 インストールの履歴をキャプチャーします。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』を参照してください。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『複数の論理ノードを使用する状況』
- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『複数の論理ノードの構成』
- 128 ページの『参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)』

関連資料:

- 68 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』
- 219 ページの『別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』

参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (Windows)

このタスクでは、参加コンピューター上のポート範囲の可用性を検査するために必要なステップを記述します。ポート範囲は、高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) が使用します。FCM は、データベース・パーティション・サーバー間の通信を取り扱う DB2 の機能です。

基本マシン上にインスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールする際に、DB2 はパーティション・データベース環境に参加しているデータベース・パーティション・サーバーの数に応じて、ポート範囲を予約します。デフォルトの範囲は 4 つのポートです。DB2 セットアップ・ウィザードは、参加コンピューター上にデータベース・パーティション・サーバーをインストールするときに、同一のポート範囲を予約できなければなりません。個々のパーティション・サーバー上でポート範囲を解放する必要があります。

このタスクは、インスタンス所有データベース・パーティション・サーバーをインストールしてから、なおかつ参加データベース・パーティション・サーバーをインストールする前に実行してください。

手順:

以下のようにして、参加コンピューター上のポート範囲の可用性を検査します。

1. %SystemRoot%\system32\drivers\etc ディレクトリーにある services ファイルをオープンします。%SystemRoot% は、ユーザーの Windows ルート・ディレクトリーです。
2. DB2 高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) 用に予約されたポートを探し出します。項目は以下のように表示されるはずですが。

```
|
|      DB2_DB2          60000/tcp
|      DB2_DB2_1       60001/tcp
|      DB2_DB2_2       60002/tcp
|      DB2_DB2_END     60003/tcp
|
```

DB2 は 60000 以降の最初の 4 つの使用可能なポートを予約します。

3. それぞれの参加コンピューター上で、services ファイルをオープンし、基本コンピューターのサービス・ファイルにある、DB2 FCM に予約されたポートが使用中でないかを確認します。

4. 必要なポートが参加コンピューターで使用されている場合は、すべてのコンピューターで使用可能なポート範囲を識別し、基本コンピューターのサービス・ファイルも含めて、それぞれのサービス・ファイルを更新します。

関連概念:

- 73 ページの『高速コミュニケーション・マネージャー (Windows)』

関連タスク:

- 128 ページの『参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)』

関連資料:

- 151 ページの『DB2 ノード構成ファイル - db2nodes.cfg (UNIX)』

参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (Windows)

このタスクでは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、参加コンピューター上にデータベース・パーティション・サーバーをインストールする方法を説明します。このタスクは、それぞれの参加コンピューター上で実行する必要があります。

前提条件:

参加コンピューター上にデータベース・パーティション・サーバーをインストールする前に、

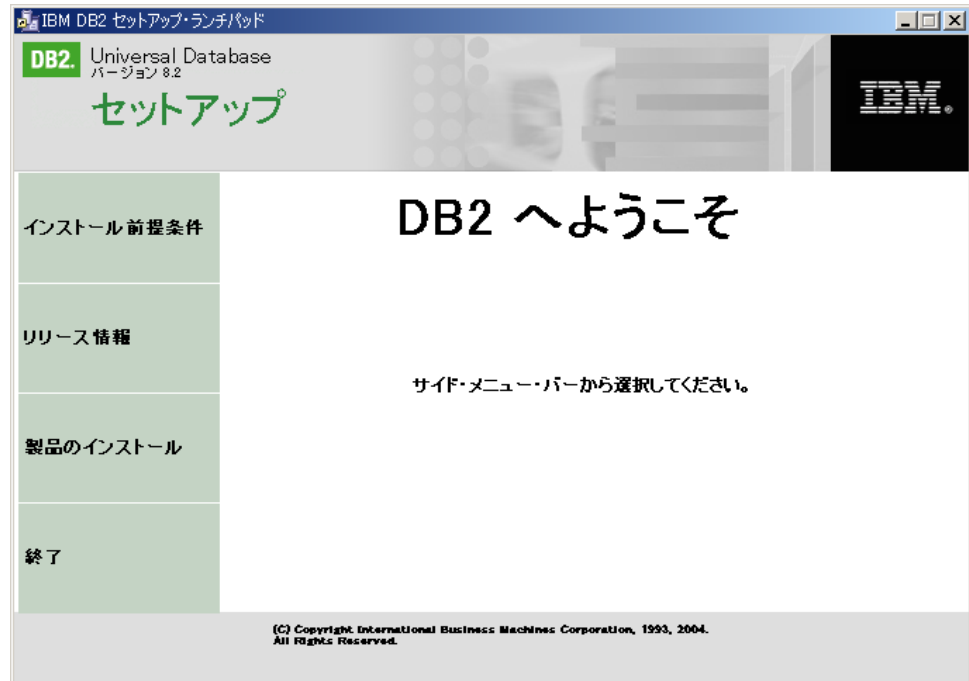
- インスタンス所有のデータベース・サーバー・パーティションを、基本コンピューター上にインストールしなければなりません。
- 基本コンピューター上のローカル管理者グループに追加したドメイン・ユーザー・アカウントは、参加コンピューター上のローカル管理者グループに追加しなければなりません。このアカウントを使用して、インストールを実行します。

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

1. インストールを実行するために使用するドメイン・ユーザー・アカウントで、システムにログオンします。これは、それぞれのコンピューター上のローカル管理者グループに追加した、ドメイン・ユーザー・アカウントです。
2. すべてのプログラムをクローズして、必要であればインストール・プログラムがファイルを更新できるようにします。

3. CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能を使用可能にしている場合には、それが DB2 セットアップ・ランチパッドを自動的に開始します。



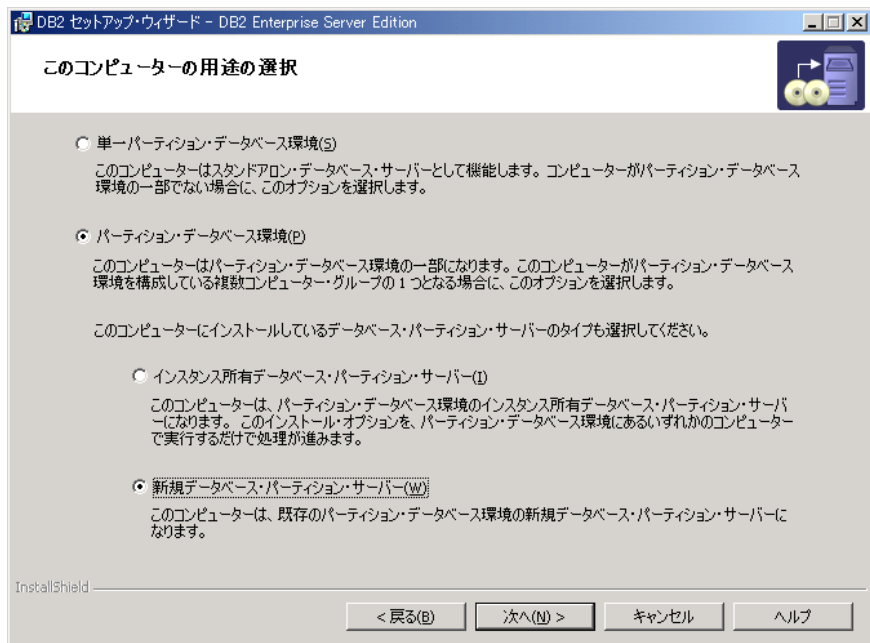
このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。後で追加されたインストール前提条件およびリリース情報を参照することもできます。「製品のインストール (Install Products)」を選択して、DB2 製品のインストールを選択します。

4. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。DB2 セットアップ・ウィザードを開始するための構文は、この手順の最後に記述されています。
5. 以下のリストは、特定の DB2 セットアップ・ウィザードのインストール・パネル、および参加コンピューター上にデータベース・パーティション・サーバーを適正にインストールするために行う必要のある選択についての情報を提供しています。

このマシンの使用方法の選択 (Select how this computer will be used)

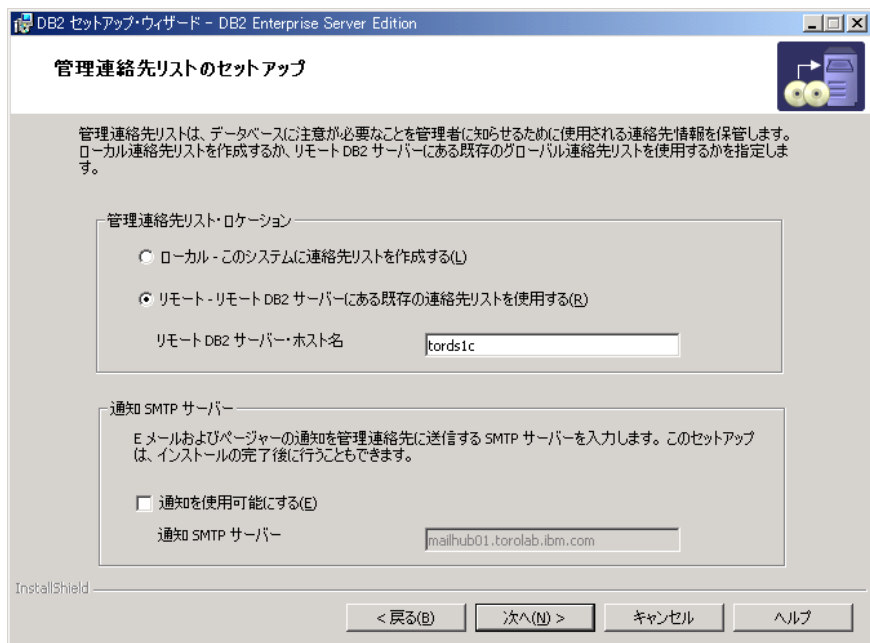
「このマシンの使用方法の選択 (Select how this computer will be used)」パネルで、「パーティション・データベース環境 (Partitioned database environment)」ラジオ・ボタンと「新規データベース・パーティション・サーバー (New database partition server)」ラジオ・ボタン

を選択してください。



管理連絡先リストのセットアップ (Set up the administration contact list)

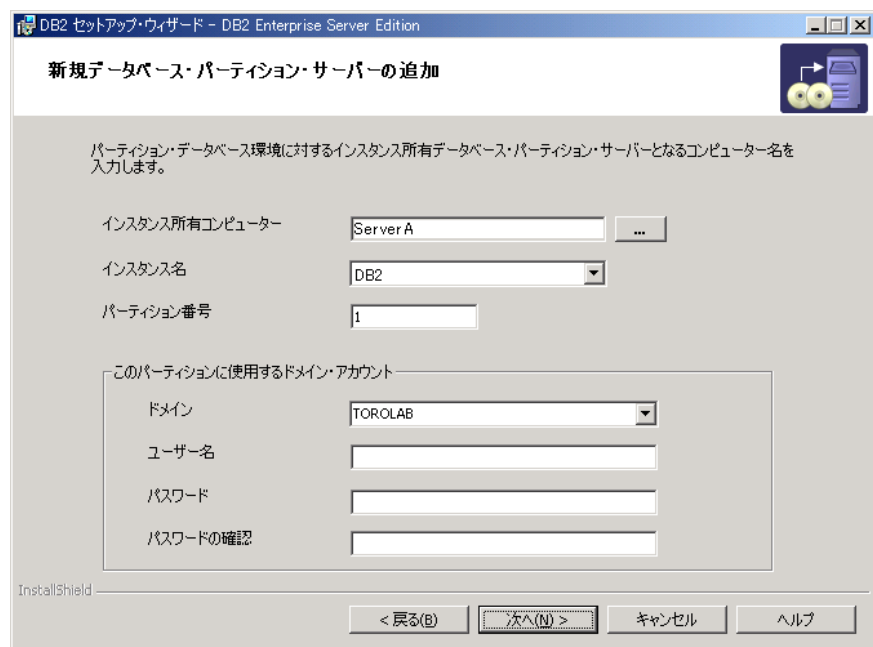
「管理連絡先リストのセットアップ (Set up the administration contact list)」で、「リモート (Remote)」を選択します。インスタンス所有データベース・パーティション・サーバーをインストールした基本コンピューターのホスト名を指定し、連絡先リストをセットアップします。



新規データベース・パーティション・サーバーの追加 (Add a new database partition server)

「新規データベース・パーティション・サーバーの追加 (Add a new database partition server)」パネルで、以下のことを行います。

- インスタンス所有データベース・パーティション・サーバーをインストールした基本コンピューター（インスタンス所有コンピューター）のホスト名を指定します。
- ドロップダウン・ボックスで、インスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーのインストール時に作成したインスタンスの名前を選択します。デフォルトのインスタンス名は *DB2* です。
- パーティション番号には、1 から 999 のユニーク値を指定します。これがインストールする新規データベース・パーティション・サーバーの最初のものであれば、1 の値を入れることをお勧めします。次のデータベース・パーティション・サーバーについては、2 を入力する、といった具合に続けます。インスタンス所有のパーティション・サーバーには必ず、0 が割り当てられます。値は昇順でなければなりません、数をとばしてギャップを入れてもかまいません。



残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックするか、または **F1** を押します。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了」をクリックした後に、DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\%DB2LOG% ディレクトリーにある、db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。db2.log は、DB2 インストールの履歴をキャプチャーします。

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

1. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
2. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:¥setup /i language
```

ここで、

- *x*: は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は、ご使用の言語の地域 ID です (例えば英語は EN)。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』を参照してください。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 119 ページの『単一パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストール (Windows)』
- 122 ページの『パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (Windows)』
- 127 ページの『参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (Windows)』

単一パーティション・データベース環境 (UNIX)

単一パーティション環境での DB2 サーバーのインストール (UNIX)

このタスクでは、UNIX システム上で DB2 セットアップ・ウィザードを開始する方法を説明します。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール設定を定義し、ご使用のシステムに DB2 をインストールします。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に、以下の事柄を行います。

- ご使用のシステムがインストール、メモリー、およびディスクの各要件に合うことを確認します。
- IBM Developer Kit for Java 1.3.1 のインストールに関する考慮事項を確認します。
- インストールを実行するために、root 権限が必要です。

- DB2 製品 CD-ROM が、ご使用のシステムにマウントされていなければなりません。
- DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィック・インストーラーです。ご使用のマシンで DB2 セットアップ・ウィザードを実行するには、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示できる Xwindow ソフトウェアが必要です。ディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認してください。例えば、`export DISPLAY=9.26.163.144:0` のようにします。
- ご使用の環境で NIS/NIS+ または類似のセキュリティー・ソフトウェアが使用される場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に、必要な DB2 ユーザーを手動で作成する必要があります。始める前に、関連した NIS トピックを参照してください。
- Solaris では、`backoutallpatch` スクリプトを使用してフィックスパックまたは修正レベルをアンインストールするのに必要なファイルは、`/var/sadm` ディレクトリに保管されます。個々のフィックスパックや修正パッケージに必要な `/var/sadm` ディレクトリ中のディスク・スペースは、DB2 に必要な `/opt/IBM/db2/V8.1` ディレクトリ中のディスク・スペースと同じ量です。
- Solaris オペレーティング環境および AIX 5L の場合、`tar.Z` ファイルおよび圧縮されていないインストール・イメージを保管するには、ソフトウェアのディスク要件に加え、ファイル・システムに 2 GB のフリー・スペースが必要です。
- AIX および Linux では、非同期入出力 (AIO) が使用可能であることを確認してください。DB2 UDB を正常にインストールするためには、非同期入出力を使用可能にしなければなりません。`db2set` コマンドを発行すると、ランタイムに AIO を使用可能にしたり使用不可にしたりできます。Linux 上で AIO を使用するには、`libaio-0.3.96` 以降をインストールし、AIO をサポートするカーネル (バージョン 2.6 など) を入手し、`db2set DB2NOLIOAIO=false` コマンドを実行して、DB2 を再始動しなければなりません。

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. CD-ROM のラベルを見て、適切な言語の CD-ROM を使用していることを確認してください。
3. 以下のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /cdrom
```

ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

4. ご使用のオペレーティング・システムに該当するセクションを参照してください。

AIX 4.3.3、HP-UX、および Linux の場合

`./db2setup` コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

Solaris オペレーティング環境および AIX 5L の場合

- a. `product.tar.Z` を一時ファイル・システムにコピーします。ここで `product` は、インストールのライセンス交付を受けた製品を表します。

- b. 以下のコマンドを入力して DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

```
zcat product.tar.Z | tar -xf - ; ./product/db2setup
```

例えば DB2 Enterprise Server Edition の製品名が *ese* の場合は、以下のコマンドを入力します。

```
zcat ese.tar.Z | tar -xf - ; ./ese/db2setup
```

5. しばらくすると、IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。後で追加されたインストール前提条件およびリリース情報を参照することもできます。

インストールを開始したなら、DB2 セットアップ・ウィザードのインストール・パネルに従って、選択を行ってください。残りのステップについて説明しているインストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックするか、または **F1** を押します。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。

インストールが完了したならば、DB2 は以下のディレクトリーのいずれかにインストールされています。

AIX /usr/opt/db2_08_01

HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境

/opt/IBM/db2/V8.1

インストール・ログ db2setup.his、db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトでは /tmp ディレクトリー中に入れられます。これらのログ・ファイルの場所を指定できます。

db2setup.log ファイルは、エラーを含むすべての DB2 インストール情報をキャプチャーします。 db2setup.his はマシン上のすべての DB2 インストール内容を記録します。 DB2 は db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに付加します。 db2setup.err ファイルは、 Java によって戻されるエラー出力 (例外やトラップ情報など) をキャプチャーします。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、 DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。 DB2 インフォメーション・センターには、 DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。 『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』を参照してください。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 87 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ツール・カタログ・データベースおよび DAS スケジューラーのセットアップと構成』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『通知、連絡先リストのセットアップ、および構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『UPDATE ADMIN CONFIGURATION コマンド』

パーティション・データベース環境 (UNIX)

パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (UNIX)

このタスクでは、DB2 セットアップ・ウィザードを立ち上げて、ご使用のパーティション・システムの基本コンピューターに DB2 ESE データベース・パーティション・サーバーをインストールする方法を説明します。パーティション・データベース・システムをセットアップするために必要な DB2 セットアップ・ウィザードのパネルについて、情報が提供されています。それでこのトピックでは、必ずしもすべての DB2 セットアップ・ウィザード・パネルが説明されているわけではありません。何か疑問点があれば、DB2 セットアップ・ウィザードのインストール操作のヘルプを使用してください。

前提条件:

DB2 をインストールするためには、root 権限が必要です。

CD-ROM のラベルを見て、適切な言語の CD-ROM を使用していることを確認してください。

インスタンス作成時に、インスタンスがサポート可能な論理ノードの数に等しい数のポートが `/etc/services` に予約されます。これらのポートは高速コミュニケーション・マネージャーによって使用されます。予約されたポートは以下の形式になります。

```
DB2_InstanceName
DB2_InstanceName_1
DB2_InstanceName_2
DB2_InstanceName_END
```

必須の項目は、開始 (`DB2_InstanceName`) および終了 (`DB2_InstanceName_END`) のポートのみです。他の項目は、他のアプリケーションがそれらのポートを使用しないようにサービス・ファイルに予約されます。

Solaris オペレーティング環境および AIX 5L の場合、`tar.Z` ファイルおよび圧縮されていないインストール・イメージを保管するには、ソフトウェアのディスク要件に加え、ファイル・システムに 2 GB のフリー・スペースが必要です。

Solaris では、`backoutallpatch` スクリプトを使用してフィックスバックまたは修正レベルをアンインストールするのに必要なファイルは、`/var/sadm` ディレクトリーに保管されます。個々のフィックスバックや修正パッケージに必要な `/var/sadm` ディレクトリー中のディスク・スペースは、DB2 に必要な `/opt/IBM/db2/V8.1` ディレクトリー中のディスク・スペースと同じ量です。

AIX および Linux では、非同期入出力 (AIO) が使用可能であることを確認してください。DB2 UDB を正常にインストールするためには、非同期入出力を使用可能にしなければなりません。`db2set` コマンドを発行すると、ランタイムに AIO を使用可能にしたり使用不可にしたりできます。Linux 上で AIO を使用するには、`libaio-0.3.96` 以降をインストールし、AIO をサポートするカーネル (バージョン 2.6 など) を入手し、`db2set DB2NOLIOAIO=false` コマンドを実行して、DB2 を再始動しなければなりません。

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、基本コンピューターに DB2 ESE をインストールします。

1. AIX 4.3.3、HP-UX、および Linux の場合は、DB2 製品 CD-ROM の内容をコピーした `/db2home` ファイル・システムのディレクトリーから、`db2setup` コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。Solaris オペレーティング環境および AIX 5L の場合は、DB2 製品 CD-ROM の内容をコピーした `/db2home` ファイル・システムのディレクトリーから、以下のコマンドを入力して DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

```
zcat product.tar.Z | tar -xf - ; ./product/db2setup
```

例えば DB2 Enterprise Server Edition の製品名が `ese` の場合は、以下のコマンドを入力します。

```
zcat ese.tar.Z | tar -xf - ; ./ese/db2setup
```


しばらくすると DB2 バージョン 8 インストールのランチパッドがオープンします。



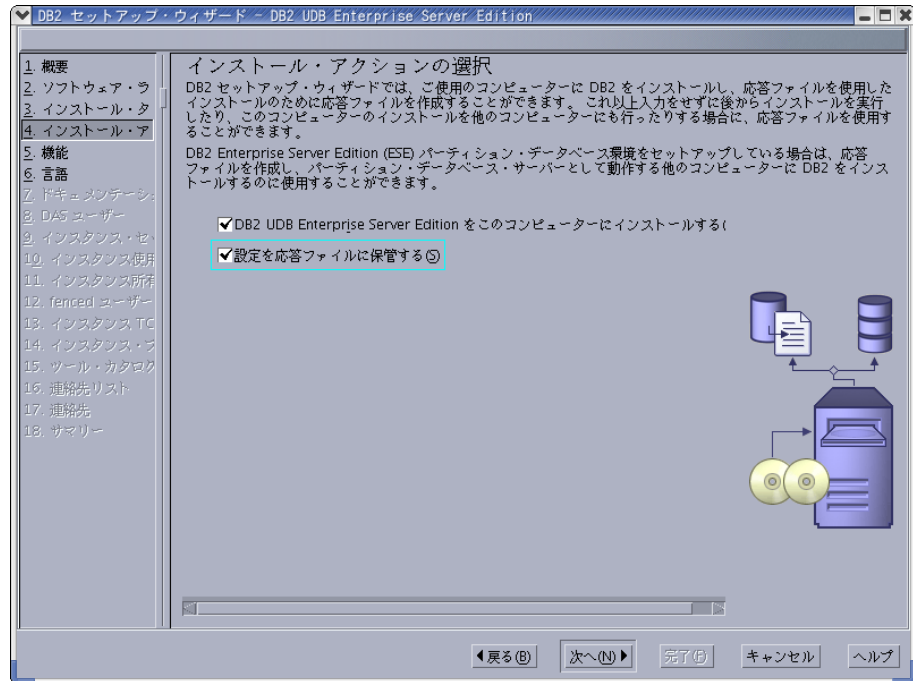
DB2 ランチパッドから、インストールの前提条件およびリリース情報を参照することができます。

2. ランチパッドの情報を参照し終わったら、インストールを進めます。

以下に、DB2 セットアップ・ウィザードのインストール・パネル、および基本コンピューター上に DB2 ESE を正しくインストールするために必要な選択について説明します。

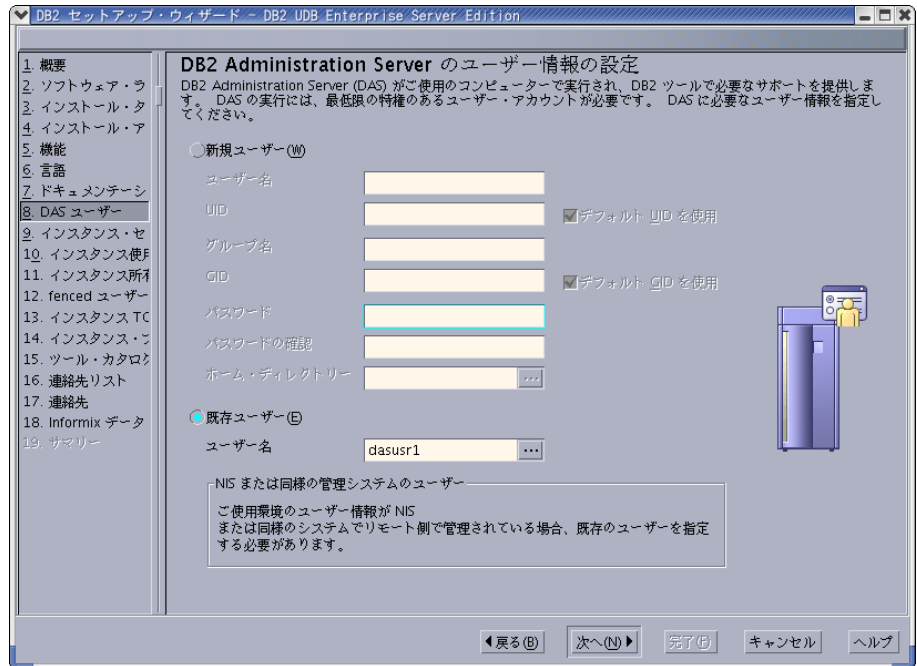
インストール・アクションの選択 (Select the installation action)

「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」パネルで、「**DB2 UDB Enterprise Server Edition をこのコンピューターにインストールする (Install DB2 UDB Enterprise Server Edition on this computer)**」および「**設定を応答ファイルに保管する (Save your setting to a response file)**」の両方を選択する必要があります。応答ファイルは、参加コンピューターに DB2 をインストールするために使用します。



DB2 Administration Server (DAS) のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 Administration Server (DAS))

「DB2 Administration Server (DAS) のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 Administration Server (DAS))」パネルで、ご使用の環境をインストールのために準備した際に作成した DAS ユーザーを選択する必要があります。それで、「既存ユーザー (Existing user)」ラジオ・ボタンを選択してユーザーを入力するか、または「...」ボタンを使用して、以前に作成した DAS ユーザーを探してください。

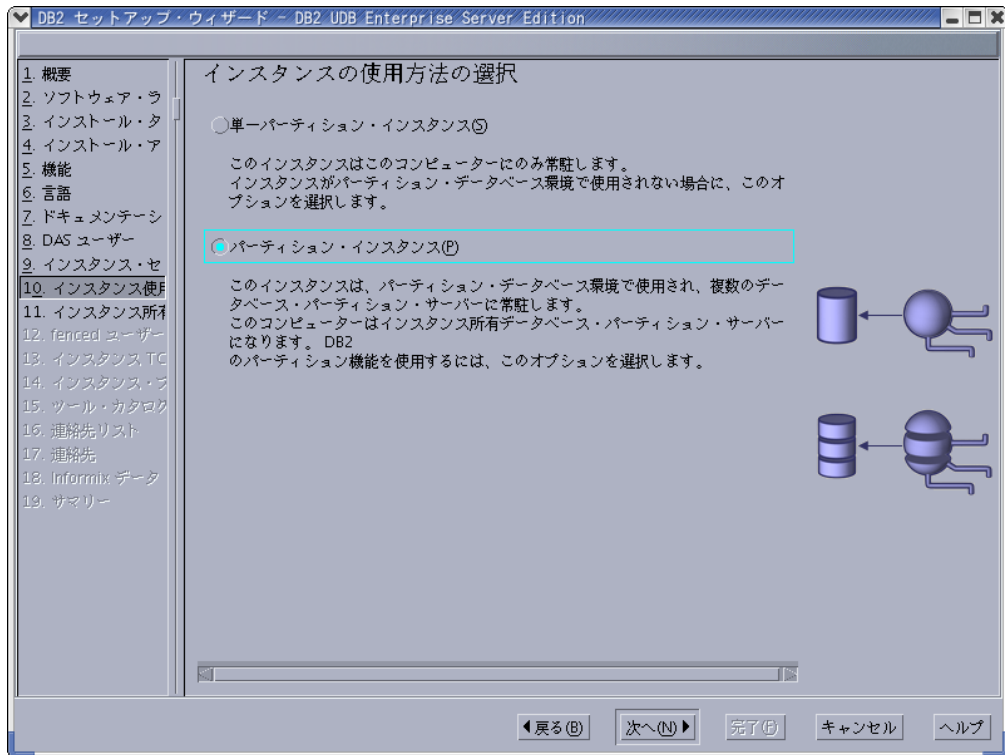


DB2 インスタンスのセットアップ (Set up a DB2 instance)

「DB2 インスタンスのセットアップ (Set up a DB2 instance)」パネルで、「DB2 インスタンスの作成 (Create a DB2 instance)」を選択します。

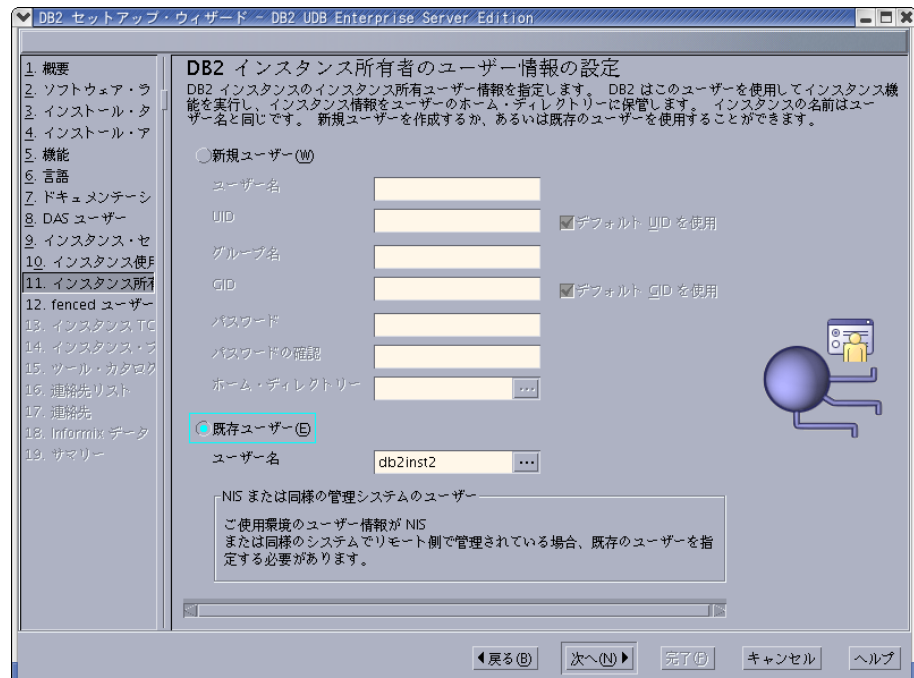
インスタンスの使用方法の選択 (Select how this instance will be used)

「インスタンスの使用方法の選択 (Select how this instance will be used)」パネルで、「パーティション・インスタンス (Partitioned instance)」を選択する必要があります。

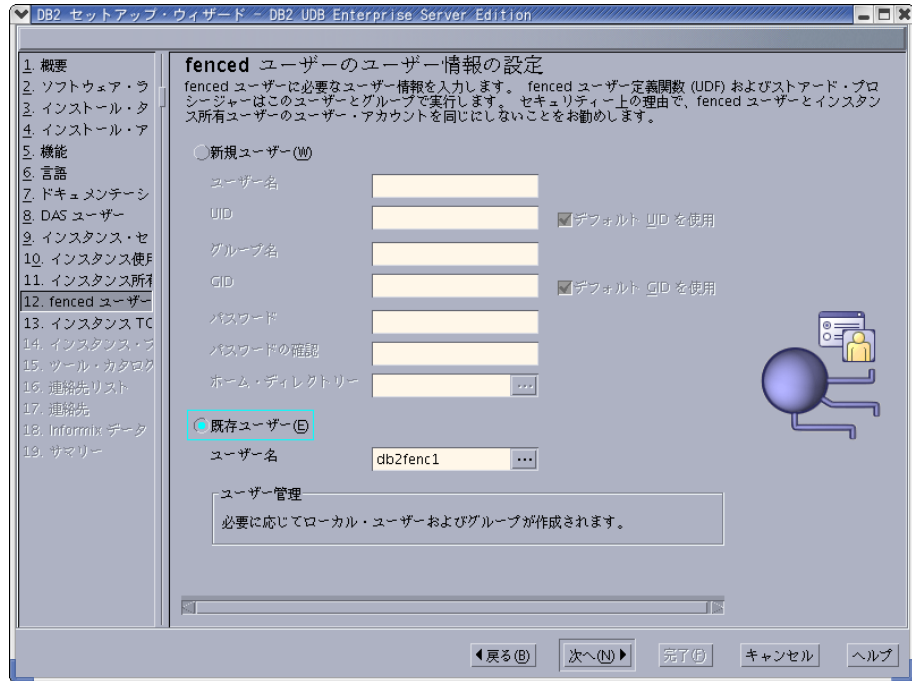


DB2 インスタンス所有者のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 instance)

「DB2 インスタンス所有者のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 instance)」パネルで、インストールのために環境を準備した際に作成したインスタンス所有者を選択する必要があります。それで、「**既存ユーザー (Existing user)**」ラジオ・ボタンを選択してユーザーを入力するか、または「...」ボタンを使用してインスタンス所有者を選択します。



fenced ユーザーのユーザー情報の設定 (Set user information for the fenced user) 「fenced ユーザーのユーザー情報の設定 (Set user information for the fenced user)」パネルで、インストールのために環境を準備した際に作成した、既存の fenced ユーザーを選択します。「既存ユーザー (Existing user)」ラジオ・ボタンを選択してユーザーを入力するか、または「...」ボタンを使用して fenced ユーザーを選択します。

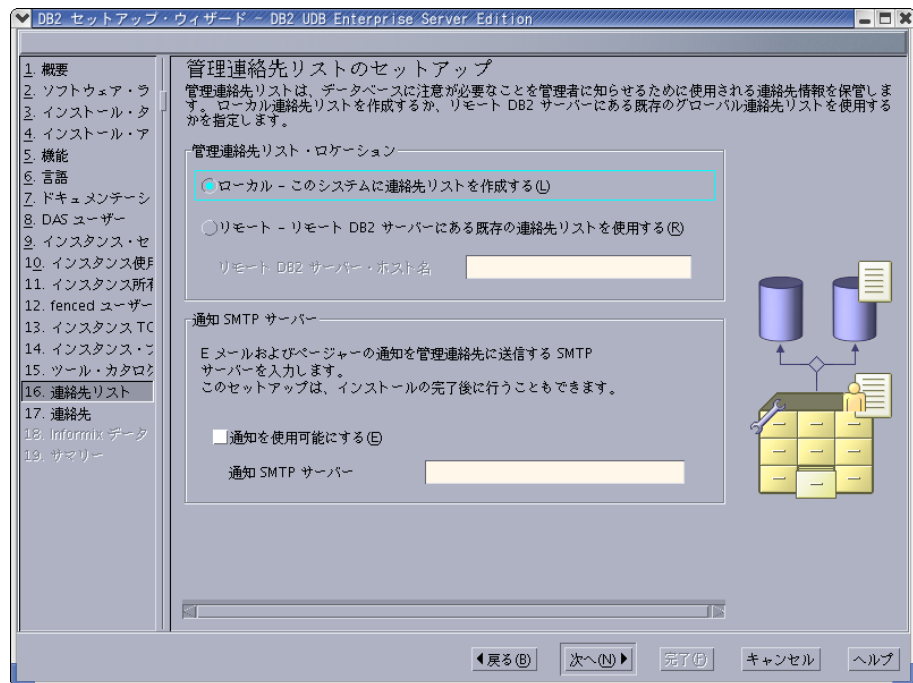


「管理連絡先リストのセットアップ」パネル (Set up the administration contact list panel)

「管理連絡先リストのセットアップ (Set up the administration contact list)」パネルで、「ローカル (Local)」を選択します。この選択では、ご使用のシステムの連絡先情報を保管するため、基本コンピューター上にファイルを作成します。

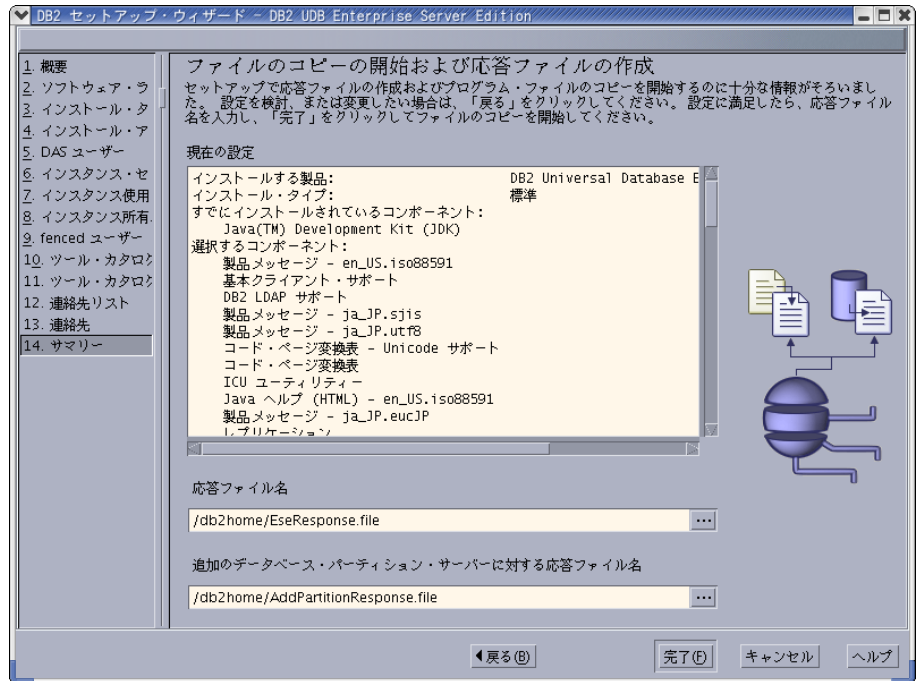
連絡先情報は、DB2 がシステム管理者に、通知やアラートを送信するために使用します。セットアップ完了後に、通知パラメーターとアラート・パラメーターを指定することができます。参加コンピューターは、基本コンピュ

ーター上にあるこの連絡先リストにリモート側でアクセスします。



ファイルのコピーの開始 (Start copying files)

「ファイルのコピーの開始 (Start copying files)」パネルでは、2つの応答ファイルのロケーションおよび名前を指定する必要があります。1つ目の応答ファイルは、基本コンピューター・インストールのレプリカをインストールするためのものです。2つ目の応答ファイルは、参加コンピューターにデータベース・パーティション・サーバーをインストールするためのものです。1つ目の応答ファイルは、どこでも好きな場所に置くことができます。2つ目の応答ファイル (本書の例では AddPartitionResponse.file) は、/db2home ディレクトリーに保管する必要があります。そこで参加コンピューターがアクセスすることができます。



インストール・ログ db2setup.his、db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトでは /tmp ディレクトリー中に入れられます。ログ・ファイルの場所を指定できます。

db2setup.log ファイルは、エラーを含むすべての DB2 インストール情報をキャプチャーします。db2setup.his はマシン上のすべての DB2 インストール内容を記録します。DB2 は db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに付加します。db2setup.err ファイルは、Java によって戻されるエラー出力 (例外やトラップ情報など) をキャプチャーします。

ESE パーティション・データベース・システムの次のステップは、作成した応答ファイル (AddPartitionResponse.file) を使用して、参加コンピューターにデータベース・パーティション・サーバーをインストールすることです。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』を参照してください。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 218 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (UNIX)

このタスクでは、参加コンピューター上のポート範囲の可用性を検査するために必要なステップを記述します。ポート範囲は、高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) が使用します。FCM は、データベース・パーティション・サーバー間の通信を取り扱う DB2 の機能です。

基本マシン上にインスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバーをインストールする際に、DB2 はパーティション・データベース環境に参加しているデータベース・パーティション・サーバーの数に応じて、ポート範囲を予約します。デフォルトの範囲は 4 つのポートです。DB2 セットアップ・ウィザードは、参加コンピューター上にデータベース・パーティション・サーバーをインストールするときに、同一のポート範囲を予約できなければなりません。個々のパーティション・サーバー上でポート範囲を解放する必要があります。

このタスクは、インスタンス所有データベース・パーティション・サーバーをインストールしてから、なおかつ参加データベース・パーティション・サーバーをインストールする前に実行してください。

前提条件:

services ファイルに変更を加えるには、root 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、参加コンピューター上のポート範囲の可用性を検査します。

1. /etc/services ディレクトリーにある services ファイルをオープンします。
2. DB2 高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) 用に予約されたポートを探し出します。項目は以下のように表示されるはずです。

```
DB2_db2inst1          60000/tcp
DB2_db2inst1_1       60001/tcp
DB2_db2inst1_2       60002/tcp
DB2_db2inst1_END     60003/tcp
```

DB2 は 60000 以降の最初の 4 つの使用可能なポートを予約します。

3. それぞれの参加コンピューター上で、services ファイルをオープンし、基本コンピューターのサービス・ファイルにある、DB2 FCM に予約されたポートが使用中でないかを確認します。
4. 必要なポートが参加コンピューターで使用中である場合は、すべてのコンピューターで使用可能なポート範囲を識別し、基本コンピューターのサービス・ファイルも含めて、それぞれのサービス・ファイルを更新します。

関連概念:

- 86 ページの『高速コミュニケーション・マネージャー (UNIX)』

関連タスク:

- 145 ページの『応答ファイルを使用した、参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 151 ページの『DB2 ノード構成ファイル - db2nodes.cfg (UNIX)』

応答ファイルを使用した、参加コンピューター上でのデータベース・パーティション・サーバーのインストール (UNIX)

このタスクでは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して作成した応答ファイルを使用して、参加コンピューターにデータベース・パーティション・サーバーをインストールします。

前提条件:

- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、参加コンピューター上に DB2 をインストールし、参加コンピューターにインストールするための応答ファイルを作成していること。
- 参加コンピューターに対して root 権限を持っている必要があります。

手順:

以下のようにして、応答ファイルを使用して、追加のデータベース・パーティション・サーバーをインストールします。

1. パーティション・データベース環境に参加するコンピューターに、root としてログオンします。
2. DB2 製品 CD-ROM の内容をコピーしたディレクトリーに変更します。

```
cd /db2home/db2cdrom
```

3. 以下のように **./db2setup** コマンドを入力します。

```
./db2setup -r /responsefile_directory/response_file_name
```

この例では、応答ファイル `AddPartitionResponse.file` を `/db2home` ディレクトリーに保管しているので、コマンドは以下ようになります。

```
./db2setup -r /db2home/AddPartitionResponse.file
```

4. インストールが完了したならば、ログ・ファイルにあるメッセージをチェックします。

インストール・ログ `db2setup.his`、`db2setup.log`、および `db2setup.err` は、デフォルトでは `/tmp` ディレクトリー中に入れられます。ログ・ファイルの場所を指定できます。

`db2setup.log` ファイルは、エラーを含むすべての DB2 インストール情報をキャプチャーします。 `db2setup.his` はマシン上のすべての DB2 インストール内容を記録します。 DB2 は `db2setup.log` ファイルを `db2setup.his` ファイルに付加します。 `db2setup.err` ファイルは、Java によって戻されるエラー出力 (例外やトラブル情報など) をキャプチャーします。

それぞれのコンピューターにログオンして、応答ファイル・インストールを実行する必要があります。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。 DB2 インフォメーション・セン

ターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれていま
す。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センター
のインストール (UNIX)』を参照してください。

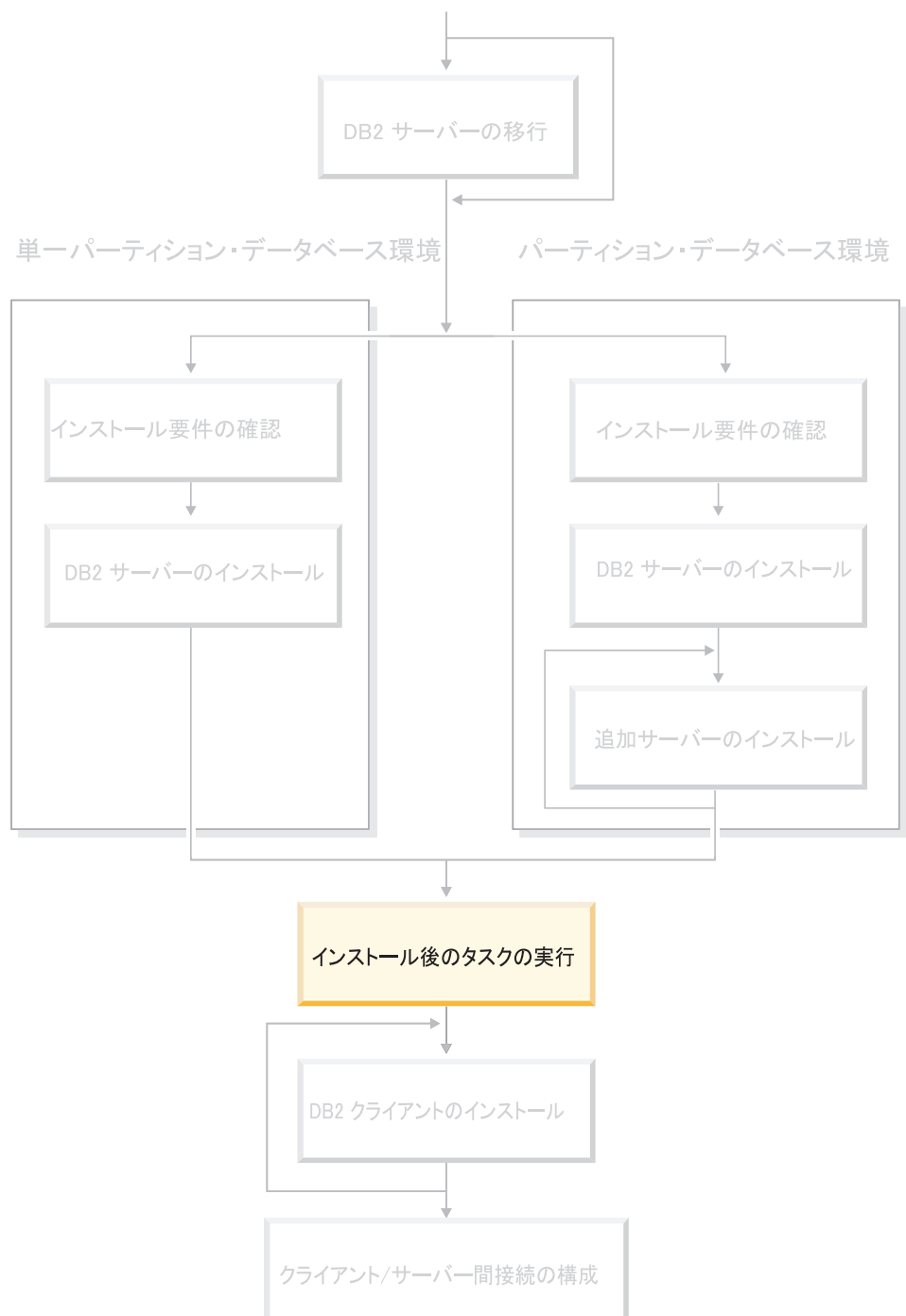
関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 135 ページの『パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (UNIX)』

第 4 部 インストール後のタスク



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 11 章 DB2 UDB のインストール後

通知と連絡先のリストのセットアップ

DB2 がデータベースの正常性に関して読者や他のユーザーに連絡を取るようするには、通知と連絡先のリストをセットアップする必要があります。この作業を DB2 のインストール中に行わなかった場合は、これらのリストを手動でセットアップできます。

手順:

通知と連絡先のリストをセットアップするには、以下のようになります。

1. インストール・プロセスで SMTP サーバーがセットアップされなかった場合は、以下のコマンドを使用して手動で構成できます。

```
db2 update admin cfg using smtp_server host1
```

host1 は、電子メール通知で使用される SMTP サーバーの TCP/IP ホスト名を表します。

2. 連絡先情報をリモートの DB2 Administration Server (DAS) に位置指定したい場合は、以下のコマンドを使用して contact_host パラメーターを指定できます。

```
db2 update admin cfg using contact_host host2
```

host2 は、DAS の TCP/IP ホスト名を表します。contact_host パラメーターを指定しないと、DAS は連絡先情報がローカルであると想定します。

3. 以下のコマンドを使用して、スケジューラーをオンにします。

```
db2 update admin cfg using sched_enable on
```

4. これらの変更内容を有効にするには、以下のコマンドを使用して、DAS を再始動する必要があります。

```
db2admin stop  
db2admin start
```

5. コントロール・センターで、「タスク」バーの「連絡先」アイコンをクリックします。「システム名」を選択してから、「連絡先の追加」をクリックします。連絡先情報を入力してから、「OK」を押します。タスク・センターを使用して新しい連絡先を追加することもできます。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2admin - DB2 Administration Server コマンド』

パスワードの規則と保守

パスワードを選択する際には、以下の点に注意してください。

- UNIX[®] では、最大 8 文字のパスワードを指定できます。
- Windows[®] では、最大 14 文字のパスワードを指定できます。

パスワードの保守タスクの実行が必要となることがあります。そのようなタスクはサーバーが必要であり、その際には、サーバー環境で作業できないかまたは、十分に作業ができないユーザーが多数生じるため、これらのタスクを実行することは、大きな挑戦となることがあります。

DB2[®] UDB は、必ずしもサーバーに存在しなくても、パスワードを更新し確認することのできる手段を提供します。例えば、DB2 for OS/390[®] バージョン 5 は、ユーザー・パスワードの変更のために、以下の方式をサポートします。エラー・メッセージ SQL1404N「パスワードの有効期限が切れています。」を受け取った場合は、以下のように CONNECT ステートメントを使用してパスワードを変更します。

```
CONNECT TO <database> USER <userid> USING <password>
NEW <new_password> CONFIRM <new_password>
```

DB2 構成アシスタント (CA) の「パスワード変更」ダイアログを使用して、パスワードを変更することもできます。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『一般的な命名規則』

DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加

DB2 のインストールが正常に完了したら、ユーザーを DB2ADMNS または DB2USERS グループに追加して、それらのユーザーが DB2 にアクセスできるようにする必要があります。DB2 インストーラーは 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。

前提条件:

- DB2 のインストールが完了している必要があります。
- DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。

手順:

ユーザーを適切なグループに追加するには、以下の手順に従います。

1. 「ユーザーおよびパスワード管理 (Users and Passwords Manager)」ツールを起動します。
2. 追加するユーザー名をリストから選択します。
3. 「プロパティ (Properties)」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウで、「グループ・メンバーシップ (Group Membership)」タブをクリックします。
4. 「その他 (Other)」ラジオ・ボタンを選択します。
5. ドロップダウン・リストから適切なグループを選択します。

インストール時に新しいセキュリティー機能を有効にしない設定を選択した場合でも、インストール後に **db2secv82.exe** コマンドを実行することによって有効にすることができます。

db2secv82.exe コマンドを使用してこのセキュリティー機能を有効にした後、この設定を元に戻すには以下の 2 つの方法があります。

1. システムに変更を加えないうちに、 **db2secv82.exe** コマンドをすぐに再実行します。システムに何かの変更を加えた場合は、2 番目の方法を使用してください。
2. Everyone グループを DB2ADMNS および DB2USERS グループに追加します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2secv82 - Set permissions for DB2 objects コマンド』

DB2 ノード構成ファイル - db2nodes.cfg (UNIX)

このトピックでは、ノード構成ファイル (db2nodes.cfg) の形式について説明します。db2nodes.cfg ファイルを使用して、DB2 インスタンスに参加するデータベース・パーティション・サーバーを定義します。また、データベース・パーティション・サーバー通信に高速相互接続を使用する場合にも、db2nodes.cfg ファイルを使用して高速相互接続の IP アドレスまたはホスト名を指定します。

db2nodes.cfg ファイルの形式は以下のとおりです。

```
nodenum hostname logical port netname resourcesetname
```

nodenum、hostname、logical port、netname、および resourcesetname は以下に定義されます。

db2nodes.cfg ファイルの形式は、Windows と UNIX とで異なります。Windows では、この列は以下の形式です。

```
nodenumber hostname computername logical_port netname resourcesetname
```

nodenum 0 から 999 のユニーク番号。パーティション・データベース・システム内のデータベース・パーティション・サーバーを識別します。

パーティション・データベース・システムを拡大/縮小するには、それぞれのデータベース・パーティション・サーバーの項目を db2nodes.cfg ファイルに追加します。追加のデータベース・パーティション・サーバー用に選択する *nodenum* 値は、昇順になっていなければなりません。その順序内にギャップがあってもかまいません。ロジカル・パーティション・サーバーを追加する予定があって、ノードをこのファイル内に論理的にグループに分けて保管しておきたい場合、*nodenum* の値と値の間にギャップを置いてかまいません。

この項目は必須です。

hostname FCM で使用するための、そのデータベース・パーティション・サーバーの TCP/IP ホスト名。

この項目は必須です。

logical port データベース・パーティション・サーバー用の論理ポート番号を指定します。このフィールドは、論理データベース・パーティション・サーバーを実行するワークステーションで、個々のデータベース・パーティション・サーバーを指定するのに使います。

DB2 は、インストール時のパーティション間通信用に、 `etc/services` ファイル中でポート範囲 (60000 から 60003 など) を予約しています。 `db2nodes.cfg` 中のこの `logical_port` フィールドは、この範囲内のどのポートを特定の論理パーティション・サーバーに割り当てるのかを指定します。

このフィールド用の項目がない場合のデフォルト値は 0 です。ただし、 `netname` フィールドの項目を追加した場合、 `logical port` フィールドに番号を入力しなければなりません。

論理データベース・パーティションを使用する場合、指定する `logical port` 値は、 0 から開始し、ギャップを入れずに昇順にしなければなりません (例えば、 0,1,2)。

さらに、1 つのデータベース・パーティション・サーバーに `logical port` 項目を指定する場合、 `db2nodes.cfg` ファイルにリストされているそれぞれのデータベース・パーティション・サーバーごとに、 `logical port` を指定する必要があります。

このフィールドがオプションであるのは、論理データベース・パーティションや高速相互接続を使用しない 場合だけです。

netname FCM 通信での高速相互接続のホスト名または IP アドレスを指定します。

このフィールドの項目を指定すると、データベース・パーティション・サーバー相互の通信 (**db2start**、 **db2stop**、 および **db2_all** コマンドで起動した通信を除く) は、高速相互接続を通して処理されます。

このパラメーターが必要なのは、データベース・パーティションの通信に高速相互接続を使用する場合だけです。

resourcesetname

`resourcesetname` は、ノードを開始するオペレーティング・システム・リソースを定義します。 `resourcesetname` は、プロセス類縁性をサポートし、MLN で使用され、ストリング・タイプのフィールドが備えられ、以前は `quadname` と呼ばれていました。

このパラメーターは AIX、HP-UX、および Solaris オペレーティング環境上だけでサポートされています。

この概念は、AIX 5.2 では「リソース・セット」と呼ばれ、Solaris オペレーティング環境では「プロジェクト」と呼ばれています。リソース管理について詳しくは、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。

HP-UX では、 `resourcesetname` パラメーターは PRM グループの名前です。詳しくは、HP から「HP-UX Process Resource Manager User Guide (B8733-90007)」を参照してください。

Windows オペレーティング・システムでは、論理ノードのプロセス類縁性は、`db2processor` レジストリー変数で定義できます。システム環境変数については、関連リンクを参照してください。

`resourcesetname` パラメーターを使用する場合には、`netname` パラメーターの指定が必要です。

構成の例:

以下の構成例を参考にして、ユーザーの環境に適切な構成を判別してください。

1 台のコンピューター、4 つのデータベース・パーティション・サーバー

クラスター化された環境を使用しておらず、`ServerA` という 1 つの物理ワークステーション上に、4 つのデータベース・パーティション・サーバーを設けようとした場合、`db2nodes.cfg` ファイルを以下のように更新します。

0	ServerA	0
1	ServerA	1
2	ServerA	2
3	ServerA	3

2 台のコンピューター、1 台のコンピューターにつき 1 つのデータベース・パーティション・サーバー

`ServerA` および `ServerB` という 2 つの物理ワークステーションを、パーティション・データベース・システムに組み込む場合、以下のように `db2nodes.cfg` ファイルを更新します。

0	ServerA	0
1	ServerB	0

2 台のコンピューター、1 台のコンピューター上に 3 つのデータベース・パーティション・サーバー

`ServerA` および `ServerB` という 2 つの物理ワークステーションをパーティション・データベース・システムに組み込む場合に、`ServerA` が 3 つのデータベース・パーティション・サーバーを実行していれば、以下のように `db2nodes.cfg` ファイルを更新します。

4	ServerA	0
6	ServerA	1
8	ServerA	2
9	ServerB	0

2 台のコンピューター、高速スイッチを持つ 3 つのデータベース・パーティション・サーバー

`ServerA` および `ServerB` という 2 つのコンピューターをパーティション・データベース・システムに組み込む (`ServerB` は、2 つのデータベース・パーティション・サーバーを実行中) 場合に、`switch1` および `switch2` という高速相互接続を使いたければ、以下のように `db2nodes.cfg` ファイルを更新します。

0	ServerA	0	switch1
1	ServerB	0	switch2
2	ServerB	1	switch2

`resourcename` の使用例:

以下の例では、以下の制約事項が適用されます。

- この例は、構成中に高速相互接続がない場合の `resourcename` の使用法を示しています。
- `netname` は 4 つ目の列で、スイッチ名がなく `resourcename` を使用したい場合は、この列に `hostname` も指定できます。 `resourcename` を定義する場合は、5 つ目のパラメーターになります。リソース・グループ仕様は、 `db2nodes.cfg` ファイル中の 5 つ目の列以外にすることはできません。したがって、リソース・グループを指定する場合は、4 つ目の列も入力しなければなりません。4 つ目の列は高速スイッチが対象になっています。
- 高速スイッチがないか使用しない場合には、 `hostname` を入力しなければなりません (2 つ目の列と同じ)。つまり、DB2 UDB は、 `db2nodes.cfg` ファイル中の列のギャップ (または相互交換) をサポートしていません。すでにこの制約事項は先頭 3 列に適用されていましたが、現在は 5 つの列すべてに適用されています。

AIX の例:

AIX 5.2 の場合にリソース・セットをセットアップする方法の例を示します。

この例では、1 つの物理ノードに、32 のプロセッサと 8 つの論理データベース・パーティション (MLN) があります。この例では、個々の MLN にプロセス類縁性を備える方法を示します。

1. `/etc/rset` 中にリソース・セットを定義します。

```

DB2/MLN1:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00000,sys/cpu.00001,sys/cpu.00002,sys/cpu.00003

DB2/MLN2:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00004,sys/cpu.00005,sys/cpu.00006,sys/cpu.00007

DB2/MLN3:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00008,sys/cpu.00009,sys/cpu.00010,sys/cpu.00011

DB2/MLN4:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00012,sys/cpu.00013,sys/cpu.00014,sys/cpu.00015

DB2/MLN5:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00016,sys/cpu.00017,sys/cpu.00018,sys/cpu.00019

DB2/MLN6:
  owner      = db2inst1
  group      = system
  perm       = rwr-r-
  resources  = sys/cpu.00020,sys/cpu.00021,sys/cpu.00022,sys/cpu.00023

DB2/MLN7:
  owner      = db2inst1
  group      = system

```

```
perm      = rwr-r-
resources = sys/cpu.00024,sys/cpu.00025,sys/cpu.00026,sys/cpu.00027
```

```
DB2/MLN8:
owner     = db2inst1
group    = system
perm     = rwr-r-
resources = sys/cpu.00028,sys/cpu.00029,sys/cpu.00030,sys/cpu.00031
```

2. コマンド `vmo -p -o memory_affinity=1` を入力して、メモリー類縁性を使用可能にします。

3. リソース・セットを使用するインスタンス許可を付与します。

```
chuser capabilities=CAP_BYPASS_RAC_VMM,CAP_PROPAGATE,CAP_NUMA_ATTACH db2inst1
```

4. `db2nodes.cfg` 中に 5 つ目の列としてリソース・セット名を追加します。

```
1 regatta 0 regatta DB2/MLN1
2 regatta 1 regatta DB2/MLN2
3 regatta 2 regatta DB2/MLN3
4 regatta 3 regatta DB2/MLN4
5 regatta 4 regatta DB2/MLN5
6 regatta 5 regatta DB2/MLN6
7 regatta 6 regatta DB2/MLN7
8 regatta 7 regatta DB2/MLN8
```

HP-UX の例:

この例は、4 つの CPU と 4 つの MLN のあるマシン上で PRM グループを使用して CPU を共用し、MLN 当たり 24% の CPU を設定し、4% を他のアプリケーション用に残しておく方法を示しています。DB2 インスタンス名は `db2inst1` です。

1. `/etc/prmconf` の GROUP セクションを編集します。

```
OTHERS:1:4::
db2prm1:50:24::
db2prm2:51:24::
db2prm3:52:24::
db2prm4:53:24::
```

2. `/etc/prmconf` にインスタンス所有者項目を追加します。

```
db2inst1::::OTHERS,db2prm1,db2prm2,db2prm3,db2prm4
```

3. 以下のコマンドを入力し、グループを初期設定して CPU マネージャーを使用可能にします。

```
prmconfig -i
prmconfig -e CPU
```

4. 5 つ目の列として PRM グループを `db2nodes.cfg` に追加します。

```
1 voyager 0 voyager db2prm1
2 voyager 1 voyager db2prm2
3 voyager 2 voyager db2prm3
4 voyager 3 voyager db2prm4
```

対話式 GUI ツール `xprm` を使用して PRM の構成 (ステップ 1 から 3) を行うこともできます。

Solaris オペレーティング環境の例:

Solaris バージョン 9 の場合にプロジェクトをセットアップする方法の例を示します。

この例では、1つの物理ノードに8つのプロセッサがあります。デフォルトのプロジェクト用に1つのCPUが使用され、Application Server用に3つのCPUが使用され、DB2用に4つのCPUが使用されます。インスタンス名はdb2inst1です。

1. エディターを使用して、リソース・プール構成ファイルを作成します。この例では、ファイルの名前はpool.db2です。内容は以下のとおりです。

```
create system hostname
create pset pset_default (uint pset.min = 1)
create pset db0_pset (uint pset.min = 1; uint pset.max = 1)
create pset db1_pset (uint pset.min = 1; uint pset.max = 1)
create pset db2_pset (uint pset.min = 1; uint pset.max = 1)
create pset db3_pset (uint pset.min = 1; uint pset.max = 1)
create pset appsrv_pset (uint pset.min = 3; uint pset.max = 3)
create pool pool_default (string pool.scheduler="TS";
    boolean pool.default = true)
create pool db0_pool (string pool.scheduler="TS")
create pool db1_pool (string pool.scheduler="TS")
create pool db2_pool (string pool.scheduler="TS")
create pool db3_pool (string pool.scheduler="TS")
create pool appsrv_pool (string pool.scheduler="TS")
associate pool pool_default (pset pset_default)
associate pool db0_pool (pset db0_pset)
associate pool db1_pool (pset db1_pset)
associate pool db2_pool (pset db2_pset)
associate pool db3_pool (pset db3_pset)
associate pool appsrv_pool (pset appsrv_pset)
```

2. 以下のように、/etc/project ファイルを編集してDB2プロジェクトとappsrvプロジェクトを追加します。

```
system:0::::
user.root:1::::
noproject:2::::
default:3::::
group.staff:10::::
appsrv:4000:App Serv project:root::project.pool=appsrv_pool
db2proj0:5000:DB2 Node 0 project:db2inst1,root::project.pool=db0_pool
db2proj1:5001:DB2 Node 1 project:db2inst1,root::project.pool=db1_pool
db2proj2:5002:DB2 Node 2 project:db2inst1,root::project.pool=db2_pool
db2proj3:5003:DB2 Node 3 project:db2inst1,root::project.pool=db3_pool
```

3. リソース・プールを作成します: # poolcfg -f pool.db2
4. リソース・プールをアクティブにします: # pooladm -c
5. db2nodes.cfg ファイル中に5つ目の列としてプロジェクト名を追加します。

```
0 hostname 0 hostname db2proj0
1 hostname 1 hostname db2proj1
2 hostname 2 hostname db2proj2
3 hostname 3 hostname db2proj3
```

関連タスク:

- 157 ページの『ノード構成ファイルの更新 (UNIX)』
- 144 ページの『参加コンピューター上のポート範囲の可用性の検査 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『システム環境変数』

ノード構成ファイルの更新 (UNIX)

ノード構成ファイル (db2nodes.cfg) は、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリにあります。これには、どのサーバーがデータベース・パーティション環境中のインスタンスに参加するかを DB2 に知らせる構成情報が入っています。パーティション・データベース環境にあるそれぞれのインスタンスごとに、db2nodes.cfg ファイルがあります。

db2nodes.cfg ファイルには、インスタンスに参加するそれぞれのサーバーごとに 1 つの項目がなければなりません。インスタンスを作成すると、db2nodes.cfg ファイルが自動的に作成され、インスタンス所有のサーバーの項目が追加されます。

例えば、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インスタンスを作成した場合は、インスタンス所有サーバー ServerA 上で、db2nodes.cfg ファイルが以下のように更新されます。

```
0      ServerA      0
```

このタスクは、db2nodes.cfg ファイルを更新して、参加コンピューターのための項目を組み込むためのステップを提供します。

前提条件:

- 参加コンピューターのすべてに DB2 UDB がインストールされていなければなりません。
- 基本コンピューター上に DB2 インスタンスが存在していなければなりません。
- ユーザーは SYSADM 権限を持つユーザーでなければなりません。
- データベース・パーティション・サーバーの相互通信に高速スイッチを使用する場合、またはご使用のパーティション構成に論理データベース・パーティション・サーバーがある場合には、DB2 ノード構成ファイルのトピックにある構成の例、および db2nodes.cfg のファイル・フォーマットについての情報をもう一度検討してください。

制約事項:

『手順』のステップで使用されているホスト名は、完全修飾ホスト名でなければなりません。

手順:

以下に示すステップを実行して、db2nodes.cfg ファイルを更新します。

- インスタンス所有者としてログオンします。(この例では、db2inst1 がインスタンス所有者)
- 以下のコマンドを入力して、DB2 インスタンスが停止することを確認します。

```
INSTHOME/sql1lib/adm/db2stop
```

INSTHOME は、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリです (db2nodes.cfg ファイルは、インスタンスの実行中はロックされ、インスタンスの停止時にしか編集できません)。

例えば、ご使用のインスタンス・ホーム・ディレクトリが /db2home/db2inst1 である場合には、以下のコマンドを入力します。

```
/db2home/db2inst1/sqllib/adm/db2stop
```

- それぞれの DB2 インスタンスの項目を、`.rhosts` ファイルに追加します。以下の内容を追加して、ファイルを更新します。

```
<hostname> <db2instance>
```

`<hostname>` はデータベース・サーバーの TCP/IP ホスト名で、`<db2instance>` はデータベース・サーバーへのアクセスに使用するインスタンスの名前です。

- 個々の参加サーバーの項目を、`db2nodes.cfg` ファイルに追加します。まず最初に `db2nodes.cfg` ファイルを表示すると、以下のような項目があるはずです。

```
0 ServerA 0
```

この項目には、データベース・パーティション・サーバー番号 (ノード番号)、データベース・パーティション・サーバーが常駐するサーバーの TCP/IP ホスト名、およびデータベース・サーバー・パーティションの論理ポート番号が含まれています。

インストールの概要で説明された、4 つのコンピューターとそれぞれのコンピューターに 1 つのデータベース・パーティション・サーバーのある、パーティション構成をインストールする場合には、`db2nodes.cfg` が更新されて、以下のように表示されるはずです。

```
0 ServerA 0
1 ServerB 0
2 ServerC 0
3 ServerD 0
```

- `db2nodes.cfg` ファイルの更新が完了してから、`INSTHOME/sqllib/adm/db2start` コマンドを入力します (`INSTHOME` は、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリー)。例えば、ご使用のインスタンス・ホーム・ディレクトリーが `/db2home/db2inst1` である場合には、以下のコマンドを入力します。

```
/db2home/db2inst1/sqllib/adm/db2start
```

- ログアウトします。

関連資料:

- 151 ページの『DB2 ノード構成ファイル - `db2nodes.cfg` (UNIX)』

データベース・パーティション・サーバーの相互通信の使用可能化 (UNIX)

このタスクは、パーティション・データベース・システムに参加するデータベース・パーティション・サーバーの相互通信を使用可能にする方法について説明します。データベース・パーティション・サーバーの相互通信は、高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) によって処理されます。FCM を使用可能にするには、ポートまたはポート範囲を、パーティション・データベース・システム内のそれぞれのコンピューター上の `/etc/services` ファイルに入れて保管する必要があります。

前提条件:

`root` 権限を付与されたユーザー ID がなければなりません。

制約事項:

このタスクは、参加コンピューター上でのみ実行する必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用してインスタンスを作成すると、ポート範囲が自動的に基本 (インスタンス所有) コンピューターに保管されます。

手順:

以下のようにして、パーティション・データベース環境でサーバー間の通信を使用可能にします。

1. root 権限を持つユーザーとして、基本コンピューター (インスタンス所有のコンピューター) にログオンします。
2. /etc/services ファイルに保管されているデフォルトのポート範囲を参照します。基本構成に加えて、FCM ポートは以下のようにになっているはずで

```
db2inst1          50000/tcp
#Add FCM port information
DB2_db2inst1      60000/tcp
DB2_db2inst1_1    60001/tcp
DB2_db2inst1_2    60002/tcp
DB2_db2inst1_END  60003/tcp
```

デフォルトでは、60000 以上の最初の 4 つの使用可能なポートが予約されています。これらのポートは、インスタンス所有のデータベース・パーティション・サーバー用に 1 つ、論理データベース・パーティション・サーバー (インストール完了後にコンピューターに追加するよう選択できる) 用に 3 つです。

DB2 ポート項目は、以下のような形式を使用します。

```
DB2_instance_name port_number
```

各要素の意味は以下のとおりです。

- *instance_name* は、パーティション・インスタンスの名前です。
 - *port_number* は、データベース・パーティション・サーバーの通信用に予約するポート番号です。
3. 順にそれぞれの参加コンピューターに root ユーザーとしてログオンし、同一の項目を /etc/services ファイルに追加します。

注釈 ID を使って、それぞれの項目を記述する注釈を追加することができます。例えば、以下のようにします。

```
DB2_db2inst1      60000/tcp # instance-owning partition port
DB2_db2inst1_1    60001/tcp # logical partition port
DB2_db2inst1_2    60002/tcp # logical partition port
DB2_db2inst1_END  60003/tcp # logical partition port
```

関連概念:

- 86 ページの『高速コミュニケーション・マネージャー (UNIX)』

関連資料:

- 151 ページの『DB2 ノード構成ファイル - db2nodes.cfg (UNIX)』

リモート・コマンド実行の使用可能化 (UNIX)

リモート・コマンドを実行するには、単一パーティション環境とパーティション・データベース環境の両方で、`.rhosts` ファイルを更新しなければなりません。

パーティション・データベース・システムにおいては、各データベース・パーティション・サーバーは、インスタンスに参加している他のすべてのデータベース・パーティション・サーバー上で、リモート・コマンドを実行する権限を持っていないければなりません。この権限は、インスタンスのホーム・ディレクトリーにある、`.rhosts` ファイルを更新することによって付与できます。インスタンスのホーム・ディレクトリーは共用 DB2 ホーム・ファイル・システム上にあるので、`.rhosts` ファイルは 1 つだけ必要です。

前提条件:

- root 権限を持っている必要があります。
- それぞれの参加コンピューターのホスト名を知っている必要があります。
- インスタンス所有者のユーザー名を知っている必要があります。

手順:

1. root 権限を持つユーザーとしてログオンします。
2. `.rhosts` ファイルをインスタンス・ホーム・ディレクトリーに作成します。例えば、ご使用のインスタンス・ホーム・ディレクトリーが `/db2home/db2inst1` である場合には、以下のコマンドを入力することによって、テキスト・エディターを使用して `.rhosts` ファイルを作成することができます。

```
vi /db2home/db2inst1/.rhosts
```

3. 基本コンピューターも含めて、それぞれのコンピューターの項目を `.rhosts` ファイルに追加します。`.rhosts` ファイルのフォーマットは以下のとおりです。

```
hostname instance_owner_user_name
```

システムによっては、長いホスト名を指定する必要が生じる場合もあります (例えば `ServerA.yourdomain.com`)。ホスト名項目を `.rhosts` ファイルに追加する前に、`/etc/hosts` および `/etc/resolv.conf` ファイルのホスト名が解決できることを確認してください。

`INSTHOME/.rhosts` ファイルには、以下のような項目が含まれているはずですが。

```
ServerA.yourdomain.com db2inst1
ServerB.yourdomain.com db2inst1
ServerC.yourdomain.com db2inst1
ServerD.yourdomain.com db2inst1
```

それぞれのホスト名を 1 つ 1 つ指定する代わりに、以下の項目を `.rhosts` ファイルに指定することができます。ただし、このアクションはセキュリティー・リスクがある可能性があるため、テスト環境でのみ行うべきです。

```
+ db2inst1
```

高速スイッチ (`netname`) を `db2nodes.cfg` ファイルで指定した場合には、それぞれのコンピューターの `netname` 項目も `.rhosts` ファイルに追加する必要があります。

ます。 netname 値は、db2nodes.cfg ファイルの 4 番目の列に指定します。高速スイッチ (netname) 項目を持つ .rhosts ファイルは、以下のようになります。

```
ServerA.yourdomain.com db2inst1
ServerB.yourdomain.com db2inst1
ServerC.yourdomain.com db2inst1
ServerD.yourdomain.com db2inst1
Switch1.yourdomain.com db2inst1
Switch2.yourdomain.com db2inst1
Switch3.yourdomain.com db2inst1
Switch4.yourdomain.com db2inst1
```

.rhosts ファイルを使用する代わりに、/etc/hosts.equiv ファイルを使用することができます。 /etc/hosts.equiv ファイルには、.rhosts ファイルとまったく同じ項目が入りますが、それらはそれぞれのコンピューター上で作成する必要があります。

.rhosts ファイルまたは /etc/hosts.equiv ファイルについては、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。

コントロール・センター管理の使用可能化 (UNIX)

パーティション・データベース・システムを管理するのにコントロール・センターを使用するには、まず、すべてのコンピューター上で DB2 Administration Server が始動されていなければなりません。

手順: 以下のようにして、パーティション・データベース・システムのコントロール・センター管理を使用可能にします。

それぞれのコンピューターで **DB2 Administration Server** を始動する

1. 順にそれぞれのコンピューター (ServerA、ServerB、ServerC、ServerD) に、DB2 Administration Server ユーザーとしてログオンします。この例では、db2as が DAS ユーザーです。
2. 以下に示すコマンドを入力して、DB2 Administration Server を始動します。

```
/DASHOME/das/bin/db2admin start
```

DASHOME は、DB2 Administration Server のホーム・ディレクトリーです。この例では、*DASHOME* が /db2home/db2as です。

最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)

DB2 フィックスパックは、IBM でのテストの際に検出された問題に対する更新およびフィックス (プログラム診断依頼書 (APAR)) と、顧客から報告された問題のフィックスから成ります。どのフィックスパックにも、フィックスの内容を説明した APARLIST.TXT という表題の資料が添付されています。

フィックスパックは累積されます。その意味は、ある任意のバージョンの DB2 の最新のフィックスパックには、同じバージョンの DB2 のそれまでのフィックスパ

ックを更新した内容がすべて入っているということです。DB2 の実行環境を最新のフィックスパック・レベルに保って、操作で問題が生じないようにすることをお勧めします。

パーティション ESE システムにフィックスパックをインストールするときは、システムをオフラインにして、すべての参加コンピューターに同じフィックスパックをインストールする必要があります。

前提条件:

各フィックスパックにはそれぞれ固有の前提条件があります。詳細は、フィックスパックに付属している FixPak Readme を参照してください。

制約事項:

DB2 Universal Database のインストール時に共通基準認証構成をセットアップする場合は、フィックスパックをインストールしないでください。フィックスパックは共通基準の準拠に関して評価されていないので、フィックスパックをインストールすると構成は準拠しなくなります。

手順:

1. 最新の DB2 フィックスパックは、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> にある IBM DB2 UDB and DB2 Connect オンライン・サポートからダウンロードしてください。各フィックスパックには、リリース・ノートと Readme が入っています。Readme には、フィックスパックのインストール方法の解説が述べられています。
2. フィックスパックをインストールします。
3. UNIX システムでは、**db2iupdt** コマンドを実行してインスタンスを更新します。

関連概念:

- 257 ページの『DB2 Universal Database 製品の共通基準認証』

関連タスク:

- 162 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査』

インストールの検査 (Windows および UNIX)

コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査

サンプル・データベースを作成してから SQL コマンドを実行してサンプル・データを取り出すことで、インストール内容を検査することができます。

前提条件:

- サンプル・データベース・コンポーネントは、システムにインストールしなければならず、標準インストールの一部を成します。
- この場合、SYSADM 権限をもったユーザーが必要です。

手順:

インストール内容を検査するには、以下のようにします。

1. SYSADM 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. **db2start** コマンドを入力して、データベース・マネージャーを開始します。
3. **db2sampl** コマンドを入力して、SAMPLE データベースを作成します。

このコマンドは、処理に数分かかることがあります。完了メッセージはありません。コマンド・プロンプトが戻ると、プロセスは完了です。

SAMPLE データベースが作成されると、自動的にデータベース別名 SAMPLE としてカタログされます。

4. DB2 コマンド・ウィンドウで以下の DB2 コマンドを入力して SAMPLE データベースに接続し、部門 20 で働いているすべての従業員のリストを検索してから、データベース接続をリセットします。

```
db2 connect to sample
db2 "select * from staff where dept = 20"
db2 connect reset
```

インストールを検査し終わったら、SAMPLE データベースを除去してディスク・スペースを解放することができます。SAMPLE データベースをドロップするには、**db2 drop database sample** コマンドを入力します。

関連タスク:

- 165 ページの『ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの検査』

インスタンス所有コンピューター上のレジストリーへのアクセスの検査 (Windows)

参加コンピューターに DB2 をインストールした後、インスタンス所有コンピューター上のレジストリーにアクセスできるかどうかを検査することが必要です。この検査ステップは、すべての参加コンピューターから実行します。

前提条件:

DB2 UDB がインストールされていることが必要です。

手順:

インスタンス所有コンピューター上のレジストリーへのアクセスを検査するには、以下のようにします。

1. コマンド・プロンプトから、**regedit** コマンドを入力します。「レジストリ エディタ」ウィンドウがオープンします。
2. 「レジストリ」メニュー項目をクリックします。
3. 「ネットワーク レジストリへの接続」を選択します。
4. 「コンピューター名」フィールドにインスタンス所有コンピューターの名前を入力します。

情報が戻された場合は、インスタンス所有コンピューター上のレジストリーにアクセスしていることが正常に検査されました。

関連タスク:

- 135 ページの『パーティション・データベース環境でのインスタンス所有サーバーのインストール (UNIX)』

パーティション・データベース・サーバーのインストールの検査 (Windows)

DB2 サーバーのインストールが成功したかを検査するためには、サンプル・データベースを作成し、SQL コマンドを実行してサンプル・データを検索し、データがすべての参加データベース・パーティション・サーバーに分散されているかを確認します。

前提条件:

すべてのインストール・ステップを完了していること。

手順:

以下のようにして、SAMPLE データベースを作成します。

1. SYSADM 権限を持つユーザーとして、基本コンピューター (ServerA) にログオンします。
2. **db2sampl** コマンドを入力して、SAMPLE データベースを作成します。

このコマンドは、処理に数分かかることがあります。完了メッセージはありません。コマンド・プロンプトが戻ると、プロセスは完了です。

SAMPLE データベースが作成されると、自動的にデータベース別名 SAMPLE としてカタログされます。

3. **db2start** コマンドを入力して、データベース・マネージャーを開始します。
4. 以下の DB2 コマンドを DB2 コマンド・ウィンドウから入力して、SAMPLE データベースに接続し、部門 20 で作業しているすべての従業員のリストを検索します。

```
db2 connect to sample
db2 "select * from staff where dept = 20"
```

5. すべてのデータベース・パーティション・サーバーにデータが分散されたことを確認するため、DB2 コマンド・ウィンドウから以下のコマンドを入力します。

```
select distinct dbpartitionnum(empno) from employee;
```

出力では `employee` 表によって使用されるデータベース・パーティションをリストします。データベース内のパーティションの数と、`employee` 表が作成された表スペースによって使用されるパーティション・グループ内のパーティションの数によって、それぞれの出力は異なります。

インストールを検査し終わったら、SAMPLE データベースを除去してディスク・スペースを解放することができます。SAMPLE データベースをドロップするには、

db2 drop database sample コマンドを入力します。

ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの 検査

SAMPLE データベースからのデータにアクセスすることによって、DB2 サーバーのインストールが正常に完了したかを検査する必要があります。

前提条件:

- このタスクを実行するために、コントロール・センターおよびファースト・ステップをインストールしておく必要があります。ファースト・ステップは、DB2 セットアップ・ウィザードにグループ化されている、入門コンポーネントのパーツです。これは、標準インストールでは、そのパーツとしてインストールされますし、カスタム・インストールでは、その実行時に選択することができます。
- このタスクを実行するには、SYSADM または SYSCTRL 権限を持っている必要があります。

手順:

1. インストールを検査するために使うユーザー・アカウントで、システムにログオンします。サンプル・データベースを作成するときに使うドメイン・ユーザー・アカウントに、SYSADM または SYSCTRL 権限があることを確認します。
2. ファースト・ステップを開始します。
 - UNIX では、**db2fs** と入力します。
 - Windows では、**db2fs.bat** と入力します。
3. ファースト・ステップ・ランチパッドで「サンプル・データベースの作成」を選択し、「サンプル・データベースの作成」ウィンドウをオープンします。
4. 「サンプル・データベースの作成」ウィンドウで、以下から作成するデータベースを選択します。

インストールを検査するときには、DB2 UDB サンプル・データベースを使いません。データウェアハウス・サンプル・データベースは、ビジネス・インテリジェンス・チュートリアルで使用します。

注: データウェアハウス・サンプル・データベースは、基本ウェアハウス・コンポーネントをインストールした場合にのみ適用されます。

5. 「OK」をクリックします。

デフォルトでは、SAMPLE データベースは、DB2 がインストールされたドライブに作成されます。

このコマンドは、処理に数分かかることがあります。SAMPLE データベースの作成が完了したら、完了メッセージが表示されます。「OK」をクリックします。

6. データベースを作成したら、ファースト・ステップ・ランチパッドで「データベースの処理」を選択し、コントロール・センターを始動します。コントロール・センターを使用すると、異なるインスタンスおよびデータベース・オブジェクトで、管理タスクを実行することができます。

「コントロール・センター (Control Center)」画面の左側のペインで、オブジェクト・ツリーを展開し、SAMPLE データベースおよび SAMPLE データベース・オ

プロジェクトが見えるようにします。「表 (Tables)」オブジェクトを選択し、「コントロール・センター (Control Center)」画面の右側のペインに、SAMPLE データベース表が表示されるようにします。

インストールを検査し終わったら、SAMPLE データベースを除去してディスク・スペースを解放することができます。SAMPLE データベースをドロップするには、**db2 drop database sample** コマンドを入力します。

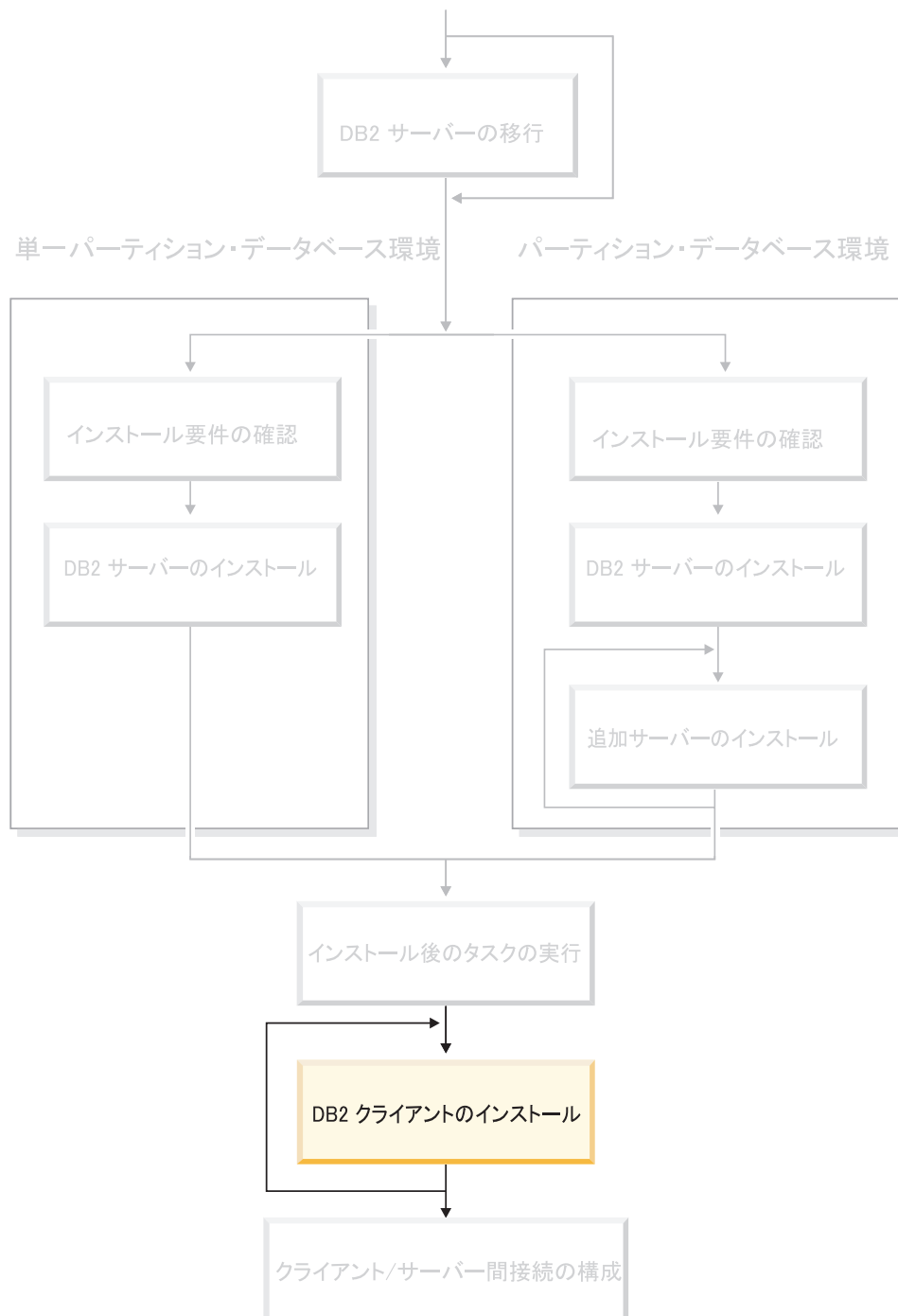
関連タスク:

- 162 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査』
- 「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』
- 「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2fs - 最初のステップ』

第 5 部 DB2 クライアントのインストール



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 12 章 DB2 クライアントのインストール (Windows)

クライアント要件

DB2 クライアントのインストール要件 (Windows)

Windows 上の DB2 クライアントのオペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を以下に示します。

オペレーティング・システム要件

以下のいずれかが必要です。

- Windows 98
- Windows ME
- Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a 以降を適用)
- Windows NT Server 4.0 ターミナル・サーバー・エディション (DB2 Run-Time Client のみサポート) (ターミナル・サーバー用に Service Pack 6 以降を適用)
- Windows 2000
- Windows XP (32 ビットおよび 64 ビット・エディション)
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット・エディション)

ソフトウェア要件

最新のオペレーティング・システム情報については、

<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を使用したい場合、Microsoft LDAP クライアントまたは IBM SecureWay LDAP クライアント V3.2.1 以降のいずれかが必要になります。インストールの前に、db2schex ユーティリティを使用してディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。このユーティリティはインストール・メディア上にあります。

Microsoft LDAP クライアントは、Windows ME、Windows 2000、

Windows XP、および Windows Server 2003 の各オペレーティング・システムに組み込まれています。

- データベースのバックアップとリストアに Tivoli Storage Manager 機能を使う場合には、Tivoli Storage Manager Client バージョン 4.2.0 以降が必要です。
 - 64 ビット Windows NT オペレーティング・システムの場合は、TSM クライアント API バージョン 5.1 が必須です。

- ご使用のオペレーティング・システムに IBM Antivirus プログラムがインストールされている場合には、これをオフにするかアンインストールしなければ DB2 インストールを完了することはできません。
- Application Development Client をインストールする場合は、SQL ストアード・プロシージャをビルドするための C コンパイラーが必要です。

通信要件

- 名前付きパイプまたは TCP/IP
- Windows 基本オペレーティング・システムは、名前付きパイプおよび TCP/IP 接続を提供します。

注: バージョン 8 では、データベースのリモート側での管理用に DB2 UDB がサポートするのは TCP/IP のみです。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

このトピックでは、DB2 のメモリー要件とディスク要件をリストします。

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になることがあります。

必須のソフトウェア、通信製品、および資料のために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 は 256 MB 以上の RAM を必要とします。DB2 GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される DB2 以外のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。

- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、SWAP スペースが RAM の 2 倍以上であることを確認してください。

DB2 クライアントのインストール (Windows)

ここでは、Windows オペレーティング・システム上での DB2 クライアントのインストール方法について説明します。

前提条件:

DB2 クライアントをインストールする前に、以下のことを確認してください。

- ご使用のシステムが、メモリー、ディスク・スペース、およびインストールの各要件をすべて満たしていること。
- インストールを実行できる以下のユーザー・アカウントがあること。

Windows 98、Windows ME

有効な Windows 98 または Windows ME ユーザー・アカウント。

Windows Terminal Server、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

Users グループなど、Guests グループよりも大きい権限を持つグループに属するユーザー・アカウント。

Users グループのユーザーとして、Windows 2000 サーバーと Windows Server 2003 へのインストールを行うには、Users が HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに書き込みアクセスができるようにレジストリー許可を変更しなければなりません。デフォルトの Windows 2000 および Windows Server 2003 環境では、Users グループのメンバーは HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに対して読み取りアクセス権しか持っていません。

制約事項:

バージョン 8 では、データベースのリモート側での管理用に DB2 UDB がサポートするのは TCP/IP のみです。

手順:

DB2 クライアントをインストールするには、以下のようになります。

1. インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントで、システムにログオンします。
2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. 適切な CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能によって、DB2 セットアップ・ウィザードが起動します。DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを開始します。

手動で DB2 セットアップ・ウィザードを呼び出して言語コードを指定すれば、デフォルトのシステム言語以外の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行

第 13 章 DB2 クライアントのインストール (UNIX)

DB2 クライアントの要件

DB2 クライアントのインストール要件 (AIX)

以下に、AIX 上の DB2 クライアントのための、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

ハードウェア要件

RISC System/6000

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

以下のいずれかが必要です。

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 11

バージョン 5.1.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

- 保守レベル 5、および推奨される保守パッケージ AIX 5100-04
および APAR IY46667

バージョン 5.2.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

保守レベル 2、および

並行入出力 (CIO) および直接入出力 (DIO) マウント・ボリューム
の場合:

APAR IY49129 および IY49346

JFS ファイルシステムの場合:

APAR IY48339

JFS2 ファイルシステムの場合:

APAR IY49304

Java の場合:

推奨される保守パッケージ AIX 5200-01 および APAR
IY46668

1000 より多くの **db2agent** を実行し、**32 ビット AIX** カーネルを
使用する場合:

APAR IY49885 および db2start の前か AIX ブート中に
"vmo -o pta_balance_threshold=0" を指定

以下の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 UDB を
インストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- X11.fnt.ucs.com (AIX Windows 共通フォント)

- x1C.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- アジア諸国の言語の場合、以下のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、以下のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- AIX バージョン 5.x では、以下のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x

AIX ファイル・セットは、

<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- Kerberos サポートの場合は、AIX V5.2 以降を実行している IBM Network Authentication Service クライアント V1.3 以降が必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サポートを使用するには、IBM SecureWay Directory Client V3.2.1 以降が必要です。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。AIX 基本オペレーティング・システムは、インストール時に選択されていれば TCP/IP 接続を備えています。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX)

HP-UX 上の DB2 クライアントのハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を以下に示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新した場合は、システムを再始動する必要があります。カーネル構成パラメーターは、`/etc/system` 中で設定されます。これらのパラメーターは、DB2 クライアントのインストール前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム

- HP Intel Itanium 2 プロセッサ

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- 以下をインストール済みの PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11)
 - 2003 年 6 月 GOLDBASE11i バンドル
 - 2003 年 6 月 GOLDAPPS11i バンドル
 - パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、PHCO_27434、および PHCO_29960
 - Java SDK 1.3.1 および 1.4 のパッチ。必要なパッチについては、
<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

DB2 Client は、パッチ PHKL_30065 をインストール済みの、Itanium ベースのシステム用の HP-UX バージョン 11i v2 (B.11.23) 上で実行することができます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合は、SQL ストアード・プロシージャをビルドするための C コンパイラが必要です。

通信要件

- TCP/IP は HP-UX 基本オペレーティング・システムで提供されます。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (Linux)

以下に、Linux 上の DB2 クライアントのための、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

カーネル構成パラメーターを更新する必要があることがあります。カーネル構成パラメーターは、`/etc/sysctl.conf` 中で設定されます。 `sysctl` コマンドを使用してこれらのパラメーターを設定して活動化することに関する情報は、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。

オペレーティング・システム要件

Linux のサポートされているレベルに関する最新の技術情報をチェックするには、ブラウザーで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

現在 DB2 Connect Enterprise Edition は Linux zSeries 64 ビットでサポートされています。

DB2 for Linux zSeries 31 ビットは、Linux zSeries 64 ビット・オペレーティング・システムでサポートされていません。Linux zSeries 64 ビット OS では「Linux zSeries 64 ビット OS 用 64 ビット DB2」イメージを使用し、Linux zSeries 31 ビット・オペレーティング・システムでは「Linux zSeries 31 ビット OS 用 31 ビット DB2」イメージを使用しなければなりません。

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。

Kerberos 認証の使用を計画している場合は、以下のファイルセットを含む Red Hat Enterprise Linux Advanced Server 2.1 (32 ビット Intel のみ) が必要です。

- krb5-libs
- krb5-workstation

通信要件

- TCP/IP。Linux 基本オペレーティング・システムは、インストール時に選択されていれば TCP/IP 接続を備えています。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)

Solaris オペレーティング環境での DB2 クライアントのハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を以下に示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新した場合は、システムを再始動する必要があります。カーネル構成パラメーターは /etc/system に設定されますが、DB2 クライアントを使用するために修正が必要な場合は、/etc/system に加えた変更を有効にするためにリブートが必要です。これらのパラメーターは、DB2 クライアントのインストール前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

Solaris SPARC ベースのコンピューター

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- Solaris のバージョン 7 以降
- Solaris Operating 環境のバージョン 7 には、以下のパッチが必要です。
 - Solaris 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10

- Solaris 7 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
- Solaris 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 8 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 9 (32 ビット)
- Solaris 9 (64 ビット)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側のパネルで「Patches」メニュー項目をクリックします。

さらに J2SE Solaris オペレーティング環境 Patch Cluster も必要です。

以下のソフトウェアは Solaris オペレーティング環境に DB2 クライアントをインストールするために必要です。

- SUNWlibC

ソフトウェア要件

- Kerberos のサポートの場合は、SEAM V1.0.1 を含む Solaris オペレーティング環境 8 以降が必要です。SEAM クライアントは、Solaris オペレーティング環境 8 Admin Pack に組み込まれています。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合は、SQL ストアード・プロシージャをビルドするための C コンパイラが必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。Solaris オペレーティング環境は TCP/IP 接続を備えています。

関連資料:

- 90 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

このトピックでは、DB2 のメモリー要件とディスク要件をリストします。

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になることがあります。

必須のソフトウェア、通信製品、および資料のために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 は 256 MB 以上の RAM を必要とします。DB2 GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される DB2 以外のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、SWAP スペースが RAM の 2 倍以上であることを確認してください。

DB2 クライアントのインストール (UNIX)

ここでは、UNIX 上で DB2 クライアントをインストールするステップを説明します。

前提条件:

UNIX 上での DB2 クライアントのインストールを開始する前に、以下のことが必要です。

- ご使用のシステムが、DB2 製品をインストールするのに必要なメモリー、ハードウェア、およびソフトウェア要件を満たしているか確認してください。
- Solaris オペレーティング環境に、または HP-UX 上に DB2 クライアントをインストールする場合は、カーネル構成パラメーターを更新してシステムを再始動する必要があります。

制約事項:

バージョン 8 では、データベースのリモート側での管理用に DB2 UDB がサポートするのは TCP/IP のみです。

手順:

カーネル構成パラメーターを更新してからシステムを開始 (Solaris オペレーティング環境と HP-UX では必要、Linux では推奨) した後に、DB2 クライアントをインストールできます。

UNIX 上に DB2 クライアントをインストールするには、以下のようにします。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. **cd /cdrom** コマンドを入力して CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。ここで */cdrom* は CD-ROM のマウント・ポイントです。
4. **./db2setup** コマンドを入力します。DB2 セットアップ・ウィザードが開始されます。
5. DB2 ランチパッドが開いたら、「製品のインストール (Install Products)」を選択します。
6. インストールしたいクライアントを選択します。
7. DB2 セットアップ・ウィザードのプロンプトに従って進みます。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。

インストールが完了すると、DB2 クライアントは *DB2DIR* ディレクトリーにインストールされます。*DB2DIR* は以下のとおりです。

AIX */usr/opt/db2_08_01*

Linux およびその他の **UNIX** オペレーティング・システム

/opt/IBM/db2/V8.1

DB2 クライアントをインストールした後は、リモート DB2 サーバーにアクセスするようにそのクライアントを構成する必要があります。

DB2 製品からローカル・コンピューター上またはネットワーク中の別のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにするには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が含まれています。『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』を参照してください。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

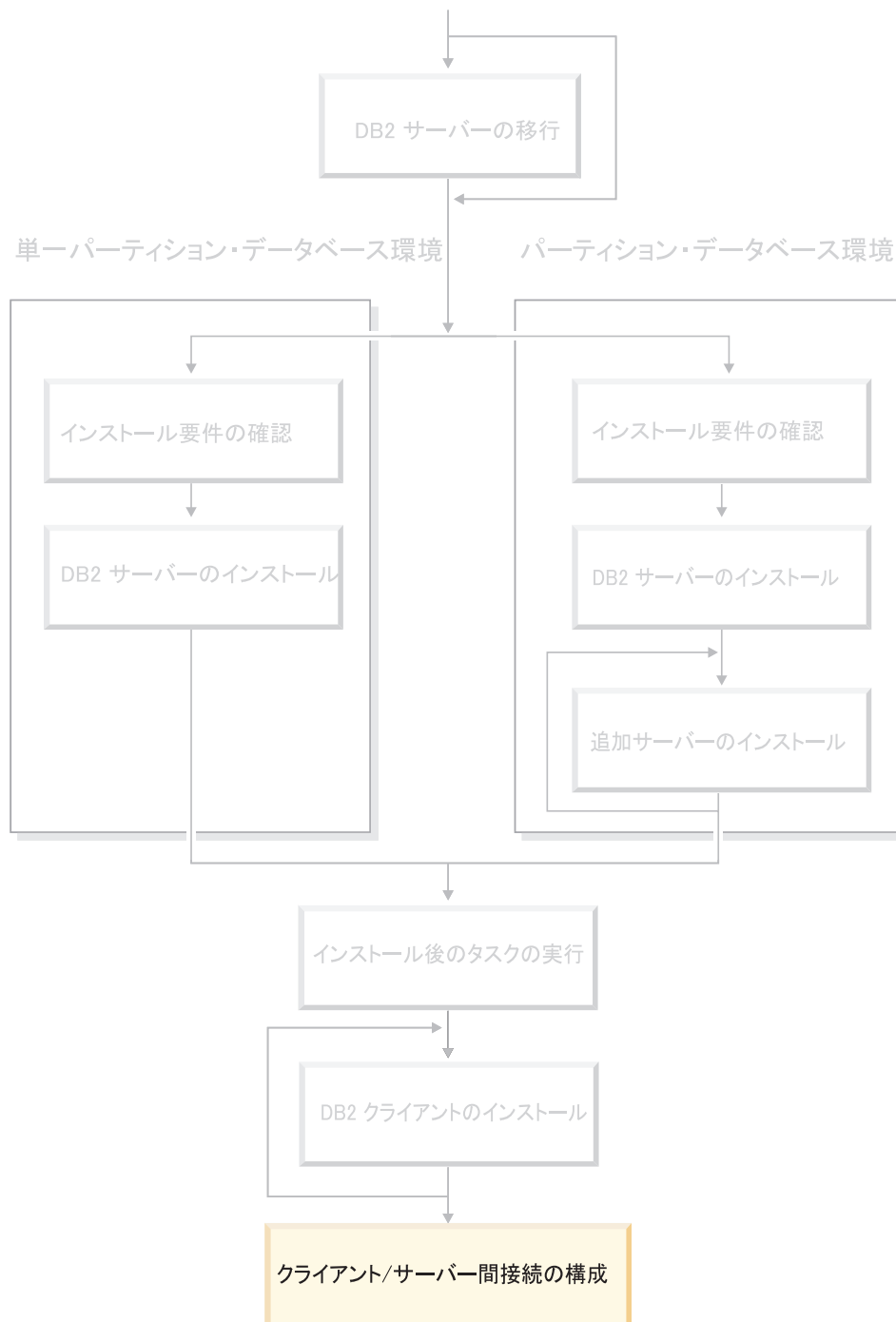
関連タスク:

- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 96 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)』
- 93 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』
- 187 ページの『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 95 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

第 6 部 クライアント/サーバー間接続の構成



この図は、本書全体の指針として役立ててください。
この図は特定のインストール・ステップを表すものではありません。
本書に記述されている情報をもとに、ユーザー自身の具体的なインストール計画を作成してください。

第 14 章 クライアント/サーバー・サポート

サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成

このセクションでは、クライアントおよびサーバー用の、サポートされている構成とサポートされていない構成を使用したシナリオについて説明します。

DB2 バージョン 7 クライアントから DB2 バージョン 8 サーバーへのローカル接続は、サポートされていません。DB2 バージョン 7 クライアントを使用して、同一マシン上で DB2 バージョン 8 インスタンスをローカル・ノードとしてカタログすることはできません。

以下の表は、DB2 クライアント用の標準構成サポートおよびゲートウェイ構成サポートを示しています。例えば、DB2 Universal Database バージョン 8 の 32 ビット・クライアントを使用している場合、バージョン 8 の 32 ビット・ゲートウェイを使用して DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーに接続することができます。

以下の表で、バージョン 7 クライアントに言及している箇所は、フィックスパック 7 以降のレベルであることが暗黙の合意になっています。フィックスパック 7 がインストールされていない DB2 クライアントはサポートされていません。

表 9. DB2 バージョン 7 およびバージョン 8 のクライアント/サーバー・マトリックス

DB2 クライアント	バージョン 7 の 32 ビット・サーバー UNIX [®] 、Windows [®] 、Linux	バージョン 7 の 64 ビット・サーバー UNIX	バージョン 8 の 32 ビット・サーバー UNIX、Windows、Linux	バージョン 8 の 64 ビット・サーバー UNIX、Windows、Linux
バージョン 7 (32 ビット)	あり	なし	あり (6)	あり (2,5,8)
バージョン 7 (64 ビット)	なし	あり	なし	あり (4,5)
バージョン 8 (32 ビット)	あり (1,7)	なし	あり	あり
バージョン 8 (64 ビット)	なし	あり (1,7)	あり	あり
AS/400 [™] 、iSeries [™] 、OS/390、zSeries [™] 、VSE、VM クライアント	あり	あり	あり (3)	あり (3)

注:

1. DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーは、DRDA アプリケーション・サーバー (AS) として構成される必要があります。バージョン 8 の 32 ビット・クライアントとバージョン 7 の 32 ビット・サーバーを併用している場

合、またはバージョン 8 の 64 ビット・クライアントとバージョン 7 の 64 ビットサーバーを併用する場合に、この必要があります。

2. DB2 バージョン 7 の 32 ビット Windows クライアントから DB2 バージョン 8 の 64 ビット Windows サーバーへの直接サポート (DB2 Connect™ ゲートウェイが介在しない) があります。しかし、他のプラットフォームでは、DB2 バージョン 7 の 32 ビット・クライアントからの直接サポートはありません。
3. TCP/IP のみサポートされます。SNA はサポートされていません。このサポートは、バージョン 8 サーバーと併用している AS/400、iSeries、OS/390、zSeries、VSE、および VM クライアントから利用できます。
4. Windows 以外のオペレーティング・システムでは、バージョン 7 の 64 ビット・クライアントは、DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーのみサポートしています。
5. バージョン 7 クライアントは、バージョン 8 の 64 ビット・サーバー上の SQL 要求のみサポートしています。ユーティリティまたは API 要求についてはサポートされていません。
6. バージョン 7 の 32 ビット・クライアントとバージョン 8 の 32 ビット・サーバーを併用している場合は、**AT NODE** 機能を使用している DB2 Universal Database ユーティリティはサポートされていません。この機能は、基本的にパーティション・データベース環境を管理するために使用されます。
7. バージョン 8 の 32 ビット・クライアントとバージョン 7 の 32 ビット・サーバーを併用している場合、またはバージョン 8 の 64 ビット・クライアントとバージョン 7 の 64 ビットサーバーを併用する場合には、DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーはフィックスパック 8 以降のレベルでなければなりません。**db2updv7** ユーティリティは、DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントからアクセス可能にするためにサーバー上で実行する必要があります。いったんこのユーティリティがデータベース上で実行されると、このデータベースは、以前のフィックスパック・レベルのインスタンスでは使用できません。
8. バージョン 7 の 32 ビット・クライアントとバージョン 8 の 64 ビット・サーバーを併用している場合、DB2 Connect バージョン 8 の 32 ビット中間ゲートウェイを使用する場合のみ、UNIX 上で DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーに接続できます。

関連概念:

- 7 ページの『DB2 クライアント』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『クライアント・サーバー通信のシナリオ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』

DB2 バージョン 8 における SNA サポートの制限

以下のサポートは、DB2[®] Universal Database バージョン 8 Enterprise Server Edition (ESE) for Windows[®] および UNIX[®] オペレーティング・システム、DB2 Connect[™] バージョン 8 Enterprise Edition (EE) for Windows および UNIX オペレーティング・システムからは削除されました。

- SNA を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) 機能は使用できません。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) を必要とするアプリケーションは、TCP/IP 接続を使用しなければなりません。TCP/IP を使用した、ホストまたは iSeries[™] データベース・サーバーへのマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) は、いくつかのリリースで使用可能になっています。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) サポートを必要とするホストまたは iSeries アプリケーションは、DB2 ESE バージョン 8 に付属する新機能の TCP/IP マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) サポートを使用することができます。
- DB2 UDB ESE または DB2 Connect EE サーバーは、SNA を使用したクライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 バージョン 8 フィックスパック 1 を使用すると、32 ビット・バージョンの AIX[®]、Solaris オペレーティング環境、HP-UX、および Windows アプリケーションが SNA を使用してホストまたは iSeries ベースのデータベース・サーバーにアクセスできるようになります。このサポートにより、アプリケーションは SNA を使用してホスト・データベースにアクセスできますが、1 フェーズ・コミットに限定されます。
- DB2 for z/OS[™] での Sysplex サポートは TCP/IP を使用してのみ利用可能です。Sysplex サポートは SNA 接続を使用しては提供されません。
- パスワード変更サポートは、ホスト・データベース・サーバーへの SNA 接続を使用しては利用できなくなりました。
- DB2 および DB2 Connect の次のバージョンでは、すべての SNA サポートがなくなります。

関連概念:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『DB2 Connect』

関連資料:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『DB2 Connect の製品オフライン』
- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『ホスト・データベース』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect のホストおよび iSeries サポート』

第 15 章 構成アシスタント (CA) による接続の構成

構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成

このトピックでは、構成アシスタント (CA) を使用して、ご使用の DB2 クライアントをリモート・データベースに接続する方法を説明します。構成アシスタントは、データベース接続および他のデータベース設定を構成するために使用できる、DB2 GUI ツールです。構成アシスタント (CA) は、DB2 の前のリリースでは、クライアント構成アシスタント (CCA) と呼ばれていました。

コマンド行プロセッサ (CLP) を使用してクライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

CA を、ご使用の DB2 クライアントにインストールする必要があります。CA は DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client のパーツとして使用可能です。

リモート・サーバーはインバウンド・クライアントの要求を受け入れるように構成する必要があります。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムは、インバウンド・クライアント接続のためにサーバー上のほとんどのプロトコルを検出し、そして構成します。

以下のいずれか 1 つの方式を使用して、データベースへの接続を構成できます。

- ディスカバリーを使用したデータベースへの接続
- プロファイルを使用したデータベースへの接続
- CA を使用した手動によるデータベースへの接続

どの方式を使用する必要があるか:

ディスカバリーを使用したデータベースへの接続

接続したいデータベースに関する情報がない場合は、この方式を使用してください。この方式は、ネットワークを検索し、使用可能なデータベースをすべてリストします。CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、サーバー上で DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

プロファイルを使用したデータベースへの接続

ターゲット・データベースにアクセスするのに必要な情報をすべて含むファイルがある場合は、この方式を使用してください。アクセス・プロファイル・ファイル中に指定されている複数のデータベースをカタログして接続する場合にも、この方式を使用できます。

手動によるデータベースへの接続

ターゲット・データベースに接続するのに必要な情報をすべて知っている場合は、この方式を使用してください。以下の情報を知っている必要があります。

- ターゲット・データベースのあるサーバーでサポートされている通信プロトコル
- サーバーのプロトコルにとって適切な通信パラメーター
- データベースの名前

関連タスク:

- 191 ページの『ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 190 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 188 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 193 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

データベース接続の構成

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成

接続したいデータベースについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方式は、コマンド行プロセッサを使用してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

構成アシスタントを使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、以下の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。
4. 「データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。

5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。「次へ」をクリックします。
6. 「**プロトコル (Protocol)**」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

ご使用のシステムに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「**データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)**」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 データベースに確立したい接続のタイプを選択できます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「**ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)**」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「**サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)**」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE か VM データベースの DBNAME を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「**注釈 (Comment)**」フィールドに入力できます。

「次へ」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないとなりません。
10. 「**ノード・オプションの指定 (Specify the node options)**」ウィンドウで、オペレーティング・システムを選択して、接続したいデータベース・システムのリモート・インスタンス名を入力します。
11. 「**システム・オプションの指定 (Specify the system options)**」ウィンドウで、システム名、ホスト名、およびオペレーティング・システムが正しいかどうかを確認します。オプションで、注釈を入力することができます。「次へ」をクリックします。
12. 「**セキュリティ・オプションの指定 (Specify the security options)**」ウィンドウで、認証に使用されるセキュリティ・オプションを指定します。
13. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「**終了 (Exit)**」を選択して、CA をクローズします。

関連タスク:

- 191 ページの『ディスクバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 190 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

- 200 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルを使用したデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システムでカタログされたデータベース情報が記述されています。

サーバー・プロファイルを使用して 1 つのデータベースに接続するには、以下のようになります。同時に複数のデータベースへの接続を構成する場合は、構成アシスタント (CA) のインポート機能を使用する必要があります。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

プロファイルを使用してデータベース接続を構成するには、以下の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。
4. 「プロファイルを使用する (Use a profile)」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「...」をクリックして、プロファイルを選択します。
6. 「ロード (Load)」をクリックして、プロファイル内のデータベースを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。「次へ」をクリックします。
9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録する必要があります。「ODBC 用にこのデータベースを登録 (Register this database for ODBC)」チェック・ボックスを選択します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
10. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」 の『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」 の『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

制約事項:

以下の場合、ディスカバリー機能はリモート・システムを検出できない可能性があります。

- Administration Server がリモート・システムで稼働していません。
- ディスカバリー機能がタイムアウトになっています。デフォルトでは、ディスカバリー機能は 10 秒間ネットワークを検索します。これは、リモート・システムを検出するために十分でない場合があります。DB2DISCOVERYTIME レジストリー変数を指定して、長い時間を指定することができます。
- ディスカバリー機能の実行されるネットワークが指定されていて、特定のリモート・システムにディスカバリー要求が到達しません。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードがオープンします。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。

「その他のシステム (Other Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。ネットワーク上のすべてのシステムのリストが表示されます。

6. インスタンスとデータベースのリストを展開して、追加したいデータベースを選択します。「次へ」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使用できるようになります。「クローズ (Close)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 188 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 190 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 200 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

第 16 章 コマンド行プロセッサ (CLP) の使用による接続の構成

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアントからリモート・データベース・サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

構成アシスタントを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

前提条件:

クライアントからサーバーへの接続を構成する前に、以下を行ってください。

- DB2 サーバーおよび DB2 クライアントで、通信を構成する必要があります。ご使用のオペレーティング・システムによって、通信は名前付きパイプ、NetBIOS または TCP/IP のいずれかとなります。
- サポートされる、クライアントからサーバーへの接続シナリオの 1 つを使用する必要があります。接続シナリオは、どのオペレーティング・システムがどの通信方式またはプロトコルを使用できるかを概説しています。

制約事項:

- Windows および UNIX 上の DB2 UDB サーバーは、APPC を使用したインバウンド・クライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 Connect がインストールされている場合は、DB2 クライアントは引き続き、APPC を使用してホスト・システムに接続することができます。
- NetBIOS を使用して Windows クライアントから、UNIX ベースのシステム上で稼働しているサーバーに接続することはできません。

手順:

以下のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成します。

1. 通信パラメーター値を確認し、記録します。
2. クライアントで適切な通信プロトコルを構成します。名前付きパイプについては、構成は必要ありません。
3. 以下の方式のいずれかを使用して、DB2 クライアントからデータベース・ノードをカタログします。採用する方式は、カタログするシステム上の通信プロトコル・セットアップに基づいて決めます。
 - DB2 クライアントから TCP/IP ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから NetBIOS ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから名前付きパイプ・ノードをカタログします。
4. DB2 クライアント上でデータベースをカタログします。
5. クライアントからサーバーへの接続をテストします。

関連タスク:

- 194 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』
- 195 ページの『DB2 クライアントからの NETBIOS ノードのカタログ』
- 196 ページの『クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ』
- 197 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』
- 199 ページの『CLP を使用したクライアント・サーバー接続のテスト』
- 187 ページの『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』

ノードのカタログ

DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使う *svcname* (または *port_number*) を指定します。

前提条件:

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または *catalog_noauth* オプションが ON に設定されていることが必要です。root 権限を使用してノードをカタログすることはできません。

手順:

TCP/IP ノードのカタログを実行するには、以下のタスクを実行します。

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX クライアントを使用する場合は、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
4. コマンド行プロセッサに以下のようなコマンドを入力して、ノードをカタログします。

```
db2 => catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address  
server service_name|port_number [remote_instance instance_name]  
[system system_name] [ostype os_type]
```

```
db2 => terminate
```

ここで、

- `node_name` は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- `remote_instance` は、データベースが存在するサーバー・インスタンスの名前を表します。
- `system` は、サーバーを識別するための DB2 システム名です。
- `ostype` は、サーバーのオペレーティング・システムのタイプです。

注:

- a. **terminate** コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするために必要です。
- b. `remote_instance`、`system`、および `ostype` はオプションですが、DB2 ツールを使用するユーザーの場合は必須です。
- c. クライアントで使用される `service_name` は、サーバーのものと同じである必要はありません。しかし、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

例:

ポート番号 50000 を使用しているリモート・サーバー `myserver.ibm.com` 上で `db2node` を呼び出すためのノードをカタログするには、**db2** プロンプトで以下のように入力します。

```
db2 => catalog tcpip node db2node remote myservers server 50000
DB20000I The CATALOG TCPIP NODE command completed successfully.
DB21056W Directory changes may not be effective until the directory cache is
refreshed.
```

```
db2 => terminate
DB20000I The TERMINATE command completed successfully.
```

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 199 ページの『CLP を使用したクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCPIP NODE コマンド』

DB2 クライアントからの NETBIOS ノードのカタログ

NetBIOS ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。ノードの項目名には、選択したノード別名 (`node_name`) を使用します。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するクライアントの論理アダプター番号 (`adapter_number`) とサーバーのワークステーション名 (`nname`) を指定します。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンする必要があります。
DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシス

テムヘデータベースを追加する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログインします。

- これらのパラメーター値については、『NetBIOS パラメーター値ワークシート』を参照してください。

手順:

NetBIOS ノードをカタログするには、以下のタスクを実行します。

```
db2 => catalog netbios node node_name remote nname adapter adapter_number
```

```
db2 => terminate
```

例えば、*db2node* というノードにリモート・データベース・サーバー *server1* をカタログするには、論理アダプター番号 *0* を使用して、以下のようになります。

```
db2 => catalog netbios node db2node remote server1 adapter 0
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 197 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『NetBIOS パラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NETBIOS NODE コマンド』

クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ

名前付きパイプ・ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するものとして選択された別名 (*node_name*)、リモート・サーバーのワークステーション名 (*computer_name*)、およびインスタンス名 (*instance_name*) を指定します。

手順:

DB2 クライアントで名前付きパイプ・ノードのカタログを実行するには、コマンド行プロセッサ (CLP) で以下のコマンドを入力します。

```
db2 => db2 catalog npipe node node_name /  
db2 => remote computer_name instance instance_name
```

```
db2 => terminate
```

例:

server1 というサーバーにある *db2node* というリモート・ノードをカタログするには、*db2* インスタンスで以下のようになります。

```
db2 => db2 catalog npipe node db2node remote server1 instance db2
```

```
db2 => terminate
```

関連資料:

- ・ 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NAMED PIPE NODE コマンド』
- ・ 「インストールおよび構成 補足」の『クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ・パラメーター値ワークシート』

データベースのカタログと接続のテスト

CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用することによって、DB2 クライアントからデータベースのカタログを作成する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使って、サーバー上で自動的にカタログされます。

DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および (ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのではない限り) ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

制約事項:

DB2 では、root 権限によるデータベースのカタログ作成はサポートされていません。

前提条件:

- ・ 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。
- ・ システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または catalog_noauth オプションが ON に設定されていることが必要です。
- ・ 以下のパラメーター値は、リモート・データベースをカタログする場合に適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

それらのパラメーター値について、また使用する値を記録することについての詳細は、データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシートを参照してください。

- ・ 以下のパラメーター値は、ローカル・データベースをカタログする場合に適用されます。
 - データベース名
 - ドライブ

- データベース別名
- 認証タイプ (オプション)
- コメント (オプション)

ローカル・データベースは、いつでもアンカタログおよび再カタログできます。

手順:

クライアントでデータベースをカタログするには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. オプション。『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』の「使用値」欄を更新します。
3. UNIX プラットフォームで DB2 UDB を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

4. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。 Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。 UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
5. コマンド行プロセッサに以下のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
db2 => catalog database database_name as database_alias at
node node_name [ authentication auth_value ]
```

ここで、

- *database_name* は、カタログするデータベースの名前です。
- *database_alias* は、カタログするデータベースのローカル・ニックネームです。
- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- *auth_value* は、データベースへの接続のときに行われる認証のタイプを指定します。このパラメーターのデフォルトは、サーバーで指定される認証タイプになります。認証タイプを指定すると、パフォーマンスが向上することがあります。認証値として指定できるオプションは、SERVER、CLIENT、SERVER_ENCRYPT、および KERBEROS です。

例:

sample というリモート・データベースを、ノード *db2node* においてローカル・データベース別名 *mysample* でカタログし、認証値として *server* を使用するには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 => catalog database sample as mysample at node db2node
authentication server
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 199 ページの『CLP を使用したクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

CLP を使用したクライアント・サーバー接続のテスト

ノードとデータベースのカタログが終わったら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカタログを実行しておくことが必要です。
- *userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものではなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルで指定されている認証パラメーターから、認証が判別されます。クライアントで構成された認証が、サーバーで構成された認証と不一致、または互換性がない場合は、エラーを受け取ります。
- DB2COMM で定義された正しいプロトコルによってデータベース・マネージャーが開始済みでなければなりません。まだ開始されていない場合には、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力することによって、データベース・マネージャーを開始できます。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、以下のタスクを実行します。

1. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
3. クライアント側で以下のコマンドを入力することにより、リモート・データベースに接続します。

```
db2 => connect to database_alias user userid
```

例えば、以下のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jtris
```


パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。以下のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JTRIS
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。例えば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、以下のような SQL ステートメントを入力します。

```
select tablename from syscat.tables
```

db2 terminate コマンドの後で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、例えば最初にデータベースに接続せずに **db2 select * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、**CONNECT** コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終わったら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

構成アシスタントによるデータベース接続のテスト

クライアント-サーバー間の接続を構成した後、データベース接続をテストする必要があります。

手順:

データベース接続をテストするには、

1. 「**構成アシスタント (Configuration Assistant)**」を開始します。
2. 詳細ビューでデータベースを強調表示してから、「**接続のテスト (Test Connection)**」を「**選択済み (Selected)**」メニューから選択します。「**接続のテスト (Test Connection)**」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続のタイプを選択します (デフォルトは **CLI**)。同時に複数のタイプをテストできます。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「**接続のテスト (Test Connection)**」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「**結果 (Results)**」ページに表示されます。

| 接続テストに失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指
| 定した設定を変更するには、詳細ビューでデータベースを選択してから、「デー
| タベースの変更 (Change Database)」を「選択済み (Selected)」メニューから
| 選択します。

関連タスク:

- 191 ページの『ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 188 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 190 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

第 7 部 DB2 のアンインストール

第 17 章 DB2 UDB のアンインストール (Windows)

DB2 UDB のアンインストール (Windows)

このタスクは、DB2 UDB バージョン 8 をご使用の Windows オペレーティング・システムから完全に除去するためのステップを提供します。既存の DB2 インスタンスおよびデータベースがもはや必要でなくなった場合にのみ、このタスクを実行してください。

手順:

DB2 UDB バージョン 8 を Windows から除去するには、以下のステップを実行します。

1. データベースをすべてドロップします。データベースのドロップは、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用して行えます。
2. すべての DB2 プロセスおよびサービスを停止します。これは Windows 保守パネルを介して、または **db2stop** コマンドを発行することによって行えます。DB2 を除去する前に DB2 サービスおよびプロセスを停止しないと、メモリーに DB2 DLL が保持されているプロセスおよびサービスのリストを含む警告を受け取ります。
3. Windows コントロール パネルを介して利用できる「プログラムの追加と削除」ウィンドウを使用して、DB2 製品を除去します。ご使用の Windows オペレーティング・システムからソフトウェア製品の除去についての詳細は、ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照してください。
4. 無音で DB2 を除去するには、コマンド行に以下のコマンドを入力してください。

```
msiexec /x <product_code> /qn
```

<product code> は、除去する製品のコードです。以下は、DB2 製品コードのリストです。

- ESE {D8F53726-C7AD-11D4-9155-00203586D551}
- WSE {7A28F948-4945-4BD1-ACC2-ADC081C24830}
- PE {C0AA883A-72AE-495F-9601-49F2EB154E93}
- WM {84AF5B86-19F9-4396-8D99-11CD91E81724}
- DLM {1D16CA65-F7D9-47E5-BB26-C623A44832A3}
- RCON {273F8AB8-C84B-4EE6-85E7-D7C5270A6D08}
- CONEE {9C8DFB63-66DE-4299-AC6B-37D799A728A2}
- CONPE {F1912044-6E08-431E-9B6D-90ED10C0B739}
- ADMCL {ABD23811-AA8F-416B-9EF6-E54D62F21A49}
- ADCL {68A40485-7F7F-4A91-9AB6-D67836E15CF2}
- RTCL {63F6DCD6-0D5C-4A07-B27C-3AE3E809D6E0}
- GSE {F6846BF9-F4B5-4BB2-946D-3926795D5749}

- LSDC {DD30AEB3-4323-40D7-AB39-735A0523DEF3}
- WMC {5FEA5040-22E2-4760-A88C-73DE82BE4B6E}
- DOC {73D99978-A255-4150-B4FD-194ECF4B3D7C}
- QP {7A8BE511-8DF3-4F22-B61A-AF0B8755E354}
- CUBE {C8FEDF8F-84E8-442F-A084-0A0F6A772B52}
- EXP {58169F10-CA30-4F40-8C6D-C6DA8CE47E16}

関連タスク:

- 207 ページの『DB2 UDB のアンインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

第 18 章 DB2 UDB のアンインストール (UNIX)

DB2 UDB のアンインストール (UNIX)

このタスクは、DB2 バージョン 8 をご使用の UNIX オペレーティング・システムから除去するためのステップを提供します。このタスクは、DB2 の新規バージョンをインストールする場合には不要です。UNIX 上の DB2 の各バージョンは異なるインストール・パスを持つので、同じコンピューター上で共存できます。

手順:

DB2 UDB を UNIX から除去するには、以下のステップを実行します。

1. オプション : データベースをすべてドロップします。データベースのドロップは、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用して行えます。
2. DB2 Administration Server の停止 (Stop the DB2 Administration Server) を行います。
3. Administration Server の除去 (Remove the Administration Server) を行います。
4. DB2 インスタンスの停止 (Stop DB2 instances) を行います。
5. DB2 インスタンスの除去 (Remove DB2 instances) を行います。
6. DB2 製品の除去 (Remove DB2 products) を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 207 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の停止』
- 208 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の削除』
- 208 ページの『DB2 インスタンスの停止』
- 209 ページの『DB2 インスタンスの削除』
- 210 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』
- 205 ページの『DB2 UDB のアンインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の停止

UNIX システムにおいて DB2 を削除する前に、DB2 Administration Server (DAS) を停止する必要があります。

手順:

DB2 Administration Server を停止するには、以下のタスクを実行します。

1. DB2 Administration Server の所有者としてログインします。
2. **db2admin stop** コマンドを入力することによって、DB2 Administration Server を停止します。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 210 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2admin - DB2 Administration Server コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の削除

DB2 を削除する前に、DB2 Administration Server (DAS) を削除する必要があります。

手順:

DB2 Administration Server を削除するには、以下のタスクを実行します。

1. DB2 Administration Server の所有者としてログインします。
2. 以下のようにして、始動スクリプトを実行します。
.
.
`DASHOME/das/dasprofile` (bash, Bourne, または Korn シェルの場合)
`source DASHOME/das/dascshrc` (C シェルの場合)

`DASHOME` は、DB2 Administration Server のホーム・ディレクトリーです。
3. `DASHOME/das` ディレクトリー内のファイルをバックアップします。
4. ログオフします。
5. `root` としてログインし、コマンド `DB2DIR/instance/dasdrop` を入力することによって、DB2 Administration Server を削除します。

`DB2DIR` は、`/usr/opt/db2_08_01` (AIX の場合)、および `/opt/IBM/db2/V8.1` (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 210 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

DB2 インスタンスの停止

DB2 を除去するには、その前にすべての DB2 インスタンスを停止する必要があります。

手順:

DB2 インスタンスを停止するには、以下のタスクを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. システム上のすべての DB2 インスタンスの名前のリストを取得するため、**DB2DIR/bin/db2ilist** コマンドを入力します。

DB2DIR は、*/usr/opt/db2_08_01* (AIX の場合)、および */opt/IBM/db2/V8.1* (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

3. ログアウトします。
4. 停止するインスタンスの所有者としてログインします。
5. 以下のようにして、始動スクリプトを実行します。

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile      (bash、 Bourne、または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc  (C シェルの場合)
```

INSTHOME は、インスタンスのホーム・ディレクトリーです。

6. 必要に応じて、*INSTHOME/sql1lib* ディレクトリー内のファイルをバックアップします (*INSTHOME* はインスタンス所有者のホーム・ディレクトリー)。
7. データベース・マネージャー構成ファイル、*db2system*、*db2nodes.cfg* ファイル、または *INSTHOME/sql1lib/function* 内のユーザー定義関数または *fenced* ストアード・プロシージャ・アプリケーションを保存しておきたいと思うかもしれません。
8. **db2 force application all** コマンドを入力することによって、すべてのデータベース・アプリケーションを停止します。
9. **db2stop** コマンドを入力することによって、DB2 データベース・マネージャーを停止します。
10. **db2 terminate** コマンドを入力することによって、実際にインスタンスが停止していることを確認します。
11. インスタンスごとに、上記の手順を繰り返します。

UNIX での DB2 の削除における次のステップは、DB2 インスタンスの削除です。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『**db2stop** - DB2 の停止コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『**FORCE APPLICATION** コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『**db2ilist** - インスタンスのリスト・コマンド』

DB2 インスタンスの削除

システムから、DB2 バージョン 8 インスタンスの一部またはすべてを削除できます。インスタンスを削除すると、そのインスタンスの所有する DB2 データベースがあれば、それらはすべて使用できなくなります。DB2 インスタンスは、DB2 バージョン 8 製品を使用しないことにした場合、または既存のインスタンスをそれ以降の DB2 のバージョンに移行しないようにする場合以外は、削除しないようにしてください。

手順:

インスタンスを削除するには、以下のタスクを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。

2. 以下のコマンドを入力することによって、インスタンスを削除します。

`DB2DIR/instance/db2idrop InstName`

`DB2DIR` は、`/usr/opt/db2_08_01` (AIX の場合)、および `/opt/IBM/db2/V8.1` (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

db2idrop コマンドは、インスタンスのリストからインスタンスの項目を削除し、`INSTHOME/sqllib` ディレクトリーを削除します (`INSTHOME` はインスタンスのホーム・ディレクトリー、`InstName` はインスタンスのログイン名)。`/sqllib` ディレクトリーにファイルを保管している場合、それらのファイルはこのアクションによって除去されます。そうしたファイルがまだ必要ならば、インスタンスをドロップする前にコピーを作成しなければなりません。

3. オプション: root 権限を付与されたユーザーとして、インスタンス所有者のユーザー ID とグループを削除します (そのインスタンス専用の場合)。インスタンスを再び作成する予定の場合、それらは削除しないでください。

インスタンス所有者とインスタンス所有者グループは他の目的のために使用されることがあるので、このステップはオプションです。

UNIX での DB2 の削除における次のステップは、DB2 製品の削除です。

関連タスク:

- 210 ページの『`db2_deinstall` コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『`db2idrop` - インスタンスの除去コマンド』

db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)

ここでは、**db2_deinstall** コマンドを使用することによって、DB2 バージョン 8 の製品を削除する方法について説明します。**db2_deinstall** コマンドを実行すると、システムからすべての DB2 製品が削除されます。DB2 製品の一部分だけを削除するには、オペレーティング・システム付属のツールを使用して、DB2 コンポーネント、パッケージ、またはファイル・セットを削除してください。

前提条件:

UNIX システムから DB2 製品を削除する前に、

- UNIX システムから DB2 製品を削除する前に、『UNIX での DB2 の削除』で説明されているステップをすべて実行してください。
- DB2 製品を削除するには、root 権限が必要です。
- **db2_deinstall** コマンドを使用するには、製品 CD-ROM が必要です。**db2_deinstall** コマンドは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM のルート・ディレクトリーにあります。

手順:

UNIX システムから DB2 製品を削除するには、以下のタスクを実行します。

1. root 権限を付与されたユーザーとしてログインします。
2. DB2 バージョン 8 製品 CD-ROM をマウントします。

3. DB2 バージョン 8 製品 CD-ROM のルート・ディレクトリーから、**db2_deinstall -n** コマンドを実行します。 *-n* パラメーターを指定することにより、**pkgrm** は非対話式に実行されます。 *-n* パラメーターは System V (Solaris) 専用です。

このコマンドを実行すると、システムからすべての DB2 製品が削除されます。これ以外にも、オペレーティング・システムから DB2 製品を削除する方法があります。システムから DB2 製品の一部分だけを削除する場合は、以下のいずれかの方式を使用できます。DB2 製品を削除するその他の方式は、以下のとおりです。

AIX システム管理インターフェース・ツール (SMIT) を使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。SMIT を使用して DB2 を削除する場合、接頭部 **db2_08_01** によって DB2 バージョン 8 の製品を指定できます。また、**installp** コマンドを使用すると、AIX システムからすべての DB2 製品を削除できます。その場合は、**installp -u db2_08_01** と入力します。

HP-UX

swremove コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

Linux rpm コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

Solaris オペレーティング環境

pkgrm コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

関連タスク:

- 209 ページの『DB2 インスタンスの削除』
- 213 ページの『第 19 章 DB2 フィックスパックの削除』

第 19 章 DB2 フィックスパックの削除

このセクションでは、システムから DB2 フィックスパックを削除する方法について説明します (削除が必要な場合)。

制約事項:

DB2 フィックスパックの削除には、以下のような制限があります。

- AIX では、フィックスパックをコミットした状態にしておかないでください。フィックスパックは、フィックスパックをインストールする際に、あるいは後から手動でコミットできます。

手順:

Windows の場合

Windows 上で DB2 フィックスパックを削除する場合は、まず DB2 をアンインストールする必要があります。その後で、希望する製品レベル、フィックスパック・レベル、あるいはその両方を再インストールできます。次いで、データベースを再カタログします。

注: 構成の設定のエクスポートとインポートには、**db2cfexp** および **db2cfimp** を使用できます。これにより、カタログの設定もエクスポートされます。

UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合

UNIX ベースのオペレーティング・システムからの DB2 フィックスパックの削除には、さまざまな方法があります。

AIX AIX の場合は、**installp** コマンドまたは SMIT (System Management Interface Tool) を使用することによってフィックスパックをリジェクトできます。

HP-UX

HP-UX の場合は、**swremove** コマンドまたは SAM (System Activity Monitor) を使用します。

Solaris オペレーティング環境

Solaris オペレーティング環境の場合は、`/var/sadm/patch/backoutallpatch*` を呼び出します。

Linux Linux の場合は、希望する製品のレベル、フィックスパックのレベル、あるいはその両方をいったんアンインストールして再インストールする必要があります。

関連タスク:

- 210 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』
- 205 ページの『DB2 UDB のアンインストール (Windows)』
- 207 ページの『DB2 UDB のアンインストール (UNIX)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『installAltFixPak による複数レベルの DB2 のインストール (UNIX)』

第 8 部 付録

付録 A. 言語サポート

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語を、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 インターフェース言語を選択しインストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールしていないサポートされたインターフェース言語に変更する場合には、まず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語にデフォルトで指定します。それがサポートされない場合には、英語に指定します。

手順:

Windows 上で DB2 のインターフェース言語を変更するには、ご使用の Windows オペレーティング・システムのデフォルトの言語設定を変更する必要があります。

以下のようにして、Windows 上で DB2 インターフェース言語を変更します。

1. ご使用の Windows オペレーティング・システムのコントロール パネルで、「**地域 (Regional Options)**」を選択します。
2. 「**地域 (Regional Option)**」ダイアログ・ウィンドウで、システムのデフォルトの言語設定を、DB2 でインターフェースしたい言語に変更します。

ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照して、デフォルトのシステム言語の変更についての追加情報を参照してください。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 218 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語のサポートを、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 インターフェース言語サポートは、DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して選択し、インストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールしていないサポートされたインターフェース言語に変更する場合には、まず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語にデフォルトで指定します。それがサポートされない場合には、英語に指定します。

手順:

UNIX システムで DB2 インターフェース言語を変更するには、LANG 環境変数を希望のロケールに設定します。

例えば、DB2 for AIX でフランス語を使用して DB2 にインターフェースするには、フランス語言語サポートをインストールして、LANG 環境変数をフランス語ロケール (例えば fr_FR) に設定する必要があります。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリリー・コードおよびコード・ページ』
- 218 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

サポートされる DB2 インターフェース言語

DB2 インターフェースの DB2 言語サポートは、サーバー・グループ言語とクライアント・グループ言語に分類できます。サーバー・グループ言語は、メッセージ、ヘルプおよび DB2 グラフィカル・インターフェース・エレメントのほとんどを翻訳します。クライアント・グループ言語は、メッセージのほとんどと特定のヘルプ資料を含む、DB2 Run-Time Client コンポーネントを翻訳します。

サーバー・グループ言語には、ブラジル・ポルトガル語、チェコ語、デンマーク語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポーランド語、ロシア語、中国語 (簡体字)、スペイン語、スウェーデン語、中国語 (繁体字) が含まれます。

クライアント・グループ言語には、アラビア語、ブルガリア語、クロアチア語、オランダ語、ギリシャ語、ヘブライ語、ハンガリー語、ポルトガル語、ルーマニア語、スロバキア語、スロベニア語、トルコ語が含まれます。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

関連タスク:

- 27 ページの『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 217 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)』
- 218 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『各国語バージョン』
- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『コード・ページ 923 および 924 の変換表』
- 「管理ガイド: プランニング」の『ユーロを使用可能なコード・ページ遷移表ファイル』

別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID

DB2 セットアップ・ウィザードを、ご使用のコンピューターのデフォルトの言語以外の言語で実行する場合には、言語 ID を指定して、手動で DB2 セットアップ・ウィザードを開始することができます。指定する言語は、インストールを実行するプラットフォームで選択可能なものでなければなりません。

表 10. 言語 ID

言語	言語 ID
アラビア語	ar
ブラジル・ポルトガル語	br
ブルガリア語	bg
中国語 (簡体字)	cn
中国語 (繁体字)	tw
クロアチア語	hr
チェコ語	cz
デンマーク語	dk
オランダ語	nl
英語	en
フィンランド語	fi
フランス語	fr
ドイツ語	de
ギリシャ語	el

表 10. 言語 ID (続き)

言語	言語 ID
ヘブライ語	iw
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	jp
韓国語	kr
ノルウェー語	no
ポーランド語	pl
ポルトガル語	pt
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
スロバキア語	sk
スロベニア語	sl
スペイン語	es
スウェーデン語	se
トルコ語	tr

db2setup コマンドの各国語表示

db2setup コマンドは、既存の言語設定を判別するために、オペレーティング・システムを照会します。ご使用のオペレーティング・システムの言語設定が **db2setup** でサポートされている場合は、その言語が使用されます。

ご使用のシステムで同じコード・ページを使用しているが、DB2 インターフェイスでサポートされているものとは異なるロケール名を使用している場合でも、LANG 環境変数を、以下のコマンドを入力して適当な値に設定すれば、翻訳された **db2setup** を表示することができます。

export LANG= <locale> ここで *locale* は DB2 インターフェイスでサポートされているロケールです。

例えば、ご使用の Linux システムのデフォルト・ロケールが ja_JP.ujis で、ja_JP.ujis のコード・ページが 954 の場合、以下のコマンド (Bourne シェル、またはその亜種を使用した場合) を実行して、LANG 環境変数を ja_JP.eucJP に設定することができます。

```
export LANG=ja_JP.eucJP
```

これで、**db2setup** コマンドは日本語 (コード・ページ 954) で表示されます。

注: **db2setup** コマンドは、インストールしている DB2 製品によってサポートされている言語のサブセットに翻訳できます。

関連資料:

- 218 ページの『サポートされる DB2 インターフェイス言語』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』

付録 B. DB2 製品 CD-ROM のマウント (UNIX)

CD-ROM のマウント (AIX)

前提条件:

このタスクには、root 権限が必要です。

手順:

システム・マネージメント・インターフェース・ツール (SMIT) を使用して AIX 上に CD-ROM をマウントするには、以下のステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入します。
3. `mkdir -p /cdrom` コマンドを入力することによって CD-ROM マウント・ポイントを作成します。ここで、`cdrom` は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーを表しています。
4. **smit storage** コマンドを入力することによって、SMIT を使用している CD-ROM ファイル・システムを割り当てます。
5. SMIT を開始した後、「ファイル・システム (File Systems)」→「ファイル・システムの追加/変更/表示/削除 (Add/Change/Show/Delete File Systems)」→「CDROM ファイル・システム (CDROM File Systems)」→「CDROM ファイル・システムの追加 (Add CDROM File System)」を選択します。
6. 「ファイル・システムの追加 (Add a File System)」ウィンドウの場合:
 - 「**DEVICE 名 (DEVICE Name)**」フィールド内に CD-ROM ファイル・システム用の装置名を入力します。CD-ROM ファイル・システムの装置名はユニーク名でなければなりません。重複した装置名がある場合、前に定義されている CD-ROM ファイル・システムを削除するか、ディレクトリーに別の名前を使う必要があります。本書の例では、装置名として `/dev/cd0` を使用します。
 - 「**MOUNT POINT**」ウィンドウ内に CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーを入力します。本書の例では、マウント・ポイント・ディレクトリーは、`/cdrom` です。
 - 「**システムの再始動時に自動的にマウント (Mount AUTOMATICALLY at system restart)**」フィールドで、「はい (yes)」を選択して、ファイル・システムを自動的にマウントできるようにします。
 - 「**OK**」をクリックしてウィンドウをクローズし、「**取り消し (Cancel)**」を 3 回クリックして SMIT を終了します。
7. 次に、**smit mountfs** コマンドを入力して、CD-ROM ファイル・システムをマウントします。
8. 「ファイル・システムのマウント (Mount a File System)」ウィンドウの場合:

- 「**FILE SYSTEM 名 (FILE SYSTEM name)**」 フィールド内に CD-ROM ファイル・システム用の装置名を入力します。本書の例では、装置名は /dev/cd0 です。
- CD-ROM マウント・ポイントを「**マウントするディレクトリー (Directory over which to mount)**」フィールドに入力します。本書の例では、マウント・ポイントは /cdrom です。
- cdrfs を「**ファイル・システムのタイプ (Type of Filesystem)**」フィールドに入力します。マウントできるその他の種類のファイル・システムを表示するには、「**リスト (List)**」をクリックします。
- 「**読み取り専用システムとしてマウント (Mount as READ-ONLY system)**」フィールドで、「はい (yes)」を選択します。
- 残りのデフォルトを受け入れ、「OK」をクリックしてウィンドウをクローズします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

CD-ROM のマウント (HP-UX)

以下のステップにより、DB2 for HP-UX 製品 CD-ROM が正常にマウントできるようになります。

前提条件:

このタスクには、root 権限が必要です。

手順:

DB2 UDB for HP-UX 製品 CD-ROM をマウントするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 必要であれば、CD-ROM ドライブのマウント・ポイントとして、新規ディレクトリーを定義します。 **mkdir /cdrom** コマンドを使用して、/cdrom をマウント・ポイントとして定義します。
3. 必要であれば、**ioscan -fnC disk** コマンドを使用して、ドライブ装置ファイルを識別します。このコマンドは、認識される CD-ROM ドライブおよびそれらに関連した装置ファイルのすべてをリストします。ファイル名は /dev/dsk/c1t2d0 のようなものになります。
4. CD ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリーにマウントします。

```
mount -F cdrfs -o rr /dev/dsk/c1t2d0 /cdrom
```
5. **ls /cdrom** コマンドを使用して、ファイルのリスト表示を入手し、マウントを確認します。
6. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、CD をドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品ライセンス・ファイル』
- 77 ページの『DB2 サーバーのインストール要件 (HP-UX)』

CD-ROM のマウント (Linux)

前提条件:

このタスクには、root 権限が必要です。

手順:

Linux に CD-ROM をマウントするには、以下に示すステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入し、以下のコマンドを入力します。

```
mount -t iso9660 -o ro /dev/cdrom /cdrom
```

ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

3. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『複数の DB2 レベルのインストール』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品ライセンス・ファイル』

CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)

前提条件:

NFS を使用してリモート・システムから CD-ROM ドライブをマウントする場合は、リモート・コンピューター上の CD-ROM ファイル・システムをルート・アクセスによってエクスポートする必要があります。ローカル・コンピューターに CD-ROM ファイル・システムをマウントする場合も、やはりルート・アクセスを使用しなければなりません。

手順:

Solaris オペレーティング環境に CD-ROM をマウントするには、以下に示すステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入します。

3. ボリューム・マネージャー (vold) が実行されているシステムの場合、CD-ROM は、CD にラベルがある場合には `/cdrom/cd_label` として、ラベルがない場合には `/cdrom/unnamed_cdrom` として、自動的にマウントされます。

ボリューム・マネージャーをシステムで実行しない場合は、以下のようなステップを実行して CD-ROM をマウントしてください。

- a. 以下のコマンドを入力して、装置名を判別します。

```
ls -al /dev/sr* |awk '{print "/" $11}'
```

このコマンドは、CD-ROM 装置名を戻します。この例では、コマンドはストリング `/dev/dsk/c0t6d0s2` を戻します。

- b. 以下のコマンドを入力して、CD-ROM をマウントします。

```
mkdir -p /cdrom/unnamed_cdrom  
mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/c0t6d0s2 /cdrom/unnamed_cdrom
```

`/dev/dsk/c0t6d0s2` は、前のステップで戻された装置名を表し、`/cdrom/unnamed_cdrom` は、CD-ROM マウント・ディレクトリーを表します。

注: NFS を使用してリモート・システムから CD-ROM ドライブをマウントする場合は、リモート・システム上の CD-ROM ファイル・システムをルート・アクセスによってエクスポートする必要があります。ローカル・マシンに CD-ROM ファイル・システムをマウントする場合も、やはりルート・アクセスを使用しなければなりません。

4. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

付録 C. DB2 Universal Database の技術情報の概要

DB2 の資料とヘルプ

以下のツールおよび方式を使用して、DB2 技術情報を使用できます。

- DB2 インフォメーション・センター
 - トピック
 - DB2 ツールに関するヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 中の PDF ファイル、および印刷版ブック
 - ガイド
 - リファレンス・マニュアル
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL 状態ヘルプ
- インストール済みのソース・コード
 - サンプル・プログラム

ibm.com からオンラインで技術情報、白書、レッドブックなどの、DB2 Universal Database に関する追加の技術情報にアクセスできます。

www.ibm.com/software/data/pubs/ の、DB2 Information Management ソフトウェア・ライブラリーのサイトにアクセスしてください。

DB2 資料の更新

IBM 社は、資料のフィックスパックや、DB2 インフォメーション・センターに対する他の資料更新を、定期的に入手できるようにしています。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> の DB2 インフォメーション・センターにアクセスすると、常に最新の情報を表示できます。DB2 インフォメーション・センターをローカルにインストールした場合は、更新内容を表示するにはその前に手動でインストールする必要があります。資料の更新を利用すると、新しい情報が使用可能になった時点で、DB2 インフォメーション・センター CD からインストールした情報を更新できます。

インフォメーション・センターは、PDF やハードコピー・ブックより頻繁に更新されます。最新の DB2 技術情報入手するには、資料の更新を使用可能になった時点でインストールするか、www.ibm.com サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 248 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 251 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 241 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/iseries/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 240 ページの『DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する』
- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ

DB2 情報にアクセスする方法に関する要件は、作業環境によって異なります。DB2 インフォメーション・センターには、IBM Web サイト、ご自分の組織のネットワーク上のサーバー、またはご使用のコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスできます。これら 3 つのいずれの場合でも、資料は DB2 インフォメーション・センターに含まれています。DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで表示できる、トピック・ベースの情報の体系化された Web です。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。しかし、イントラネット・サーバーか独自のコンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスする場合は、製品のメディア・パックに含まれている DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 資料のアクセスに関するオプションのサマリーと、3 つのインストール・シナリオを使用すると、ご使用の作業環境で最適な DB2 インフォメーション・センターへのアクセス方式と、考慮する必要のあるインストール上の問題を判別するのに役立ちます。

DB2 資料のアクセスに関するオプションのサマリー:

以下の表には、ご使用の作業環境で、DB2 インフォメーション・センター中の DB2 製品資料にアクセスするのに最適なオプションに関する推奨事項が記載されています。■

インターネット・アクセス	イントラネット・アクセス	推奨
あり	あり	IBM Web サイト上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーにインストールされた DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
あり	なし	IBM Web サイト上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
なし	あり	イントラネット・サーバーにインストールされた DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
なし	なし	ローカル・コンピューター上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。

シナリオ: ご使用のコンピューター上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

ツー・チェン氏は、小さな町に工場を所有しており、この町にはインターネット・アクセスを提供するローカル ISP がありません。ツー・チェン氏は DB2 Universal Database を購入して、在庫、製品の注文、銀行預金勘定に関する情報、および業務

上の経費を管理しています。ツー・チェン氏は、これまで DB2 製品を使用したことがなかったので、DB2 製品資料で使用法を学ぶ必要があります。

ツー・チェン氏は、標準的なインストール・オプションを使用して自分のコンピューターに DB2 Universal Database をインストールした後に、DB2 資料にアクセスしようとしています。しかし、オープンしようとしたページが見つからないというエラー・メッセージがブラウザに表示されます。ツー・チェン氏は、ご使用の DB2 製品のインストール資料を調べて、コンピューター上で DB2 資料にアクセスしたい場合は DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があることを知ります。ツー・チェン氏はメディア・バック中で DB2 インフォメーション・センター CD を見つけてインストールします。

ツー・チェン氏は、オペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、DB2 製品の使用法を学べるようになったので、仕事が上向いています。

シナリオ: IBM Web サイト上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

コリン氏は、教習会社の情報技術の相談員です。コリン氏は、データベースのテクノロジーと SQL の専門家として、DB2 Universal Database を使用して北アメリカの全域でこの種の業務の題目に関するセミナーを開いています。コリン氏のセミナーの一部には、教材として DB2 資料を使用することが含まれています。例えば、SQL に関する授業の課程で、コリン氏は SQL に関する DB2 資料を使用して、データベース照会の基本構文や上級構文を教えています。

コリン氏が教えている業務の大部分では、インターネット・アクセスを行います。この状態のために、コリン氏は、DB2 Universal Database の最新バージョンをインストールする際に、IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするようにモバイル・コンピューターを構成することにしました。コリン氏は、この構成を使用して、セミナー中に最新の DB2 資料にオンライン・アクセスできます。

しかし、コリン氏が旅行している間、インターネット・アクセスできないことが時折あります。このことは、特にセミナーの準備のために DB2 資料にアクセスする必要がある場合に、問題になりました。コリン氏は、この状態を解決するために、DB2 インフォメーション・センターのコピーをモバイル・コンピューターにインストールしました。

コリン氏は、自由に使用できる DB2 資料のコピーを常時持っているので、柔軟性を得られています。db2set コマンドを使用すると、状態に応じて、IBM Web サイトまたはモバイル・コンピューターのどちらかの DB2 インフォメーション・センターにアクセスするように、モバイル・コンピューター上のレジストリー変数を簡単に構成できます。

シナリオ: イントラネット・サーバー上で DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

エヴァさんは、生命保険会社の上級のデータベース管理者として働いています。エヴァさんの管理担当には、社内の UNIX データベース・サーバーに DB2 Universal Database の最新バージョンをインストールして構成することが含まれます。最近工

ヴァさんの会社は従業員に、セキュリティー上の理由で作業時にインターネット・アクセスできなくなることを通知しました。この会社にはネットワーク環境があるので、エヴァさんはイントラネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールし、社内の従業員で会社のデータウェアハウスを定期的に使用する人すべて (営業担当員、営業管理者、および業務分析者) が DB2 資料にアクセスできるようにすることにしました。

エヴァさんはデータベースのチームに、応答ファイルを使用してすべての従業員のコンピューターに DB2 Universal Database の最新バージョンをインストールするよう指示し、確実に個々のコンピューターがイントラネット・サーバーのホスト名とポート番号を使用して DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう構成されるようにします。

しかし、エヴァさんのチームの下級のデータベース管理者であるミゲル氏が間違えて、イントラネット・サーバー上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう DB2 Universal Database を構成する代わりに、DB2 インフォメーション・センターのコピーを複数の従業員のコンピューターにインストールしました。この状態を訂正するために、エヴァさんはミゲル氏に、**db2set** コマンドを使用して、これらの各コンピューター上の DB2 インフォメーション・センター・レジストリー変数 (ホスト名は DB2_DOCHOST、ポート番号は DB2_DOCPORT) を変更するよう指示します。これで、ネットワーク上の該当するコンピューターがすべて DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、従業員は DB2 に関する質問の回答を DB2 資料中で見つけることができます。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

DB2 製品資料にアクセスするには、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはご使用のコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスするという 3 つの方法があります。デフォルトでは、DB2 製品は DB2 資料に IBM Web サイトからアクセスします。イントラネット・サーバーか独自のコンピュ

ーターから DB2 資料にアクセスする場合は、DB2 インフォメーション・センター CD から資料をインストールしなければなりません。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール設定を定義し、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

この節では、DB2 Information Center を UNIX コンピューターにインストールする場合の、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

• ハードウェア要件

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システム要件

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Red Hat Linux 8.0 (Intel 32 ビット上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32 ビット上)
- Sun Solaris バージョン 8 (Solaris オペレーティング環境の UltraSPARC コンピューター上)

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントがサポートされているすべての UNIX オペレーティング・システムで公式にはサポートされていません。したがって、IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、インターネット・サーバー上に DB2 インフォメーション・センターをインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。
 - Mozilla バージョン 1.0 またはそれ以上

• DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィック・インストーラーです。ご使用のコンピューターで DB2 セットアップ・ウィザードを実行するには、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示できる X Window System ソフトウェアのインプリメンテーションが必要です。DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、ディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認しなければなりません。例えば、以下のコマンドをコマンド・プロンプトで入力します。

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールします。

1. システムにログオンします。
2. ご使用のシステムに DB2 インフォメーション・センター製品 CD を挿入してマウントします。
3. 以下のコマンドを入力することによって、CD がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cd
```

ただし、`/cd` は CD のマウント・ポイントを表します。

4. **`/db2setup`** コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。
5. 「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド」がオープンします。直接 DB2 インフォメーション・センターのインストールに進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
6. 「インストールしたい製品を選択します」ページで、「次へ」をクリックします。
7. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードがプログラムのセットアップ操作を案内します。
8. インストールに進むには、ご使用条件を受諾しなければなりません。「ご使用条件」ページで、「使用条件の条項に同意します。」を選択して、「次へ」をクリックします。
9. 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページで、「DB2 インフォメーション・センターをこのコンピューターにインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、後で DB2 インフォメーション・センターをこのコンピューターか他のコンピューターにインストールする場合は、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「インストールする言語の選択」ページで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
11. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」ページで、着信の通信用に DB2 インフォメーション・センターを構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続行します。
12. 「ファイルのコピーの開始」ページで、選択したインストール項目を検討します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。DB2 インフォメーション・センターのファイルをご使用のコンピューターにコピーするには、「インストール」をクリックします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールすることもできます。

インストール・ログ db2setup.his、 db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトでは /tmp ディレクトリー中に入れられます。ログ・ファイルの場所を指定できます。

db2setup.log ファイルは、エラーを含むすべての DB2 製品のインストール情報をキャプチャーします。 db2setup.his ファイルは、ご使用のコンピューター上の DB2 製品のインストール内容をすべて記録します。 DB2 は db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに付加します。 db2setup.err ファイルは、Java によって戻されるエラー出力 (例外やトラップ情報など) をキャプチャーします。

インストールが完了すると、DB2 インフォメーション・センターは、ご使用の UNIX オペレーティング・システムに応じて、以下のいずれかのディレクトリーにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 240 ページの『DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する』
- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

DB2 製品資料にアクセスするには、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはご使用のコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスするという 3 つの方法があります。デフォルトでは、DB2 製品は DB2 資料に IBM Web サイトからアクセスします。イントラネット・サーバーか独自のコンピューターから DB2 資料にアクセスする場合は、DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 資料をインストールしなければなりません。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール設定を定義し、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

この節では、DB2 Information Center を Windows にインストールする場合の、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

• **ハードウェア要件**

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- 32 ビット・コンピューター: Pentium または Pentium 互換 CPU

• **オペレーティング・システム要件**

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- Windows 2000
- Windows XP

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントがサポートされているすべての Windows オペレーティング・システムで公式にはサポートされていません。したがって、IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、インターネット・サーバー上に DB2 インフォメーション・センターをインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• **ソフトウェア要件**

- 以下のブラウザがサポートされています。
 - Mozilla 1.0 またはそれ以上
 - Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (Windows XP の場合はバージョン 6.0)

• **通信要件**

- TCP/IP

手順:

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールします。

1. DB2 インフォメーション・センターのインストールのために定義したアカウントで、システムにログオンします。
2. CD をドライブに挿入します。自動実行機能を使用可能にしている場合には、この機能が IBM DB2 セットアップ・ランチパッドを開始します。
3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを英語以外の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。

以下のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:%setup language
```

x: はご使用の CD ドライブを表し、 *language* はセットアップ・プログラムを実行する言語を表します。

- c. 「OK」をクリックします。
4. 「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド」がオープンします。直接 DB2 インフォメーション・センターのインストールに進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
5. 「インストールしたい製品を選択します」ページで、「次へ」をクリックします。
6. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードがプログラムのセットアップ操作を案内します。
7. インストールに進むには、ご使用条件を受諾しなければなりません。「ご使用条件」ページで、「使用条件の条項に同意します。」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページで、「DB2 インフォメーション・センターをこのコンピューターにインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、後で DB2 インフォメーション・センターをこのコンピューターか他のコンピューターにインストールする場合は、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択」ページで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」ページで、着信の通信用に DB2 インフォメーション・センターを構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続行します。
11. 「ファイルのコピーの開始」ページで、選択したインストール項目を検討します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。DB2 インフォメーション・センターのファイルをご使用のコンピューターにコピーするには、「インストール」をクリックします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。 `db2rspgn` コマンドを使用して、既存のインストール内容に基づいて応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\%DB2LOG% ディレクトリーにある、 `db2.log` および `db2wi.log` ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

`db2wi.log` ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。`db2.log` は、DB2 製品のインストールの履歴をキャプチャーします。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 240 ページの『DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する』
- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、 DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM DB2」 → 「情報」 → 「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。

- Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `http://<host-name>:<port-number>/` を開きます (<host-name> はホスト名、 <port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` を開きます。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 240 ページの『DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する』
- 248 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 239 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『HELP コマンド』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようにします。

1. IBM の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるごサポート」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「**DB2 資料**」リンクをクリックします。
3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるごサポート」 ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 230 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 232 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 235 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センター中に希望する言語でトピックを表示する

DB2 インフォメーション・センターは、ご使用のブラウザの優先順位中に指定されている言語でトピックを表示しようとします。トピックが希望する言語に翻訳されていない場合は、DB2 インフォメーション・センターは英語でトピックを表示します。

手順:

Internet Explorer ブラウザーで、希望する言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Internet Explorer で、「ツール」→「インターネット・オプション」→「言語...」 ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウがオープンします。
2. 言語のリスト内で、希望する言語が先頭項目として指定されていることを確認します。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「追加...」 ボタンをクリックします。

注: 言語を追加しても、希望する言語でトピックを表示するのに必要なフォントがコンピューターにあることは保証されません。

- 言語をリストの先頭に移動するには、言語を選択して、その言語が言語のリストの先頭になるまで「上へ」ボタンをクリックします。
3. ページをリフレッシュして、希望する言語で DB2 インフォメーション・センターを表示します。

Mozilla ブラウザーで、希望する言語でトピックを表示するには、以下のようにします。

1. Mozilla で、「**Edit**」→「**Preferences**」→「**Languages**」ボタンを選択します。「Preferences」ウィンドウに「Languages」パネルが表示されます。
2. 言語のリスト内で、希望する言語が先頭項目として指定されていることを確認します。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「**Add...**」ボタンをクリックして、「Add Languages」ウィンドウから言語を選択します。
 - 言語をリストの先頭に移動するには、言語を選択して、その言語が言語のリストの先頭になるまで「上へ」ボタンをクリックします。
3. ページをリフレッシュして、希望する言語で DB2 インフォメーション・センターを表示します。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表 11. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表 12. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81

表 12. 管理情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」	SC88-9156	db2s2j81
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドお よびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 13. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および 実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーション のプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションの プログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェ ース ガイドおよびリファレン ス 第 1 巻」	SC88-9159	db2l1j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェ ース ガイドおよびリファレン ス 第 2 巻」	SC88-9160	db2l2j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプロ グラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 14. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 15. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティ 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 16. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2ilj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 17. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」	資料番号なし	db2tuj81
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」	資料番号なし	db2aij81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリアル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 18. オptional・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82
「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」	SH88-8546	N/A

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 19. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 227 ページの『DB2 の資料とヘルプ』

関連タスク:

- 247 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 248 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 248 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。 Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。 Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、 Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。 UNIX オペレーティング・システムの場合、 *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をマウントします。 UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. `index.htm` を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。 Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」 → 「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 223 ページの『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 224 ページの『CD-ROM のマウント (HP-UX)』
- 225 ページの『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 248 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 225 ページの『CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)』

関連資料:

- 241 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようになすことができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は DB2 PDF ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、DB2 インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、DB2 インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: DB2 インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピー の資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 247 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 241 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザーに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある DB2 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ

- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザー内でフィールドまたはコントロールを選択して **F1** を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザーでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 251 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセス: Concepts help』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用法: Common GUI help』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』
- 『DB2 コンテキスト・ヘルプと資料へのアクセスを設定する: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 248 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 251 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 238 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 250 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2[®] チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介
データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド

データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル

インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル

Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザー・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 228 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 「問題判別の手引き」の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2®バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、254 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、254 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、254 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX® オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: [Common GUI help](#) を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザーに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 254 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

関連タスク:

- 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: [Common GUI help](#)』
- 『メニューおよびテキストのフォントを変更する: [Common GUI help](#)』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数ある場合、? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE

がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。 ? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。

- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。 ! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、 ! シンボルを指定できません。たとえば、「? FILE, 2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、 FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、 FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、 FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「? FILE, 2.1, 2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、 ? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。 * シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、 1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*, 3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、 HOST、 STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、 HOST STATE と書くことはできませんが、 HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。 + シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、 HOST、 STATE、またはその両方を含める必要があります。 * シンボルと同様に、 + シンボルは、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できます。 * シンボルと同様、 + シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。

関連概念:

- 253 ページの『アクセス支援』

| **関連タスク:**

- | • 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』

| **関連資料:**

- | • 「*SQL* リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証
| の評価を受けています。Common Criteria の詳細については、以下の Common
| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 D. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited

Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ
機能 253
ドット 10 進数の構文図 254
アクセス
DB2 UDB バージョン 7 サーバー 10
アクセスの検査
レジストリー 163
移行
インスタンス
UNIX 38
新規システムへのデータベースの 34, 42
データベース 32, 40
テストの考慮事項 21
前のリリース 17
64 ビット
AIX 44
HP-UX 44
Solaris オペレーティング環境 44
AIX バージョン 4
DB2 バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に 46
DB2 22, 32, 39, 40
推奨事項 17
スペースの考慮事項 19
制約事項 15
UNIX 37
Windows 上の 31
DB2 Administration Server (DAS) 39
「DB2 Migrate Now!」 Web サイト 15
DB2 UDB バージョン 8.2 15
DB2 サーバー
パーティション・データベース環境 21
explain 表 22
Windows 64 ビット 36
移行できる状態にある
データベース 28
印刷
PDF ファイル 247
印刷版ブックの注文 248

インスタンス
移行
UNIX 38
停止 208
インスタンス所有データベース・パーティション・サーバー
Windows でのインストール 122
インストール
インフォメーション・センター 230, 232, 235
DB2 for Linux (S/390) 82
Java (UNIX) 87
Java 開発キット 90
JDK (UNIX) 87
インストール方式
UNIX 51
Windows 51
インターフェース言語 218
変更
UNIX 218
Windows 217
インフォメーション・センター
インストール 230, 232, 235
ウェアハウジング
サンプル・データベース 165
応答ファイル
インストール
データベース・パーティション・サーバー 145
オンライン
ヘルプへのアクセス 248

[カ行]

カーネル構成パラメーター
変更
HP-UX 93
Linux 95
Solaris オペレーティング環境 96
HP-UX 94
仮想インターフェース・アーキテクチャー 73
カタログ
データベース 197
名前付きパイプ 196
ホスト・データベース
DB2 Connect 197
NetBIOS ノード 195
TCP/IP ノード 194
各国語
表示
db2setup 220
キーボード・ショートカット
サポート 253
規則
パスワード 149
クライアント
概要 7
サーバー接続 193
Administration Client 9
Application Development 10
Run-Time Client 9
Run-Time Lite 8
クライアント構成
サポートされていない 183
サポートされている 183
クライアント・サーバー通信
接続, CLP を使用したテスト 199
グループ
選択 65
グループ ID
作成 91
言語 ID
DB2 セットアップ・ウィザード 219
検査
DB2 のインストール
ファースト・ステップを使用した 165
コード・ページ
サポートされている 218
更新
ノード構成ファイル 157
HTML 資料 239
構成
クライアントからサーバーへの接続
構成アシスタント (CA) 187
コマンド行プロセッサ
(CLP) 193
構成アシスタント
ディスクバリー機能 191
構成アシスタント (CA)
構成
クライアントからサーバーへの接続 187
データベース接続, 一般 188
テスト
データベース接続 200
高速コミュニケーション・マネージャー (FCM)
概要 73

高速コミュニケーション・マネージャー
(FCM) (続き)
データベース・パーティション・サー
バー間の通信の使用可能化 158
コピー
DB2 CD の内容の 100
コマンド
バックアップ 25
catalog database 197
catalog netbios 195
catalog npipe 196
catalog tcpip 194
db2ckmig 28
db2iupdt 38, 44
db2nchg 71
db2sampl 162
db2setup 178
db2start 58, 199
コマンド行プロセッサ (CLP)
インストールの検査 162
クライアントからサーバーへの接続の
構成 193
データベースのカatalog 197
ノードのカatalog 194
コマンド・ヘルプ
呼び出し 250

[サ行]

サーバー
クライアント接続 193
サポートされている構成
クライアント 183
システム管理者グループ
DB2
Windows 58
システム構成
DB2 の移行前の設定の記録 26
使用可能化
コントロール・センター管理の
UNIX 161
除去
フィックスバック 213
DAS 208
DB2
UNIX 207
Windows 205
資料
表示 238
身体障害 253
診断エラー・レベル
DB2 移行前の変更 27
制限
バージョン 8
SNA 185

製品の概要
DB2 UDB Enterprise Server Edition 3
DB2 UDB Express 5
DB2 Workgroup Server Edition 4
セキュリティ
ユーザー・グループ 150
NIS インストールの注意点 62
接続
プロファイルを使用してデータベース
への 190
接続のテスト
クライアント・サーバー 199
セットアップ
通知リスト 149
連絡先リスト 149

[タ行]

チュートリアル 251
トラブルシューティングと問題判別
252
追加
データベース
手動 188
通信
アドレス 86
高速コミュニケーション・マネージャ
ー 86
通知リスト
セットアップ 149
データベース
移行 32, 40
カatalog 197
検査
移行できる状態にあることの 28
構成 200
新規システムへの移行 34, 42
DB2 移行前のバックアップ 25
データベース接続
構成
構成アシスタント (CA) を使用し
た 188
ディスクバリアーを使用した 191
プロファイルを使用した 190
テスト 200
データベースの手動による追加、構成アシ
スタント (CA) 188
データベース・パーティション・サーバー
通信の使用可能化 158
Windows でのインストール 128
ディスクバリアー機能
データベース接続の構成 191
ディスク要件
UNIX 61
Windows 61

ディレクトリー・スキーマ
拡張
Windows 2000 および Windows
.NET での 87
テスト
データベース接続 200
テストの考慮事項
移行 21
ドット 10 進数の構文図 254
トラブルシューティング
オンライン情報 252
チュートリアル 252

[ナ行]

認証
Kerberos 59
ネットワーク情報サービス (NIS)
インストールの注意点 62
ネットワーク・ファイル・システム (NFS)
操作の検査
AIX 100
ノード
FCM デーモン 86
ノード構成ファイル
説明 151

[ハ行]

バージョン 8 における制限
SNA サポート 185
パーティション・データベース環境
移行 21
パーティション・データベース・サーバー
インストール 164
インストールの検査
Windows 164
パスワード
規則 149
保守 149
表スペース
移行の制約事項 17
ファースト・ステップ
検査
DB2 のインストール 165
ファイル・システム
パーティション DB2 サーバー用の作
成
Linux 107
Solaris オペレーティング環境 109
ファイル・セット
説明 86
db2fcmdm デーモン 86
フィックスバック
除去 213

フィックスバック (続き)

適用 161

プロファイル

構成

データベース接続 190

ヘルプ

コマンド

呼び出し 250

表示 238, 240

メッセージ

呼び出し 250

SQL ステートメント

呼び出し 251

変更

カーネル・パラメーター

HP-UX 93

Linux 95

Solaris オペレーティング環境 96

ポート範囲

可用性

UNIX 144

ポート範囲の検査

可用性

UNIX 144

Windows 127

ポート番号

範囲の可用性

Windows 127

保守

パスワード 149

[マ行]

マウント

CD-ROM

AIX 223

HP-UX 224

Linux 225

Solaris オペレーティング環境 225

メッセージ・ヘルプ

呼び出し 250

メモリー要件

UNIX 61

Windows 61

問題判別

オンライン情報 252

チュートリアル 252

[ヤ行]

ユーザー

パーティション DB2 サーバー用の作成

AIX 112

HP-UX 113

ユーザー (続き)

パーティション DB2 サーバー用の作成 (続き)

Linux 115

Solaris オペレーティング環境 116

ユーザー ID

作成 91

選択 65

ユーザー特権、Windows 57

ユーザー・アカウント

インストールに必要な 68

DB2 クライアント 171

ユーザー・グループ

セキュリティ 150

呼び出し

コマンド・ヘルプ 250

メッセージ・ヘルプ 250

SQL ステートメント・ヘルプ 251

[ラ行]

リモート

コマンド、UNIX での使用可能化 160

例

リモート・データベースへの接続 199

レジストリー

アクセスの検査 163

連絡先リスト

セットアップ 149

ロケール

サポートされている 218

A

Administration Client

オペレーティング・システム 9

概要 9

AIX

インストール

パーティション DB2 サーバー 55

DB2 クライアント 173

DB2 サーバー 54

DB2 サーバーの要件 74

環境設定の更新 96

検査

NFS 稼働の 100

作成

必要なユーザー、パーティションでの DB2 サーバーのインストールに 112

DB2 ホーム・ファイル・システム、パーティション・データベース・システム用の 102

64 ビット

移行 44

AIX (続き)

CD-ROM のマウント 223

ESE ワークステーションへのコマンドの配布 99

Application Development Client

概要 10

C

CD-ROM

マウント

AIX 223

HP-UX 224

Linux 225

Solaris オペレーティング環境 225

D

DB2

移行

概要 32, 40

サーバー・オフラインの取得 29

システム構成設定値 26

診断エラー・レベルの変更 27

推奨事項 17

スペースの考慮事項 19

制約事項 15

データベースのバックアップ 25

インスタンスの停止

UNIX 208

インストール

インストールの検査 162

最新フィックスバックの適用 161

UNIX 51

Windows 51

インストール方式 51

インターフェース言語 218

コード・ページ 218

除去

UNIX 207

パーティション・インストール

AIX 環境設定の更新 96

ロケール 218

DB2 Administration Server の停止

UNIX 207

DB2 Administration Server (DAS)

移行 39

除去 208

停止 207

DB2 CD-ROM

使用コンピューターへのコピー 100

DB2 Enterprise Server Edition

インストール

Windows 71

概要 3

DB2 Enterprise Server Edition (続き)
仮想インターフェース・アーキテクチャー 73
「DB2 Migrate Now!」 Web サイト 15
DB2 UDB Express
概要 5
DB2 UDB バージョン 8.2
移行 15
DB2 Workgroup Server Edition
概要 4
DB2 インスタンス
除去 209
停止 208
DB2 インフォメーション・センター 228
呼び出し 238
DB2 クライアント
インストール
UNIX 178
Windows 169, 171
インストール要件
AIX 173
HP-UX 174
Linux 175
Solaris オペレーティング環境 176
Windows 169
概要 7
カタログ
名前付きパイプ・ノード 196
NetBIOS ノード 195
TCP/IP ノード 194
ユーザー・アカウント 171
DB2 グループ
UNIX 56
DB2 サーバー
移行
パーティション・データベース環境
21
インストール
Windows 53
インストール要件
AIX 74
HP-UX 77
Linux 79
Solaris オペレーティング環境 83
Windows 63
オフラインの取得 29
作成
グループ ID 91
ユーザー ID 91
パーティション
AIX でのインストール 55
Windows 環境の準備 71
Windows でのインストール 54
AIX でのインストール 54
Windows でのインストール 119
DB2 システム管理者グループ 58

DB2 製品
除去
UNIX 210
DB2 セットアップ・ウィザード
言語 ID 219
データベース・パーティション・サーバーのインストール 128
UNIX 135
DB2 サーバーのインストール
UNIX 132
DB2 チュートリアル 251
DB2 の資料
PDF ファイルの印刷 247
DB2 バージョン 7 64 ビット・インスタンスを DB2 バージョン 8 に
AIX バージョン 4
移行 46
DB2 バージョン 8 クライアント
DB2 UDB バージョン 7 サーバーにアクセスする 10
DB2 ブックの注文 248
DB2 ホーム・ファイル・システム
パーティション・データベース・システム
AIX 102
HP-UX 105
DB2 ユーザー
UNIX 56
db2fcmdm デーモン
説明 86
db2nodes.cfg
netname フィールドの指定 71
db2nodes.cfg ファイル 151
db2setup
表示
各国語 220

E

ESE ワークステーション 99
explain 表
移行 22

F

fenced ユーザー
定義 91

H

HP-UX
インストール
DB2 クライアント 174
インストール要件
DB2 サーバー 77

HP-UX (続き)
カーネル・パラメーターの変更 93
作成
必要なユーザー、パーティションでの DB2 のインストールに 113
DB2 ホーム・ファイル・システム、パーティション・データベース・システム用の 105
64 ビットへの移行 44
CD-ROM のマウント 224
HP-UX カーネル構成パラメーター 94
HTML 資料
更新 239

J

Java
インストールの注意点 (UNIX) 87
Java 開発キット
インストール 90
JDK
インストールの注意点 (UNIX) 87

K

Kerberos 認証 59

L

Linux
インストール
DB2 クライアント 175
インストール要件
DB2 サーバー 79
作成
パーティション DB2 サーバーの必要ユーザー 115
パーティション DB2 サーバー用ファイル・システム 107
変更
カーネル・パラメーター 95
CD-ROM のマウント 225

N

NFS (ネットワーク・ファイル・システム)
操作の検査
AIX 100
NIS (ネットワーク情報サービス)
インストールの注意点 62

R

Run-Time Client

概要 9

Run-Time Client Lite

概要 8

S

SNA サポート

バージョン 8 における制限 185

Solaris オペレーティング環境

インストール

要件、DB2 サーバー 83

DB2 クライアント 176

カーネル・パラメーターの変更 96

作成

必要ユーザー、パーティション

DB2 サーバー 116

ファイル・システム、パーティシ

ョン DB2 サーバー 109

64 ビットへの移行 44

CD-ROM のマウント 225

SQL ステートメント・ヘルプ

呼び出し 251

S/390、DB2 for Linux のインストール

82

U

UNIX

移行

インスタンス 38

DB2 37

インストール

データベース・パーティション・サ
ーバーの、応答ファイルを使用し
た 145

データベース・パーティション・サ
ーバーの、DB2 セットアップ・
ウィザードを使用した 135

DB2 クライアント 178

DB2 サーバーの、DB2 セットアッ
プ・ウィザードを使用した 132

使用可能化

コントロール・センター管理の
161

リモート・コマンド 160

除去

DB2 207

DB2 インスタンス 209

DB2 製品 210

ノード構成ファイルの更新 157

DB2 インターフェース言語の変更
218

DB2 グループ 56

UNIX (続き)

DB2 ユーザー 56

W

Windows

移行

DB2 31

インストール

インスタンス所有データベース・パ
ーティション・サーバー 122

データベース・パーティション・サ
ーバー 128

パーティション DB2 サーバー 54

DB2 クライアント 169, 171

DB2 サーバー 53

DB2 セットアップ・ウィザードの
使用による DB2 サーバーの
119

インストール要件

DB2 サーバー 63

検査

パーティション・データベース・サ
ーバーのインストール 164

高速コミュニケーション・マネージャ
ー 73

ディレクトリー・スキーマの拡張

Windows 2000 および Windows
Server 2003 87

Windows Server 2003 87

ユーザー権限の付与 57

DB2 インターフェース言語の変更
217

DB2 システム管理者グループ 58

DB2 のインストール

ユーザー・アカウント 68

DB2 の除去 205

Windows 64 ビット

移行 36

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT2TRJA

Printed in Japan

GC88-9148-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

(1P) P/N: CT2TRJA



Spine information:



IBM® DB2.™ Universal
Database

DB2 サーバー機能 概説およびインストール

バージョン 8.2